

2007年度
活動報告書

The Liberal Arts

2007年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

教養研究センター開所6年目を迎えて

横山千晶

2007年7月に教養研究センターは開所6年目を迎えました。その意味で、本年度は今までの活動を振り返り、将来を見据える年となりました。そのためにまず行ったことは、今までの活動の振り返りと内部評価を経た上での外部評価です。組織は活動の枠組みとして機能しているか。今までの活動は、開所当時の目的を果たしているか。現在の規程は活動内容と齟齬がないか。まずはそれら一つひとつを内部で検討し、必要に応じて改正を加えながら、活動の効率的な実施を目指しました。その結果、研究活動と成果の報告、および実践による効果確認をよりスムーズに行うために、今までの3セクション制(調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクション)に変わってプロジェクト制を採用することとなりました。

プロジェクト制の特徴は、今まで3つのセクションに分かれていた内容と過程、つまり「調査・研究」、「交流・連携」、「広報・発信」を分断することなく、それぞれのプロジェクトが責任もって行うことにあります。2007年度は組織の見直しの移行時期として、今まで各セクションに属していた活動を独立した事業(「プロジェクト」とし、必要とされる新たなプロジェクトを加えて実施しました。こうしてその有効性を確かめると同時に、活動に即した規程の作成を目指したのです。また、プロジェクトは短期のものから中・長期的なものまでを視座に入れ、臨機応変に教職員や学生の意見を吸い上げていくシステムを構築することとしました。この方式によって、より多彩な事業が展開されることが可能となり、多くの所員の協力を得ることができるようになったと同時にそれらの協力を必要とする課題が提示されたこととなります。

この新しい構成のもとで各プロジェクトを1年間動かした末に、2008年2月に内部評価を受け、続く3月に外部評価を受けました。2008年度は内外の評価で頂戴したさまざまな意見と助言を反映しつつ、新規に沿って活動を進めていくこととなります。では、この1年間に行ってきたプロジェクトの中の主な4つの事業を紹介しつつ、これからの教養研究センターの展望もあわせて見渡してみたいと思います。

組織の改正に伴い、より円滑な研究活動が可能となりますが、その土台となるのが、教養研究センターの3つの研究組織、「特定研究」、「基盤研究」、「一般研究」です。2007年度は特定研究「超表象デジタル研究——表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築——」『21世紀型キャンパス構想——バリアフリー・キャンパスの構築をめざして——』の3年目であり、最終年でした。2008年度は外部に向けて、その成果報告会を開催すると同時に、実際に研究成果を実験授業として実践し、カリキュラム化をはかることを目指します。2007年度から実施に向けて着々と準備がすすめられているもののひとつが、実験授業「鶴岡セミナー：鶴岡に学ぶ『生命(いのち)』——心と体と頭と——」、および「現代の危機——宗教と民族問題」です。前者は2008年度の夏休みを利用して、鶴岡市と同市にある先端生命科学研究所と協力しながら「生命」をめぐって地元の豊かな文化と最先端の科学技術・科学観をつなげる作業を調査と議論によって徹底的に行う少人数セミナーです。この授業は同時に、今まで教養研究センターが取り組んできた極東証券寄付講座『生命の教養学』、および『アカデミック・スキルズ』で培ったノウハウを活かしています。後者はグローバルな問題として国際社会が直面する宗教問題、民族問題に真っ向から取り組む半期科目です。いずれの科目も特定研究の成果を試す場であり、2008年度以降の実践で十分な効果が確認された暁には、正規授業化を目指します。

ふたつの基盤研究、「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」と「身体知プロジェクト」も、例年通りの活発な研究活動を展開しました。前者は「4年間を見据えた教養教育に関するカリキュラム研究」をテーマとして、慶應義塾大学の現行カリキュラムを分析し、国内外の他大学のカリキュラムと比較しながら、その長・短所を探りつつ、問題提起とモデルの提案を行うことを目標として活動を続けました。その結果2008年度は過去の研究成果と基盤研究の提案が媒介のひとつとなって、日吉キャンパスでは日吉カリキュラム検討委員会が発足されることとなりました。一方基盤研究「身体知プロジェクト」では、身体知をめぐる月例研究会を開催し、同時に秋学期に実験授業「アートで体をひらく・心をひらく」を開講することで、研究と実践の両輪を動かしました。同時に、教養研究センターの未来先導基金採択事業「声を考える」プロジェクトを実施し、慶應義塾大学における身体知教育のあり方を模索・実践し、それをもとに身体知教育のモデル構築を進めました。2008年度は今までの研究と実践をもとに、本の出版を目指します。詳しくは基盤研究の各項目をご覧ください。

2007年度に新たに始動した活動は、教員のためのサポートワークショップです。ここでは研究者としての教員の活動をサポートし、その活動を教育に効率的に活用するモデルと方法をワークショップ形式で提供し、同時に学生の置かれた状況を知ることで、教育の伝達方法を考え直すさまざまな情報を提供しました。具体的には「メディア・リテラシーワークショップ」、「keio.jp 活用法ワークショップ」、「社会調査法入門ワークショップ」、「学生を知るワークショップ」です。これらのワークショップは他キャンパスの研究者や大学内の各関連機関とのコラボレーションのもとに行われましたが、ゆくゆくはこのコラボレーションを土台にして「学びの場プロジェクト」へと発展させていく予定です。これは教員・学生・図書館などの各機関を結んで「学びの場」としての大学学習環境を整えていくプロジェクトです。他キャンパス、図書館、学事センター、学生総合センター、ITC やほかの関連組織にも協力してもらい、学生・職員・教員が一緒になって学びのあり方そのものを根本的にとらえなおし、新たに構築していくことがその目標です。

2007年は極東証券寄附講座『アカデミック・スキルズ』の充実も図りました。今までの『アカデミック・スキルズ』の発展形として、身につけた技術を応用する『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——講義を究める』、『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——テーマを究める』を立ち上げました。続く目標は身につけた技術を十分に応用することができるだけでなく、そのスキルを伝達できる人間を育てることです。いわゆる「半学半教」を取り入れたピア・メンターシステムの導入ですが、ここでは『アカデミック・スキルズ』を修了した学部上級生が下級生を学問的に導いていくプログラムを上でも述べた「学びの場プロジェクト」の中に位置づけて、アカデミック・スキルズ伝達の間へとつなげていく予定です。

極東証券寄附講座『生命の教養学』も2007年で5年目を迎えました。「生命」は非常に重要な教養のテーマとして、教養研究センターがこれからも取り組み続ける必要がありますが、同時に新たな教養のコンテンツを考える時期にも来ています。教養とは常に時代の要請する新たな知です。その意味で現在必要とされる知は「よりよく生きる（環境問題やこころとからだの問題、および地球市民としてのアイデンティティなど）」ための生命観です。それ以外にも現在のグローバリゼーション社会や情報社会の中でどのように自分の立ち位置を築いていくのか、ということも重要な観点です。常に新しい切り口から教養を考えることも終わることのない課題です。

2008年度から教養研究センターは新たなスタートを切ります。ますます皆様方の協力とご鞭撻を賜れますように、心からお願いする次第です。どうぞこのセンターの将来を暖かく見守ってください。

目 次

I. はじめに	03
II. 2007 年度活動報告	
1. 教養研究センター運営委員会	06
2. コーディネート・オフィス	
1) 研究企画ボード	08
2) 広報・発信	14
3) 外部評価	15
3. プロジェクト	
1)* 研究関連プロジェクト	
特定研究	17
基盤研究	33
一般研究	40
2)* 教育開発関連プロジェクト	
極東証券寄附講座運営委員会	48
身体知研究実験授業	52
教員のためのサポート	53
3)* 交流・連携関連プロジェクト	
日吉行事企画委員会 (HAPP)	56
日吉キャンパス公開講座運営委員会	57
III. 資料編	
1. 教養研究センター規程	59
2. 教養研究センター運営委員会委員	61
3. 教養研究センターコーディネート・オフィス	62
4. 教養研究センター所員・研究員	63
5. 2007 年度の主な活動記録	66
IV. 終わりに	68

※ 1) ～ 3) の分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。
1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター運営委員会

2007年度の運営委員会は、10月23日と3月12日に来往舎において開催された。このほか、回覧審議が6月に行われた。

第1回運営委員会

研究員（非常勤）の任用に関して回覧審議が行われ、承認された。

第2回運営委員会

西村常任理事のあいさつに続いて議事に入り、2007年度前期の活動について、各担当から大略次のとおり報告があった。

前回の運営委員会での承認に基づき、当センターは2007年度からプロジェクトベースで活動を展開している。センターにおける研究活動を、Web上で公開される Hiyoshi Research Portfolio に載せるため、ポスターを作成中である。日吉行事企画委員会（HAPP）の企画として新入生歓迎行事を行ったが、例年行っていた能楽や舞踏公演などの大がかりな行事は、来往舎施設の事情により開催できなかった。オムニバス授業「生命の教養学」は「誕生と死——その間にある君たちへ」をテーマとして、春学期に開講した。新たな試みとして、“サイエンス・カフェ”を開始した。これは、研究者が自身の研究領域について、リラックスした空間で老若を問わず一般の参加者に分かりやすく話すものである。同じく一般に公開された日吉キャンパス公開講座の受講者は例年よりも多く、300名を越えた。テーマは「モノを創る」。基盤研究「教育カリキュラム研究」では一昨年来の研究を報告書『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——改革への処方箋——』にまとめ、これに関するシンポジウムを開催した。基盤研究「身体知プロジェクト」では、外部からの哲学や美術の研究者を含めた理論研究とともに実験授業も展開している。また、このプロジェクトから義塾の未来先導基金に「声プロジェクト」を応募し、採択された。ここでは音楽、ドラマ、謡曲による「声プロジェクト」を進める。学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」は、3年計画の最終年度にあたる。学士課程の教養教育のモデルを作ることが目的で、活動の基本は、①コンテンツ研究ユニット（授業等の諸方法の検討）、②学習環境構築研究ユニット（学びの場所・環境等の試みの検討）、③超表象デジタル化研究ユニット（研究に関する情報技術開発の検討）——

であった。①の成果としては、研究成果報告書において教養教育モデルのプロトタイプについて詳説し、②に関しては三田の商店街の中に家屋を借用して各種勉強会を行っており、③については hydi (hyper digital interface) が本格運用に入っている。この他、新たな事業として、“教員サポートプロジェクト”を開始した。より良い教育と、教員に対する研究支援を目的とする。メディアセンターとの共催によるワークショップ「メディアセンター・サービス活用術——少人数セミナー授業での実践ワークショップ」のほか、各種企画を準備中である。

続いて審議事項に入った。まず、所員、兼任研究員の登録が承認され、コーディネーター、極東証券寄附講座運営委員会委員ならびに日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長・同委員の委嘱が承認された。また、センター規程の見直し案が提示され、意見が交換された。

議題

●報告事項

1. 『2006年度活動報告書』について
2. 2007年度前期活動報告

●審議事項

1. 人事について
 - (1) 所員登録
 - (2) 兼任研究員登録
 - (3) コーディネーター委嘱
 - (4) 極東証券寄附講座運営委員会委員委嘱
 - (5) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長・委員委嘱
2. センター規程改正について

●配布資料

- ①『2006年度活動報告書』
- ②2007年度春学期活動記録
- ③『Newsletter』No.10
- ④各種企画
- ⑤「教養研究センター選書」応募要項(2007年度)
- ⑥日吉行事企画委員会（HAPP）2007年度入学歓迎行事
- ⑦2007年度極東証券寄附講座時間割表・生命の教養学日程表
- ⑧2007年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「モノを創る」
- ⑨基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研

究]メンバー表

⑩基盤研究「身体知プロジェクト」メンバー表

⑪教員サポートワークショップ「メディアセンター・サービス活用術」

⑫教養研究センター人事(案)

⑬「大学教養研究センター規程」改正条文新旧対照表(案)

第3回運営委員会

2007年度後期の活動について、各担当から大略次のとおり報告があった。

センターの外部評価を受けるための活動報告会を、評価委員6人を招いて行った。センター選書は、本年度は採択を見送った。センターのロゴを公募した。今年度前期に始めた教員サポートプロジェクトは、後期は文献管理ソフト利用法、社会調査法、「keio.jp」活用法、発達障害を抱える学生との関わり方等について行った。基盤研究「教育カリキュラム研究」は第3期目で、少人数セミナーの実施状況、副専攻制の可能性および授業評価問題の検討を進めている。基盤研究「身体知プロジェクト」では実験授業を、「アートを通じて体をひらく、心をひらく」を主題として行った。学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」は、9月の成果報告提出後、文字媒体の最終報告書を編集中であり、併せて3DCGによる報告を作成中。また、間もなく、活動グループごとのポスター展を開く。この成果を発展させた企画「鶴岡セミナー」を2008年9月に行う予定である。サイエンス・カフェは後期も継続中で、「コケを探して」、「融合する脳と機械」および「ウニ!すし?!」を企画した。アカデミック・スキルズではプレゼンテーション・コンペティションを例年どおり行い、受講した学生の論文集も制作する。今回の日吉キャンパス公開講座は、10～30歳代の受講者が増加した。日吉行事企画委員会(HAPP)では、春学期に諸事情により行えなかった企画を「特別企画」として秋学期に実施した。

続いて審議事項に入った。まず、人事については、3月31日付けで定年退職のため退任する副所長・中島陽子君の後任として鈴木忠君の推薦が承認された(任期:2008年9月30日まで)。さらに、2008年4月に任期を更新または新任の所員・兼任研究員の推薦がなされ、承認された。センター規程の改正案については、一部の字句を修正のうえ承認

された。最後に2008年度のセンターの諸事業計画案および予算案が承認された。

議題

●報告事項

1. 2007年度後期活動報告について

●審議事項

1. センター人事について

(1) 副所長人事

(2) 所員・兼任研究員

2. センター規程の改正について

3. 2008年度センター事業計画(プロジェクト)(案)について

4. 2008年度予算(案)について

●配布資料

① 2007年度後期活動記録

②『Newsletter』No.11

③ 2008年度極東証券寄附講座

④センター人事(案)

⑤「大学教養研究センター規程」改正条文新旧対照表(案)

⑥ 2008年度センター事業計画(プロジェクト)(案)

⑦日吉キャンパス公開講座(春学期開講)(案)

⑧鶴岡セミナー

⑨ 2008年度HAPP入学歓迎行事

慶應義塾大学教養研究センターの運営業務はコーディネート・オフィスが担っているが、研究企画ボードは、その中核をなし、教養研究センターの活動全般についての検討を行う機関である。本年度は教養研究センター開所6年目を迎え、教養研究センターのミッションのよりよい遂行のために今までの組織のあり方を見直す一環として、研究企画ボードの役割と構成の見直しを図った。2007年度は新しい組織の試行期間とし、年度終了時には新組織のもとで当初の成果が期待できると判断された。これにともない、規程の改定も行われ、改正案が提示された。2008年度初頭の大学評議委員会でこの改正案が認められると同時に、新しい教養研究センターの組織が正式に活動を開始することとなる。

(1) 従来のコーディネート・オフィスの位置づけについて

2006年度、教養研究センターにはセンター運営の実務業務を担うコーディネート・オフィスが置かれているが、コーディネート・オフィスのメンバーはセンター所員および職員の中から委嘱されたコーディネーターによって構成されている。また、コーディネート・オフィスには、研究企画ボードを中心として調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクションの3セクションが設置されている。さらに日吉行事企画委員会(HAPP: Hiyoshi Art and Performance Project)、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の3つの委員会が研究企画ボードとの密接な連携の下で活動を展開している。

中核となる研究企画ボードはセンター所長、3名の副所長、センター事務長、センター所員・職員の中から委嘱された13名のコーディネーターの計18名で構成されている。その役割は、調査・研究活動の企画・運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に上記の各セクション、各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスを図る調整機能も併せ持っている。

各セクションの責任者には、3名の副所長が各1名ずつ当たり、研究企画ボードと連絡を取りつつ活動を展開する。調査・研究セクションではセンター

の調査・研究活動の円滑な進展を支えるための活動とともに、研究・教育の基盤となる教員サポート活動を担当している。交流・連携セクションでは義塾内外に向けた行事の企画・運営、内外機関との交流・連携の促進のための活動を担っている。広報・発信セクションはセンターの活動報告書、シンポジウムなどの報告書、「ニューズレター」、「センター・レポート」などの編集・発行、センター刊行物の企画・発行、HPの作成と管理を行っている。

(2) コーディネート・オフィスの見直しについて

1. 概要

(1)で挙げた活動のより円滑な推進と遂行のために、開所6年目を迎えた2007年度は以下のように組織の見直しを図った。

- 1) 現在の研究企画ボードをコーディネート・オフィスとし、教養研究センター運営委員会の下におく。
- 2) 今まで行われていた各事業はそのそれぞれが「調査・研究」、「交流・連携」、および「広報・発信」の役割を担うものであるため、従来の3つのセクションを改組し、それぞれの事業(プロジェクト)の中でこれら3つの機能を果たせるようにしていく。つまり、研究および実践の各プロジェクトは、その中で研究と交流・連携を図り、その成果を発信するところまでの役割を担う。
- 3) プロジェクトは各事業ごとのグループによって遂行される。グループはメンバーと、プロジェクト責任者からなる。
- 4) プロジェクト責任者はコーディネーターとしてコーディネート・オフィスのメンバーとなる。なおそれ以外に、各プロジェクトには、所長および副所長のうち、1名以上が関わるものとする。
- 5) 以上より、コーディネート・オフィスは所長・副所長、事務長、各事業(プロジェクト)責任者としてのコーディネーターおよび所長が必要と認められた者をもって構成される。
- 6) コーディネート・オフィスは必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託するものとする。2007年度現在、これらの委員会は、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の3つである。
- 7) 同時に教養研究センター運営委員会では、必要に応じて特別委員会を設置し、教養研究センターに関わる審議事項の一部について、審議を付託すること

ができるようにする。

8) 教養研究センターの活動は組織とコンテンツを含めて、運営委員会、内部および外部の評価を受けるものとする。

2. 目的

次にこのような組織変更の目的を以下に述べてい。

1) コーディネート・オフィスの機能の明確化

教養研究センター運営委員会、コーディネート・オフィス、およびコーディネーターの役割と位置づけを明確化することにより、運営の透明さとよりよい意思の疎通を目指した。

2) フレキシブルな事業形態の実現

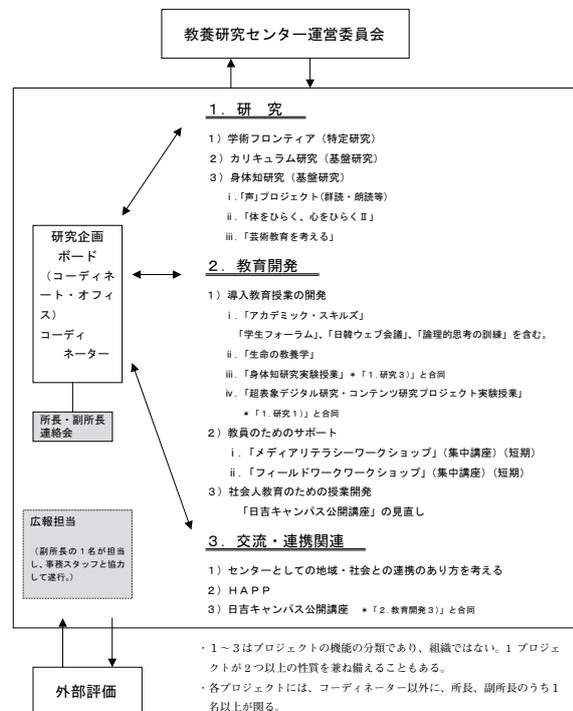
教養とは時代の要請するものであり、同時にそれぞれの時代の社会に提案されていくものである。よって、事業の中には短期に解決しなくてはならないものもあれば、じっくりと腰を据えて取り組む、あるいは長期にわたって動向を見守ることが必要な研究や調査もあることだろう。それぞれの事業を画一的な期間や手法に限ることなく、よりフレキシブルにプロジェクトやプログラムとして計画し、遂行する仕組みを作ることが肝要である。同時に、それぞれの事業の中で、研究・調査・交流・連携を展開し、発信・評価・フィードバックまでを責任もって行っていくことが成果につながるものと思われる。

3) より多くの人々の関与を促す仕組み

同時に一人でも多くの人々の声を拾い上げ、実現の場を提供することも大切である。そのためにも教養研究センターは所員のみならず、慶應義塾に関わる教職員と学生たちの声に絶えず耳を傾けていく必要がある。それらの声の中から新たなプロジェクトを立ち上げ、より多くの人々に関わってもらうことで、慶應義塾全体を巻き込んだ「知の共有地」を作り出していくことがその最終目標である。

3. 新しい組織については以下の表を参照されたい。

大学教養研究センター組織構成・プロジェクト



(3) 2007年度の主な事業

(2)で述べられた組織の改変に伴い、2007年度はプロジェクトベースの活動を展開した。また(2)3の表であげられているように、プロジェクトは大きく1. 研究、2. 教育開発、および3. 交流・連携関係の機能を持つものに分類されるが、その各機能がオーバーラップするものも多数ある。

教養研究センターのさまざまな活動の詳細は、本報告書の各項目で紹介されているのみならず、ホームページ (<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-art>)でも随時報告されている。参照されたい。

1) 教養研究センター各プロジェクトとの連携

教養研究センター主催の各行事や事業は、企画ボード(コーディネート・オフィス)でその内容を話し合い、同時に企画ボードのコーディネーターの連携のもとに開催されている。研究も含め、各活動については、該当セクションの報告を参照されたい。

2) 第8回教養研究センターシンポジウムの開催

2005年から2006年度にかけて行われた基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」の公開成果

報告会「改革への処方箋」が2007年6月30日に開催された。教養研究センター基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」では、2005年度から2年間にわたり、月例研究会と合宿研究会を重ね、現状のカリキュラムに関する問題整理と課題分析を行ってきた。2006年度には学部学生を対象に大規模なアンケートを実施し、学生の視点からみる大学カリキュラムの調査を行った。これら2年に及ぶ研究成果は報告書『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——改革への処方箋——』にまとめられている。今回のシンポジウムでは、実際にこの研究に関わった研究会メンバーからの成果報告が行われ、続いて活発な議論が展開された。まず伊藤行雄研究会座長(経済学部)から「本研究の目的と提言の意図」と「日吉共通科目のカリキュラムを運営・検討する組織の設立について」説明があったあと、木俣章(法学部)の司会のもと、以下の報告があった。

村山光義(体育研究所)「成績評価に関する実態調査報告」

坂本 光(文学部)「習熟度別クラス編成の整備」
萩原眞一(理工学部)「学部カリキュラムの比較分析」

佐藤 望(商学部)「学生アンケート調査結果」

その後ディスカッションの西村太良常任理事と朝吹亮二日吉主任(法学部)からのコメントを受け、活発な議論に移った。ここで展開された議論は、2008年度の基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」に活かされていくこととなる。

3) 教養研究センター設置科目「生命の教養学」(春学期)、「アカデミック・スキルズⅠ」(春学期)「アカデミック・スキルズⅡ」、および「アカデミック・スキルズⅢ」(春学期)「アカデミック・スキルズⅣ」(秋学期)の開講

2007年度は、教養研究センター設置科目として、極東証券寄附講座「生命の教養学」、同寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ／Ⅲ・Ⅳ」の2種類の科目を開講した。前者は「生命の教養学」のシリーズとして、「誕生と死——その間にいる君たちへ」の副題のもとに、さまざまな分野の講師陣を招いてのオムニバス講座として展開されたものである。後者の「アカデミック・スキルズ」は、教養研究センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクト、「リベラルアーツ教育

の総合モデル構築」との連携のもとで、2003年度実験授業として開講した「スタディ・スキルズ」を前身としている。2004年度に「アカデミック・スキルズ」と改名、同時に文学部・法学部・商学部で正規科目となったものである。2004年度の履修希望者の数を踏まえ、2005年度はひとつクラスを増設し、3コマを設置し、看護医療学部にて正規科目として単位化が図られた。2007年度は医学部・理工学部でも正規科目として単位化が図られた。本年度は「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」、あるいは各学部で開講されている少人数セミナーの既習者で、すでに基礎的なアカデミック・スキルズを身につけた学生を対象に、応用編の「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——講義を究める」と「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——テーマを究める」各1コマを開講した。なお、これらの設置科目は「極東証券寄附講座運営委員会」によって企画・運営されている。授業の内容などの詳細は、同運営委員会の報告の項を参照されたい。

4) サイエンス・カフェ開催

極東証券寄附講座「生命の教養学」の企画の一部として2007年度から開催している催しが、サイエンス・カフェである。このカフェでは最先端の自然科学系統の研究を、若い人々にもわかりやすい方法で伝え、内容に親しんでもらうことを第一の目標に、若手の研究者が中心となって開催したものである。詳しくは、極東証券寄附講座運営委員会の報告の項を参照されたい。

5) 新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾日吉キャンパス公開講座の実施

日吉行事企画委員会(HAPP)、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員会の各委員会との連携のもとで、一連の新入生歓迎行事および公募企画行事、極東証券寄附講座「誕生と死——その間にいる君たちへ」、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「モノをつくる」の企画および運営に参画した。

6) 一般研究プロジェクトの選定

一般研究(共同研究)とは、センターの目的に沿った内容の共同研究で、外部資金などを獲得していて既に一定の業績をあげている、あるいは、将来、独創的な成果が期待できる、プロジェクトのことであ

る。2007年度は教養研究センターの所員に対して公募され、選定された以下の一般研究プロジェクトが調査・研究を行った（カッコ内は研究代表者と慶應義塾における所属）。なお、公募は単年度ごとに2回まで継続申請ができる。

- ・「大学生の情報検索リテラシーの形成過程の解明」(初年度)(倉田敬子・法学部)
- ・「可積分系の代数解析学」(初年度)(池田薫・経済学部)
- ・「言語と一般認知の発達研究：動詞を用いたイベントのカテゴリー化」(初年次)(辻幸夫・法学部)
- ・「意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築」(初年次)(小原京子・理工学部)
- ・「胚発生三次元教育学術情報データベースの開発」(初年次)(堀田耕司・理工学部)
- ・「Keio NetMath 構築による数理科学の総合的研究」(2年目)(戸瀬信之・経済学部)
- ・「総合的視野から見た環境問題解析と環境教育の試み」(2年目)(秋山豊子・法学部)

7) 国際会議への参加および発表

海外での教育とカリキュラム研究の動向を知ると同時に、教養研究センターで展開されているさまざまな試みについて紹介し、批評を受けるために2007年度は以下の国際会議に参加した。

- ・ International Conference on First-Year Experience (2007年7月9日～12日、ハワイ、ビッグ・アイランド)

本学会で特徴的であったのは、国際的に学生の親が高等教育のあり方に強く関わってきていることである。積極的な参加や興味は時として「ヘリコプター・ペアレント」のような弊害を生むこともある。学生間のファミリー・バリューの変化がどのように教育の質に影響を与えてきているのかは、日本の高等教育との比較においても類似点が見られ、興味深い。またピア・メンターシステムもさらなる展開を見せ、大学生生活や学問的な活動を含む初年次教育でのさまざまな分野で、学部生を活用する範囲が広がってきていることも顕著であった。

- ・ 2007年9月10日～13日 「芸術と福祉」国際会議(ヘルシンキ)

4th International Conference on the History of the Settlement Movement

7th International Conference on the History of the Arts and Crafts Movement

芸術教育と社会のあり方に関して所長の横山千晶が以下のテーマで発表を行った。

2007年9月12日

Chiaki Yokoyama, “The Japanese Folkcrafts (Mingei) Movement and the Education of Factory Workers.”

ここでは芸術を使つての社会教育のあり方と芸術と社会連携のあり方を20世紀初期の日本の例から論じたものである。

8) 教養教育関連のシンポジウムへの参加

- ・ 2008年1月25日 玉川大学コア・FYE教育センター主催

特色 GP シンポジウム「一年次教育の展開——高等教育における新たな伝統の確立を目指して」

事例報告 横山千晶「全身を使って考える——慶應義塾大学教養研究センターの導入教育と『身体知』」

本シンポジウムはコア・FYE教育センターを中核として1年次教育の全学実施を行っている玉川大学が主体となって行われたシンポジウムであり、教養研究センター所長の横山千晶がシンポジウムの事例報告者として参加を要請された。本報告では、慶應義塾大学教養研究センターにおける導入教育を身体知の面から紹介した。その後活発な質疑応答が交わされた。

9) 教育サポートプロジェクト——教員サポート・ワークショップの開催

FDを考える際に最も重要となる事項は、いかにして教員・職員が研究と教育を行いやすい環境を作り、同時にその環境の中で研究・教育を支援するスキルを身につけてもらうかということである。つまり、教育と研究のサポートとしてFDをとらえなおしたときに、以下の点を考慮していくことが必要となる。

- ・ 研究者として充実した研究を行えること
- ・ 研究したことを次世代へ伝える効果的な方法を模索し、紹介すること
- ・ さまざまな方法を実践してみるワークショップや実験授業を立ち上げてみる
- ・ 図書館、IT関係部署、学事センター、学生相談室などさまざまな学内の機関と協力すること

・学会発表の奨励など、成果を発表し、意見交換できる機会を作ること

このような点から、高等教育に携わる教員サポートのあり方と、教員のネットワーク作りの環境を構築する意味で、教養研究センターの教員サポートプロジェクトと提携して、2007年度は4つのワークショップを開催した。その際のポイントは以下の3点である。

- ・初等教育に対する教員の意識を喚起する
- ・教育上の課題の共有の場を作る
- ・その課題の解決法を考える

具体的なワークショップは以下のとおりである。

1. メディア・センター活用法
「少人数セミナー授業での実践的ワークショップ」
(2007年6月20日・25日、11月27日)
「文献管理ソフト RefWorks 利用法」
(2007年12月5日)
2. フィールドワーク・ワークショップ
「社会調査法——最初の一步」
(2007年11月13日・16日)
3. IT 活用法
「Keio.jp 利用法」(2007年12月12日・17日)
4. 学生を知るワークショップ
「発達障害を抱える学生への関わり方」
(2008年1月23日)

各ワークショップはメディア・センター、SFCの教員、慶應ITC、学生総合センターの協力を得て、慶應義塾大学の教職員(非常勤の教員を含む)を対象に行われたものである。

10) Hiyoshi Research Portfolio 2007 への参加

2007年12月7日(金)より、日吉研究支援センターHP内において開催された Hiyoshi Research Portfolio (HRP) 2007 に参加した。教養研究センターでは①慶應義塾大学の教育カリキュラム研究、②身体知プロジェクト、③「特定研究 超表象デジタル研究——表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築——」、④教員サポートプ

ロジェクト、⑤サイエンス・カフェ——極東証券寄附講座一般公開ゼミの5つのプロジェクトに関して、計12枚のパネルを作成し、主に2006年度後半から2007年度にかけての活動について発表した。

11) 座談会「日吉キャンパスにおける教養と研究・教育のこれから」

2008年1月に発行された『ニューズレター』第11号の特集企画「教養研究センター5周年記念座談会」として、村井純(常任理事)、朝吹亮二(法学部日吉主任)、羽田功(教養研究センター前所長)、横山千晶(教養研究センター所長)による座談会「日吉キャンパスにおける教養と研究・教育のこれから」が、佐藤望(教養研究センター副所長)の司会によって行われた。この座談会では教養研究センターの今までの歩みを振り返りつつ、大きく変わっていく大学の環境の中で、教養研究センターのこれからの目標と理想像を語り合った。詳細は『ニューズレター』第11号を参照のこと。

12) 教養研究センター・ロゴ・コンペティション

教養研究センターの活動を慶應義塾内外によりよく知ってもらい、教職員のみならず広く学生にもセンターの存在に親しんでもらうために、2007年度のホームページの更新を機会として、教養研究センターのロゴ・コンペティションを開催した。募集は広く塾員に呼びかけ、2007年9月25日(火)の締め切りまでに全部で12名17件の応募があった。どれも力作ぞろいで、審査は難航した。数回にわたる審査員の投票の結果、最優秀賞は、教養研究センターの「つなげる」機能に注目した、塾員の原田潤君の作成によるロゴに決定した。

原田君を含め入賞者は以下のとおり。

- 最優秀賞 原田 潤君(塾員)
- 佳作 木原佑介君(塾員)
- 佳作 大久保佐太郎君(経済学部3年)

表彰式は2007年11月29日に開催された。これからは教養研究センターのHP、および各活動の広報に最優秀賞をとった原田君のロゴが使われ、教養研究センターの役割をヴィジュアルに伝えてくれることとなる。

大学教養研究

月8日当時のもの)

最優秀賞(原田潤君)の作品

13) 内部評価・および外部評価の実施

教養研究センター開所6年目を過ぎたことを受け、内部・外部の評価を受けた。2008年2月5日はセンター活動報告会「教養研究センターの活動を振り返って——教養研究センター、5歳7ヶ月——」を開催し、自己評価をかねた慶應の内部からのさまざまな評価を受け、さらに3月8日には外部からの評価員6名を招いて、外部評価報告会「みいだす、つなげる、ひろげる——教養研究センターの過去・現在・未来」を開催した。今回の評価報告会では、5年間にわたるセンターの活動を、3つのキーワード「みいだす、つなげる、ひろげる」に集約し、所長の横山千晶が今までの活動のまとめとこれからの展望を説明し、佐藤望副所長が「みいだす」を、萩原眞一副所長が「つなげる」、中島陽子副所長が「ひろげる」をそれぞれキーワードとした活動の振り返りと自己評価の結果を報告した。内部評価、外部評価とも活発な質疑応答と議論が展開された。特に外部評価のための報告会では、慶應義塾大学生も参加し、質疑応答に加わった。今回のふたつの報告会で注目された議論は、このセンターの役割と大学の中での位置付けというもっとも基本的かつ存在の要そのものである。2008年度以降は今一度教養研究センターの役割について一から考え直すことからはじめ、ここで指摘された問題点と提案されたアドバイスを反映しながら活動の展開を図っていく。

外部評価委員は以下の6名の方々をお願いした。
金子郁容(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科委員長)

川島啓二(文部科学省国立教育政策研究所)

菊池重雄(玉川大学コア・FYE教育センター所長)

榊原一(NHK放送文化研究所所長)

菅原幸子(横浜市芸術文化振興財団 協働推進担当グループ長)

日比谷潤子(国際基督教大学・教学改革本部長)

(あいうえお順、敬称略、所属と役職は2008年3

14) 研究企画ボード会議の開催

2007年度は原則として2週に1回の割合で定例会議を開催した。そのほか、必要に応じて臨時会議やメーリング・リストによるメール会議と意見交換を適宜行った。

(横山千晶)

教養研究センターは、その研究成果、教養教育に関する提言等をさまざまな媒体で学内外に発信する活動を行ってきた。2007年度の主な活動は以下の通りである。

1. ホームページ管理

1) ホームページ・デザイン全面更新

開所後5年を経て、センターのホームページを全面的に更新した。新しいページは、約1年間をかけ、テストや修正を繰り返しながら、3月に完成し2008年度新学期の前に運用を開始した。

今回の更新の目的は、センターの活動を、一目で見えてわかる動きのあるホームページを作ることだった。メインページにフラッシュ画像を採用し、センターの活動を視覚的に分かりやすく紹介するようになった。

また、xhtml 1.0、CSS、SSIを採用し、行事の更新、電子化された刊行物のアップロード作業など日常的更新が、教養研究センター内部で機動的にできるようなデザイン上の工夫も行った。

この結果、従来情報更新の依頼が来てから、実際に更新されるまで数日を要していた作業が、即時にできるようになった。

なお、技術的なサポートと制作作業は、慶應義塾大学出版会に委託して行った。



新しいホームページ

2. 2006年度活動報告書の刊行

2006年度の教養研究センターに関する報告書をまとめ、7月31日付で発行した。センター全般の1年間の活動をすべて網羅し、運営委員、コーディネート・オフィス人員、所員・研究員の名簿、1年間の

活動カレンダーも掲載した。執筆は各活動内容の代表の方々に依頼した。A4版55頁で、制作は慶應義塾大学出版会に依頼して行った。

3. ニュースレターの刊行

2007年度は、ニュースレターを2回発行した。第10号は2007年7月10日、第11号は2008年1月15日に発行した。ともにA4版8頁である。

特集としては、第10号では新しく立ち上がった基盤研究「身体知研究」を取り上げた。また、第11号の特集は、5年目を振り返る特別座談会とした。(参加者は、村井純 常任理事、朝吹亮二 法学部日吉主任、羽田功 前センター所長、横山千晶 センター所長で、司会は佐藤望 センター副所長)。

例年、夏休み・春休みに入る直前に刊行されることが多かったが、試験期間中のなるべく早期に刊行するという目標は達成された。

第10、11号ともに編集責任は広報担当副所長の佐藤望があたった。編集・校正作業は教養研究センター事務局の高橋純子氏が担当した。制作は慶應義塾大学出版会に依頼して行った。

4. CLA-アーカイブズ刊行

CLA-アーカイブズは、センターによる公開の活動のうち、社会に広く提供するべきセンターの研究成果としてのシンポジウム等の記録を公表するシリーズとして刊行されている。CLA-アーカイブズは、逐次刊行物としてISSN番号(International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号)を取得している。2007年度のCLA-アーカイブズの冊子の刊行は、4冊である。

CLA-アーカイブズ11として刊行したのは、2007年度から開始された教員サポートのプロジェクトである「メディアリテラシーワークショップ——メディアセンター・サービス活用術」の記録である。この催しは、6月20日、25日、11月27日、12月5日の4回にわたって開かれたものである。この冊子には、データ検索を中心とした方法が、コンパクトにまとめられており、今後教員が授業で学生に情報検索等を指導する場合、非常に参考になるものと期待される。質疑応答を含む44頁の構成である。

CLA-アーカイブズ12として刊行されたのは、今年度身体知プロジェクトの枠内で、11月14日に

開催された講演およびワークショップの記録である「アートをしながら授業で学ぶ」である。日英対訳の構成で質疑応答を含む32頁の構成となった。

CLA-アーカイブズ13として刊行したのは、2008年1月21日に、基盤研究・身体知プロジェクトの実験授業研究報告のために開かれたシンポジウム記録「体をひらく、心をひらく」である。質疑応答を含む47頁の構成である。

CLA-アーカイブズ14として刊行したのは、2008年1月23日に、学生総合センターと共催で開催された講演会記録「発達障害を抱える学生への関わり方」である。質疑応答を含む24頁の構成である。

CLA-アーカイブズは、質の高い講演等の記録が継続的に蓄積されていくという効果を生んでいる。一方で、編集・発行については、これまで編集スケジュールの設定や作業分担にかんして、いくつかの問題が挙げられている。今後、発行の決定の後、綿密なスケジュール設定とその管理、編集作業責任者の明確化とそのサポート体制について改善の余地が大きいと思われる。

5. センター選書の刊行

2007年度は、2件の応募があり、厳正な審査の結果、今回は採用なしと決まった。採用がなかったのは、公募要領に記された目標や、教養研究センター側の採用基準と、実際に応募されてくる原稿の意図との不一致も一因としてあった。今後、読者ターゲットの記載や、採用の条件等に関して改善を行うことが話し合われた。

(佐藤 望)

教養研究センターは2008年3月8日、開所以来の5年余りの活動に関し、「みいだす・つなげる・ひろげる——教養研究センターの過去・現在・未来」という総題の下、外部評価のための報告会を開催した。

まず最初に、横山千晶所長が「センターの活動を振り返って」と題し、全体的な総括を行った。具体的には、センターの設立目的・ミッション・特色・組織・資金について説明し、5年間の取り組みを3つの特色——①「個」から「世界」への研究の拡大、②研究成果の実践的な試行、③成果のフィードバック——として概括した後、センターの活動のプロセス（隠れた人材や継承されてきた知を「みいだす」→発掘された人材や知を「つなげる」→成果を知の共有地に向けて「ひろげる」）を図解した。

次に佐藤望副所長が3つの観点から諸活動を概括した。すなわち、①新しいアプローチを「みいだす」という観点から、学術フロンティア、授業公開、一般研究、②新しい課題を「みいだす」という観点から、FD関連のプロジェクト、大学カリキュラム研究、③新しいアイデアを「みいだす」という観点から、国内外の大学の調査、身体知プロジェクト、講演会が、取り上げられた。全体的な成果としては、教員の活性化、センターの認知度の増大、縦割り組織の是正が挙げられた。大きな課題としては、いかにして専門を超えた専門の向こうにある「教養」を目指し、知の縮小再生産から知の拡大再生産へとつなげていくか、が指摘された。また、センターは問題を解決する機関ではなく、新しい考え方を示し、実験を行い、規範を提示することに徹するべきであるという点が、特に強調された。

続いて萩原真一副所長が、教職員組織の閉鎖性・複雑さに注目し、人と人、組織と組織、理系と文系、大学と社会をつなぐことの重要性を指摘した後、「つなげる」という観点から、①基盤研究の大学カリキュラム研究と身体知プロジェクト、②極東証券寄附講座の「アカデミック・スキルズ」と「生命の教養学」、③教員サポートプロジェクトといった諸活動に関し、それぞれの目的・成果・概要を報告した。課題としては、第1に、センターがカリキュラムの漸進的な改革の実現に引き続き貢献すべきであること、第2に、センターが仲介役を果たし、各組織間の連携をさらに促進すべきであることが、指摘された。

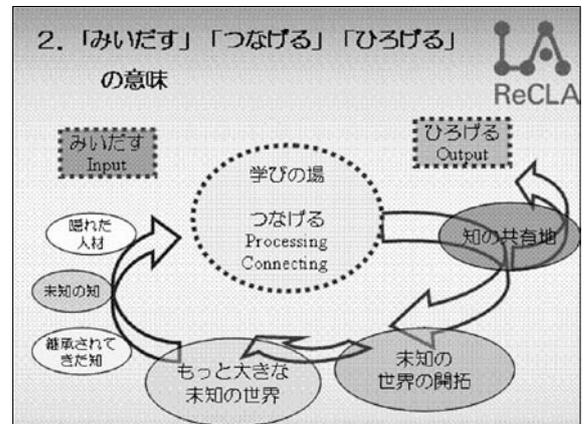
さらに中島陽子副所長が、「ひろげる」行為を空間・

時間・対象の3つの位相で捉えることができることを提示した後、2つの観点から諸活動を概括した。すなわち、①事業(プロジェクト)そのものが「ひろげる」行為であるという観点から、授業、公開講演会・講座、セミナー、シンポジウム、HAPP、②活動の結果を「ひろげる」という観点から、ホームページ、書籍、報告書、アーカイブズ、レポート、ニューズレター、HRP、学会発表が、取り上げられた。課題としては、第1に、発信作業が新たな知の世界の発見に有効につながっているか、第2に、センターが理念を具現する組織として確実に継承されているか、といった点が指摘された。また、大学が地域や社会によって支えられる文化風土を育成する必要性が、とりわけ強調された。

最後に横山所長が「教養研究センターのこれから」と題し、10年目に向けて諸課題にどのように取り組んでいくのか、基本方針を示した。諸課題の第1は組織の見直しである。短・中・長期にわたり未来を見据えた活動をより積極的に推進するために、調査・研究、交流・連携、広報・発信の3つのセクション制を取り止め、各事業(プロジェクト)をベースとする組織に改めることにした。第2の課題は新たな事業の展開である。具体的な事業案としては、①さまざまな組織をつなげた「学びの場」プロジェクト、②新しいカリキュラムの実験とモデルの提示が、挙げられた。第3の課題は慶應発の「教養」の構築である。情報化とグローバル化が急速に進展している中、いかにして他者や社会とつながり、いかにしてよりよく生きるべきか、といった問題に対応しうる、新たな「教養」を模索していく決意が表明された。

なお、当日の外部審査員の方々は次の通りである——金子郁容氏(大学院政策・メディア研究科委員長)、川島啓二氏(文部科学省国立教育政策研究所)、菊池重雄氏(玉川大学コア・FYE教育センター長)、榊原一氏(NHK放送文化研究所長)、菅原幸子氏(横浜市芸術文化振興財団)、日比谷潤子氏(国際基督教大学教学改革本部長)。各氏から頂いたご意見・ご批判等を十分に検討の上、それを貴重な糧として今後の教養研究センターの活動に役立てていく所存である。

(萩原 眞一)



特定研究

学術フロンティア推進事業 「超表象デジタル研究」プロジェクト (全体総括)

3年間にわたって活動を続けてまいりました文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトが去る3月31日をもって終了いたしました。

すでにニューズレターや活動報告会、活動報告書などを通じてお知らせしてきましたように、この間、統合研究ボードを中心に、コンテンツ研究、学習環境構築研究、超表象デジタル化研究の各ユニットがそれぞれの課題に応じたさまざまな研究活動を展開してまいりました。その詳細は、統合研究ボードと各ユニットの報告をご参照ください。

さて、今年度当初、本プロジェクトは2007年末に最終成果の概要をまとめて文部科学省に提出し、さらに残りの三ヶ月で3年間の研究を総合する作業を予定しておりました。ところが、2007年8月半ばになって、概要提出期限が急遽9月末に変更になるとの連絡が入りました。まったく予定外の変更ではありましたが、統合研究ボードを中心に報告概要作成ワーキング・グループを組織し、集中的な作成作業を行いました。その結果として生まれたのが最終成果「21世紀型キャンパス構想——バリアフリー・キャンパスの構築を目指して」(以下、「21世紀型キャンパス構想」)概要でした。

いささか自画自賛めきますが、夏休み中の変更、限られた時間というかなり厳しい制約の中で最終成果の概要を取りまとめることができたのも、それまでの二年半にわたって各研究ユニットとユニットに属する各研究グループが積極的・計画的・持続的な研究活動を展開してきたからに他なりません。もちろん、この間、統合研究ボードと共に多大な時間とエネルギーを投じて協働作業にかかりきりとなった学術フロンティアならびに教養研究センター事務局はもとより、日吉研究支援センター、研究室事務室の全面的なご協力・ご支援を忘れることはできません。この紙面を借りてあらためてお礼を申し上げます。

「21世紀型キャンパス構想」は新しい教養教育の慶應モデルとして構想されており、具体的なカリキュラム・モデルとそれが展開されるべき多様な「場」を有機的に連動させた総合的な大学教育の将来

図を提示するものです。「場」については既存キャンパスの活用・活性化に加えて新たなキャンパスの構築を含みこみ、またカリキュラム・モデルのコアを取り囲むさまざまなプログラムやモデル実現に必要な制度・機関などについての提言も行っています。

「21世紀型キャンパス構想」は、本プロジェクトの研究成果報告書に「研究概要」として収められておりますが、文部科学省に提出した報告書全体は、「超表象デジタル研究 表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築 平成17年度～平成19年度私立大学学術研究高度化推進事業(学術フロンティア推進事業) 研究成果報告書」、同ダイジェスト版、同DVD版(4枚)から構成されています。とりわけ、成果概要に基づく「21世紀型キャンパス構想」については3DCGによるビジュアル版も作成しました。かわいらしい丸型ロボットの案内でこのキャンパス構想に具体的に触れていただくこともできます。教養研究センターHPの特定研究からhydiのログイン・ページに入り、右下にある「未来の教養教育」をクリックしていただくとこのビジュアル版(報告書のPDFファイルを含む)がご覧いただけます。学部や日吉キャンパスにおけるカリキュラムの議論などにご活用いただければ幸いです。

最後に、年度を越えてしまいましたが、2008年4月26日には来往舎シンポジウム・スペースで最終研究成果報告会も開催しました。西村太良常任理事にも出席いただいたこの報告会の第一部では、黒田昌裕(内閣府社会総合研究所所長[当時])、山本泰(東京大学大学院教授)、小沼通二(本塾名誉教授)、重松淳(SFC総合政策学部教授)の各氏をお招きして、研究成果についてのコメントをいただき、第二部では斎藤太郎(文学部教授)、村山光義(体育研究所准教授)のお二方にプロジェクト・メンバーを加えたシンポジウムにおいて、研究成果に基づいた義塾における教養教育の未来について議論を行いました。その内容についても、いずれ何らかの形で皆さまにお伝えしたいと考えております。

3年間にわたる皆さまのご理解とご協力にあらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

(研究代表 羽田 功)

統合研究ボード

ボード代表者 羽田 功（経済学部）

「全体総括」にもあるように、2007年度については統合研究ボードの最大の課題は3年間にわたる「超表象デジタル研究」プロジェクトの最終的な研究成果を報告書として取りまとめることにありました。

年度当初、2007年末の文部科学省への成果概要提出を目指したスケジュールを組み、各ユニットへもこれに合わせた研究スケジュールを組むように指示しました。また、成果取りまとめの方向に沿ったユニット毎の課題の提示も行いました。しかし、この概要提出期限が3ヶ月ほど早まったこともあり、夏休み直前にボード会議を緊急招集し、報告概要作成ワーキング・グループを組織して態勢を整えました。同時に各ユニットへも事情説明を行い、ユニット毎の研究成果の取りまとめを依頼しました。その結果、本プロジェクト事務局をはじめとする多くの方々のご協力のおかげで「21世紀型キャンパス構想ーバリアフリー・キャンパスの構築を目指して」が完成したことは、これも「全体総括」にあるとおりです。

その後の半年間は、この成果概要を土台として、年度末にあらためて文部科学省に提出予定の最終成果報告書の作成作業を行いました。各ユニットにおいても計画されていた研究や実験授業などもほぼ予定通り遂行され、それらはユニット毎の成果として最終報告書の中に収められています。また、2008年4月26日には本プロジェクトの最終成果報告会とシンポジウムも開催しました。パネリストの先生方をはじめ、ご参加くださった多くの方々から、時に厳しく、時に好意的なご批判やご意見をいただくことができました。今後の教養研究センターの活動にとっても貴重な機会であったと思います。

最後に、いささか変則的な成果取りまとめ作業となった点、成果概要に最後の半年間の研究活動から生まれた成果を反映させることができなかつた点など、統合研究ボードの正直な気持ちとしては多少とも不足感を拭い去ることはできませんが、この3年間、本プロジェクトに直接的・間接的に関わってくださった数多くの教員・研究者・職員・学生・大学院生・社会人の皆様のご理解とご協力には心より感謝しております。また、本プロジェクトの成果が

少しでも慶應義塾の教養教育の改善に役立つことを祈念しております。ありがとうございました。

☆統合研究ボード会議：17回

☆最終成果報告会(2008年4月26日開催)：1回

コンテンツ研究ユニット

ユニット代表者 近藤明彦 (体育研究所)

I. 研究の概要

コンテンツユニットでは、次の4つの課題について各研究グループが取り組みを行ってきた。

まず第1は「温故知新」型教育プログラムの再考であった。第2は「身体知」教育プログラムの可能性についてである。第3は「知との遭遇」導入教育の必要性の検討であった。第4は「現代の危機的問題」をどう捕らえるかについて検討を行った。ここでは「現代の民族・宗教問題」と「現代科学の行く先を考える」という2つの課題を設定した。

詳細については各研究グループの報告を参照されたい。

II. 2007年度活動概要

以下に2007年度に各研究グループが行った主な公開事業を示す。

【導入教育】

“一年次教育の展開——高等教育における新たな伝統の確立を目指して”、玉川大学コア・FYE教育センター主催 特色GP シンポジウム、(2008年1月25日)

【温故知新】

“フィールドワークの現状と課題——中国国内での現地調査から”(2007年5月25日)、学塾としての慶應義塾シリーズとして“塾生入門～ Science、科学、サイヤンス”を4回；第1回(2007年6月13日)、第2回“私の研究ノートから；文豪ゲーテのもうひとつの顔”(2007年7月6日)、第3回“クロスカルチャーが仕事になるまで——帰国生という運命と向き合って”(2007年10月10日)、第4回“しなやかに生涯発達するひとのチカラに魅せられて”(2007年12月18日)、“バルサ、バルサ、バルサ！ サッカーから見るスペイン現代史 1899 - 2007”(2007年12月13日)

【現代の危機】

“第1回実験授業「Nationと記憶——戦後西ドイツを中心に」について”(2007年6月22日)、“第2回実験授業「日本人と朝鮮語——隣国のことばをどう学んできたか」”(2007年10月26日)、“第3回実験授業「現代中国に見る民族意識の諸相」について”(2007年12月29日)

(1)「温故知新」型「日本の教養」

研究代表者 岩波敦子 (理工学部)

2007年度は実験授業を兼ねて、新たに講演会シリーズ「塾生入門」を開講した。この講演会シリーズの目的は、様々な入学形態を経て大学という学び舎に辿り着いたとき、学問とは何かという根本的問いに直面し、戸惑う学生に向けて、大学での学びについて共に考える場を提供するというものである。具体的には、人生の先輩でもあり、研究者として独自の領域を切り拓いてきた教員に、既存の思考様式にとらわれず、自由な発想を持ちながら常に「自分らしさ」を追い続けることのすばらしさを、自分自身の学知の軌跡を通じて語ってもらい、全人教育の実現の場としての大学とは何かを考える機会を提供した。

学塾としての慶應義塾2

講演会「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」第1回

講演者：金田一真澄(理工)

日時：平成19年6月13日(水) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来往舎 大会議室

学塾としての慶應義塾3

「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」第2回
『私の研究ノートから；文豪ゲーテのもうひとつの顔』

講演者：石原あえか(商)

日時：平成19年7月6日(金) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来往舎 大会議室

学塾としての慶應義塾4

講演会「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」第3回

『クロスカルチャーが仕事になるまで——帰国生という運命と向き合って』

講演者：中山純(経)

日時：平成19年10月10日(水) 15:00～16:30
場所：日吉キャンパス来往舎 大会議室

学塾としての慶應義塾6

「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」第4回
講演会：しなやかに生涯発達するひとのチカラに魅せられて」

講演者：高山緑(理工)

日時：平成19年12月18日(水) 16:30～18:00

場所：日吉キャンパス来往舎 大会議室

2007年度中4回にわたり、企画したこの講演会シリーズのほか、以下の講演会を関係各位の協力を得ながら、企画、開催した。

講演会「フィールドワークの現状と課題——中国国内での現地調査から」

講演者：顧林生（清華大学公共管理学院研究員・清華大学都市計画設計研究院公共安全研究所所長）

コーディネーター：大平哲（経）

日時：平成19年5月25日（金）16：30～20：00

場所：日吉キャンパス来往舎 大会議室

学塾としての慶應義塾5

講演会「バルサ！バルサ！バルサ！ サッカーから見るスペイン現代史1899-2007」

講演者：山道佳子（文）

日時：平成19年12月13日（木）16：30～18：00

場所：日吉キャンパス J421

また2007年度は、既存の「知」の体系や知的財産がどのように形成され、受容・蓄積・継承されてきたのかを探る研究の一環として、文献データベースの構築にも力を入れた。「教養」をキーワードに、書籍・雑誌論文のデータベースから文献リストを作成、hydi上にupしているが、このデータベースにより、より迅速な文献検索が可能となっている。

【研究メンバー】

岩波敦子（理工：研究代表）、佐谷眞木人（恵泉女学園大）、田上竜也（商）

【研究協力者】

岩谷十郎（法）、山内慶太（看護医療）、大平 哲（経）、柏崎千佳子（経）、牛島利明（商）

(2)「身体知」教育プログラム

研究代表者 近藤明彦（体育研究所）、小菅隼人（理工学部）

このグループの扱う「身体知」教育は、実践的行動と学術的理論との融合によるより豊かな知——「身についた知」——の獲得を目的としている。この場合の実践的行動とは学生の自発的企画であり、それを学問知や経験知をもった教員・地域・卒業生集団が学生と同じ地平に立って議論し洗練させ、大学が具体的な援助をもって実現させるといった新たな教育方法を、ここでは「身体知教育」と考えている。何故なら、自発的企画の実現（あるいは失敗）のプロセスこそが、より応用力をもった「身についた知」を可能にするからであり、身体知はモチベーションとしては自発的、方法論としては体験的でなければならないと考えるからである。但し、学生による自発的動機付けとその実践には、自らその価値を認め、かつ、自らも実践したいと望む先行モデルが必要である。言い換えれば、過去に行われた、他者による様々な企画を参照することによって、自らの実現欲、自己教育欲が生み出されるのである。その為の、基本概念の策定と、いくつかの具体的アーカイブの作成をこのグループでは行った。

まず、自主企画の典型例として6点を選定した。この6点、①大野一雄舞踏公演〔先駆的实践例および蓄積例として〕、②映画上映会「アリア」〔自己の作品を専門家の検証・協力をうける例として〕、③パフォーマンス「色即是空」〔インターユニバーシティ的學生間の協力と三年間にわたる成長の記録として〕、④ヒヨシエイジ〔地域連携の例として〕、⑤日吉能〔即興的徒弟体験の例として〕、⑥半学半教プロジェクト〔教育経験と学習経験の交換例として〕について、過去の記録を整理し、電子媒体に保存した。そして、これらに入りきれない企画を「宝箱」として蓄積することを提案した。

さらに、われわれは、これまで身体知実践に足りない部分を補完するのを目的に、プロジェクトの大学院生メンバーを中心に討議を重ねた。そこでは、身体知教育を仮に「体験からその背景にある理論を導き、得られた理論を実践に応用する」事と定義した。これを、研究グループの大学院生メンバーを中心にして、DOVE（DO Various Examples）というグループ内グループを作り、身体知教育実践を補完す

る企画・実践を推進した。そして、DOVE では、課外活動としての奇術(大衆芸術)と大学のコアとしての授業カリキュラムを融合し、それを学生が講義を行うという逆転の発想を採用した。なお、これについて、詳しくは、学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究プロジェクト」の成果報告書に記されている。

(3) 「現代の危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム「信じる?——現代の民族・問題」

研究代表者 長堀祐造 (経済学部)

I. 研究の概要

本研究グループは、本プロジェクト全体の中心的な課題の一つである、「知」の連鎖体系を基盤とした一貫したシステムチックなりベラル・アーツ教育(教養教育)プログラムの構築(コンテンツ研究ユニット)の一翼を担うグループである。そのユニットの中でも、現代の危機的問題の理解と解決のために、既存の「知」の体系や知的財産をどのようにして組み直し、これを発展・応用させていくことができるかということ課題とする「融合複合型表象研究」(発展・応用型の「学び」)に属している。

さらに、本グループは「民族」「宗教」を取り上げて、前述のような展望の下に、具体的なコンテンツを検討するとともに、教育的な効果の高い実践的プログラム(授業モデル)を開発することを研究の目的としている。また、開発された教養教育コンテンツと実践プログラム(授業モデル)を有機的に結合することによって、教養教育のあらたなあり方を具体的に提示しようとする実験的授業の展開を可能ならしめることを目的としている。最終的には、日吉キャンパスにおいて、学部横断的な授業展開を目指す。

II. 2007 年度活動報告

1. 文献データベース(以下、文献 DB)の構築と資料収集

昨年に引き続き基本文献 DB を作成した。現在入力されている文献の数はおよそ 800 件である。hydi (Hyper Digital Interface) 上で公開されている。

2. 資料収集

文献 DB と同じコンセプトに基づき、民族、宗教問題に関する書籍資料を予算の許す範囲で一定程度収集し、教養教育センターに保管、利用している。

3. 実験授業の開催

以下の 3 回の実験授業を行った。会場はいずれも来往舎会議室。

1) 「Nation と記憶——戦後西ドイツを中心に」について

2007 年 6 月 22 日第 5 限(16:30—18:00)

講師: 初見基(東京都立大学人文学部准教授)

参加学生: 日吉総合教育科目「歴史」履修者 約 90 名

2) 「現代中国に見る民族意識の諸相」について

2007 年 12 月 19 日第 3 限(13:00—14:35)

講師: 関根謙(文学部教授)

参加学生: 文学部 1 年 26 組中国語クラス他

3) 「日本人と朝鮮語——隣国のことばをどう学んできたか」

2007 年 10 月 26 日第 5 限(16:30—18:00)

講師: 高柳俊男(法政大学国際文化学部教授)

コメンテーター: 柏崎千佳子(経済学部准教授)

参加学生: 経済学部 2 年中国語クラス他

III. 温州・上海におけるキリスト教に関する調査

日時: 2007 年 12 月 23 日~2007 年 12 月 28 日

出張者: 長堀祐造(経済学部教授)、関根謙(文学部教授)、渋谷誉一郎(文学部教授)

訪問した教会: 永光堂教会、花園巷教会、西城教会、甌北地区永嘉県花岙教堂(甌北地区花岙教会) 古くからのキリスト教先進地で現地人の協力を得て、関係者にインタビューを行った。

IV. 2008 年度の展望

すでに、プロジェクトは終わったが、2008 年度も教養研究センターのもとで、実験授業を継続し、次年度以降の日吉における正式授業科目化に向け、活動する予定である。

(4)「現代の危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム

「先端をキャッチ！——現代科学の行き先を考える」

研究代表者 鈴木晃仁（経済学部）

この研究は、現代の文明と社会の根本にかかわる営みとなった科学技術をとりあげ、文系と理系の「二つの文化」（C.P. スノウ）の断絶を乗り越えることを目標にした。人文社会系の学問を学んだものたちのサイエンス・リテラシーを高め、一方で科学を学んだ者の人文社会科学のリテラシーも高めることで、相互が歩み寄り議論をする公共のスペースを創出する手がかりを学部1・2年生に与えることをめざした。そのために、①主題がトピカルで多くの学生の興味を引きつけることができること、②さらに発展させた学習をするための資源（書物、論文、データなど）が充実していることの二点を考慮して、二つの主題を選んで、各々の授業のコンテンツを作成した。I. AIDSと現代社会 と、II. エネルギー問題について、である。

それぞれのコンテンツをシラバス形式で表現すると、以下ようになる。

AIDSと現代社会（鈴木担当分）

- | | |
|-----|-----------------------|
| I | イントロダクション |
| | 1. 授業の狙いの説明とオリエンテーション |
| | 2. AIDSの登場 |
| | 3. 研究と対策の発展 |
| II | 日本のAIDS |
| | 4. 日本I「薬害エイズ」 |
| | 5. 日本II患者運動 |
| | <課題1> |
| III | 世界への広がり |
| | 6. 北米と中南米 |
| | 7. 西欧と旧社会主義圏 |
| | 8. アフリカ |
| | 9. 中国と東南アジア |
| | <課題2> |
| IV | AIDSのインパクトとまとめ |
| | 10. 貧困と薬剤開発 |
| | 11. エイズの「語り」 |
| | <課題3> |
| | 12. AIDSのインパクトと未来へ |
| | 13. まとめとディスカッション |

13回の授業は「イントロダクション」、「日本」、「世界」、「インパクトとまとめ」に分けられている。「イントロダクション」で基礎的な内容を伝えたあと、II・IIIは日本から出発して地理的な構成をとった授業となり、IVではグローバルな視点と、きわめて個人的な視点の双方を続けて紹介する。

エネルギー問題について（青木担当分）

- | | |
|----|--------------------------------|
| 1. | エネルギー問題と気候変動の自然科学的背景 |
| | (a) 熱力学の第一法則、第二法則。エネルギーとエントロピー |
| | (b) 太陽エネルギーと地球の温度 |
| | (c) 地球気候変動、温暖化の仕組み |
| | (d) 地球気候変動と温暖化ガス |
| | (e) 将来の予測とその信頼度 |
| | (f) 気候変動の理解の歴史 |
| 2. | エネルギー問題の概要 |
| | (a) エネルギー問題の様々な側面 |
| | (b) 気候変動に対する対策 |
| | (c) エネルギー問題概観 |
| | (d) エネルギー変換と再生可能性 |
| | (e) エネルギー収支 |
| 3. | エネルギー変換の手法と特色 |
| | (a) 化石燃料 |
| | (b) 原子力 |
| | (c) 太陽エネルギーの直接利用 |
| | (d) 太陽光発電 |
| | (e) 風力発電 |
| | (f) バイオマス |
| | (g) 地熱発電 |

①自然科学的側面、②経済的側面、③政治、政策的側面、④国際関係、安全保障的側面、⑤倫理的側面、⑥歴史的側面、を含んで解説される。

AIDSについても、エネルギー問題についても、これまでに存在しないユニークな内容を持ち、さまざまなディシプリンからの視点を複合させていると同時に、学生の自主的な学習を織り込むと同時に将来の興味の進展にも対応した教材を作ることができたと自負している。また、今後の授業の運営においても、人的・時間的・金銭的なコストを低く抑えることができる、有効な投資が行われたと考えている。「マルチパーソンのプロジェクトからマルチタスクな個人へ」の点については、鈴木・青木はそれぞれこの授業を準備することで多くを学ぶことができた。その意味で成功であったといつてよい。しかし、

その学習の多くは「独習」に頼ったとあってよい。総合大学としての慶應の強みを生かして、この部分の新しい視点を教員が吸収する過程を合理化できないかという印象を持った。

【研究メンバー】

鈴木晃仁(経済学部)、青木健一郎(経済学部)

(5) 導入教育プログラム「知との遭遇」研究グループ

研究代表者 横山千晶(法学部)

I. 研究の概要

導入教育プログラム「知の遭遇」研究グループでは、大学入学時の学生を、大学で提供される新たな知の体系にいざないつつ、なおかついかにして社会の、そして世界の一員としての新たなアイデンティティを確立させるのか、という方法の模索を研究テーマとしている。大学での過程は人生のひとつに過ぎず、そこから学生は立ち去り社会へと出て行く。その導入の基盤を、「生活」、「教育」、「社会貢献」という3つの土台から見据えることが研究の主眼である。最終年である2007年度は過去2年間の概念を実践に結びつけ、その成果を測定すると同時に外部に発表することを目指した。また本年度は「導入教育」に対する教員の意識を呼び覚ますために、教養研究センターの教員サポートプロジェクトとタイアップして、教員サポートのワークショップを3つのカテゴリーにおいて開催した。今年はまとめの年として、主として以下の3点より研究を考察した。

1. 導入教育のカリキュラム作りとフォローアップ調査
2. 教員サポート
3. 複合知の中の「身体知」の位置づけ

II. 2007年度活動報告

(1) 導入教育のカリキュラム作りと新しい知の研究
(担当：武藤浩史・横山千晶)

① アカデミック・スキルズ修了者、プレ・フォローアップ調査

極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」の応用編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」を設置した。2006年度の話し合いに基づいて大教室の講義をただ聞き流すのではなく、そこからどのように問題を見つけ、自分の研究につなげていくのかを目標にした「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——講義を究める」と共通のテーマを異なった文化圏や異なった学問分野から見るための複数視点を与える「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ——テーマを究める」をそれぞれ一こまずつ開講した。双方とも3名ずつの教員がついた。同時に基礎編「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」も従来どおり開講した。

本年度は同時に2000年以降開講した「スタディ・スキルズ」(2003年度より「アカデミック・スキルズ」)の受講者に対するプレ・フォローアップ調査を行った。このアンケートをもとに、2008年度にはより詳しいフォローアップ調査を行う予定である。具体的な内容は、以下のとおりである。

(アカデミック・スキルズ プレ・フォローアップ調査アンケート)

I.

(1) アカデミック・スキルズ(スキルズ・スキルズ)であなたが学んだことはその後、ゼミや職場などの活動で役立っていますか? 該当項目に○をしてください。

1. 全く役立っていない
2. あまり役立っていない
3. 普通
4. まあ役立っている
5. 大変役立っている

(2) (1)で答えた内容に関して具体的に述べて下さい。

II.

(1) アカデミック・スキルズ(スタディ・スキルズ)の授業構成や進行の仕方について満足していますか? 該当項目に○をしてください。

1. 全く不満
2. やや不満
3. 普通
4. まあまあ満足
5. 大いに満足

(2) (1)で答えた内容について、具体的に良かった点、悪かった点、改善すべき点などを述べて下さ

い。

III. 社会、ゼミ、授業の場で、もう少しやっておけば良かったと思うスキルは何ですか？（「アカデミック・スキルズ」で学んだこと以外でもかまいません。）社会人の方は大学の授業で学んでおけば良かったと思うことはなんですか？

IV. アカデミック・スキルズでは現在、問題を見つけ、調べ、まとめ、発表するという基本的なスキルの構築だけでなく、2007年度から、応用編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」を設け、講義から問題を見つけ出したり、ひとつのテーマを複数の視点からとらえたりするという、基本的なアカデミックなスキルをより応用する授業を展開しています。今後アカデミック・スキルズをより良いものとするためにも、皆さんのアイデアやご意見を聞かせてください。

なお、2008年度は「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」を週3クラス、「Ⅲ・Ⅳ」を週1クラス設置する。

詳しくは極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」の項を参照のこと。

②新しい知について考える研究会と実験授業の開催 (担当：武藤浩史・横山千晶)

基盤研究「身体知プロジェクト」と協力し、身体に対する気づきに関する研究を進めた。同時に実験授業を行い、その成果の分析を行った。

1. 月例研究会の開催

身体知をめぐる諸理論を哲学、心理学の上から研究する月例会を開催した。

2. 実験授業「アートで体をひらく、心をひらく」

理論を研究する両輪をなすものが実践である。2007年度は実験授業でさまざまなアートをつかった言語以外のオルタナティブな表現法を使って、新たな気づきの可能性を探った。

(日時)2007年11月14日(水)、11月30日(金)、12月10日(月)、2008年1月16日(水)

3. 身体知特別研究会の開催

2008年1月21日(月)

2006年度・2007年度の実験授業を振り返るディスカッションを実験授業のコーディネーターによる報告と講師のコメントを経て、参加者を交えたディスカッションを行った。

詳しくは基盤研究「身体知プロジェクト」の項を参照のこと。

③実験授業「新しい文学教育」の開催

(担当：武藤浩史)

2007年8月6日～8月11日

2007年度慶應義塾未来先導基金採択事業「声プロジェクト」の一環として、武藤浩史担当の「文学」の履修者を対象とした、体験型の少人数ワークショップを開催した。これは座学で学んだ内容を身体を通して解釈するまったく新しい形の授業である。講師陣にはダンサーや朗読の教師、講談師などを迎え、本年度は『チャタレー夫人の恋人』を題材として座学と身体知の関係を探った。本実験授業の成果は『教養論叢』128号(慶應義塾大学法学研究会、2008年)に論文、武藤浩史・横山千晶「身体知と新しい文学の実験授業①——レディ・チャタレーとダンスを」として、発表された。詳しくは基盤研究「身体知プロジェクト」の項を参照のこと。

(2)導入教育・接続教育の学会での発表および参加 (担当：横山千晶)

● 国内の関係研究機関との協力

2008年3月11日に発足する日本で初めての初年次教育に特化した学会「初年次教育学会」(会長：山田礼子 同志社大学教授)の立ち上げに横山千晶が理事の一人として参加した。同学会は高等教育機関における導入教育・接続教育・初年次教育のあり方の研究と意見交換を目的としたものである。

● 導入教育に関する国際学会への参加

International Conference on First-Year Experience (2007年7月9日～12日、ハワイ、ビッグ・アイランド)

本年度の学会で特徴的であったのは学生の親が高等教育のあり方に強く関わってきていることである。積極的な参加や興味は時として「ヘリコプター・ペアレント」のような弊害を生むこともある。学生の中のファミリー・バリューの変化がどのように教育の質に影響を与えてきているのかは、日本の学校教育との比較においても類似点が見られる点で興味深い。

● その他の学会への参加と発表

・2007年9月10日～13日 「芸術と福祉」国際会議(ヘルシンキ)

4th International Conference on the History of the Settlement Movement

7th International Conference on the History of the

Arts and Crafts Movement

芸術教育と社会のあり方に関して横山千晶が以下のテーマで発表を行った。

2007年9月12日

Chiaki Yokoyama, “The Japanese Folkcrafts (Mingei) Movement and the Education of Factory Workers.”

・2008年1月25日 玉川大学コア・FYE教育センター主催

特色GPシンポジウム「一年次教育の展開——高等教育における新たな伝統の確立を目指して」

事例報告 横山千晶「全身を使って考える——慶應義塾大学教養研究センターの導入教育と『身体知』」

慶應義塾大学教養研究センターにおける導入教育を身体知の面から紹介した。その後活発な質疑応答が交わされた。

(3) 教員サポートのあり方を考える

FDを考える際に最も重要となる事項は、いかにして教員・職員が研究と教育を行いやすい環境を作り、同時にその環境の中で研究・教育を支援するスキルを身につけてもらうかということである。そのためには各機関のネットワーク作りも重要な課題となる。高等教育に携わる教員サポートのあり方と、教員のネットワーク作りの環境を構築する意味で、教養研究センターの教員サポートプロジェクトと提携して、以下の4つのワークショップを開催した。具体的なワークショップは以下のとおりである。

1. メディア・センター活用法
2. フィールドワーク・ワークショップ
3. Keio.jp 活用法
4. 発達障害を抱える学生への関わり方

各ワークショップはメディア・センター、SFCの教員慶應ITC、学生総合センターの協力を得て、慶應義塾大学の教職員(非常勤の教員を含む)を対象に行われたものである。

Ⅲ. 成果とこれからの課題

この3年間の活動を通して顕著に見られた成果は、導入教育のさまざまなあり方を他大学や他の機関の試みを通して調査したことから、慶應義塾大学独自の導入教育のあり方を模索し、実践に移したことである。(「アカデミック・スキルズ」、身体知の実験授業など) その際に必要になってくるものは、さ

まざまな「知」のあり方を探索する入り口として言語と身体のみならず、柱として考えていく視点であることが明確になった。このふたつをつなぐ教育のあり方は、場所や時間、参加者などの要素も考慮しなくてはならないだろう。今回の身体知の実験授業は、大学生のみならず、社会人も含めて開催されたが、お互いの相乗効果は非常に大きなものだった。これらの実験授業の効果はさらに分析することで理論化される必要がある。来年度以降は実践から理論を導き出すことが課題となる。

同時にFDをどうとらえていくのかも大きなテーマである。FDはどう教育に資するのか、その際のサポートの仕方にはどのようなものがあるのかを考えていかななくてはならない。2007年度には教員サポートのワークショップを行ったが、参加者からはさまざまな肯定的な意見と希望が寄せられた。今後はそれらの意見と希望を受け、どのようなサポートが必要になってくるのかを話し合い具体的なサポート体制を構築するのみならず、同じくフィードバックの方法についても考えていかななくてはならないだろう。

フィードバックという意味では学生の追跡調査を行うことも重要である。2007年は教養研究センターの「アカデミック・スキルズ」の開設5年目を迎え、フォローアップ調査をすることにしたが、より詳しいデータを収集し、成果と授業の課題をあぶりだしていくことが肝要だと思われる。

導入教育というものは、大学の初年次ととらえることができるが、同時に人は生涯学び続けるものである。その意味で導入教育とは今まで学んできたことを振り返り、次の地点へと進んでいく未来志向の場とも言える。つまり、何を今まで学んできたのか、これから自分にはどのような学びの可能性があるのかを考察する「学びのポートフォリオ」という広い地図の中で導入教育を考えていくことは最も重要である。

学術フロンティア終了後は、新たにさまざまな実験授業を通して、これまでの研究の蓄積と成果を実践し、さらなる研究の対象としていく予定である。

【研究メンバー】

武藤浩史(法学部)、横山千晶(法学部)

【研究協力者】

ヒョン・G・リュウ(リード大学、アメリカ合衆国)

学習環境構築研究ユニット

ユニット代表者 熊倉敬聡 (理工学部)

本ユニットの研究目的は、教養教育の新たなモデル構築にあたり、そのコンテンツが最大限の意義を發揮できるような学習環境としての大学・キャンパス像を描き出すこと、また大学・キャンパスが内在させる「学びの場」としてのさまざまな可能性、コミュニケーションの潜在的多様性を探ることで、これまでにない大学・キャンパスを構想することにある。本ユニットでは、以下の四つの研究プログラムが展開されている。「バリアフリー・キャンパス構築——物理的、制度的、文化・情報面、意識のバリアフリー」、「コミュニケーション・キャンパス構築——自律的学習支援ポータル・プログラム」、「テクノ・キャンパス構築——21世紀のテクネーを育む学びの環境設計」、「インター・キャンパス構築——解体・逆転・再生の入れ子型キャンパス」。

2007年度は、学習環境構築研究ユニット／コンテンツ研究ユニット合同ミーティングを行い(両ユニットの教員と他学生計約20名参加)、①「21世紀の半学半教」とは?②「21世紀の半学半教」を実現すべき「サロン」的学習環境とは?③カジュアルに情報交換できる「グラフィティ」的「オープンソース」的場とは?などについて徹底討論した。

計3年間にわたるユニットの研究活動で炙り出されてきた21世紀型キャンパスとは、何よりもあらゆる意味で(物理的・心理的・社会的・メディア的)バリアフリーな学習環境であり、その実現のためには、従って、いかに学習者が自分にとって異質な他者・社会とバリアを超えて出会い、冒険的コミュニケーションに挑んでいけるか、それを可能にする装置・場の創出が不可欠である。そのバリアフリーは、最終的には、大学教育の最大のバリアともいえる学生／教員間のバリアを問い直すことにつながり、本学の建学理念の一つである「半学半教」を21世紀的に実現する学習環境のデザインに行き着くことになろう。

(1)インター・キャンパス構築

代表研究者 熊倉敬聡 (理工学部)

I. 研究の概要

地域、社会、大学が何を提供しあえるのか、また何を共有できるのかを探ることで、地域と大学、社会と大学が相互浸透しあい、やがて「内と外」が渾然一体となるような新たな関係性の実現、すなわち21世紀型インター・キャンパスを生み出すための総合的かつ多角的なプログラムの作成を目指す。インター・キャンパスのデザインやプロデュースのできる人材育成が期待できる実践型・「身体知」教育系のプログラムである。

II. 2007年度活動報告

2007年度の活動は、そのほとんどがインター・キャンパスの拠点「三田の家」を中心に展開された。大学を地域・社会に開く拠点＝「三田の家」は、教員と学生が共同運営することにより、何よりも昨今の学生に欠けがちな社交力(sociability)の育成を目指す。そこを拠点として、学生／教員／職員、大学人／地域住民・商店主、日本人学生／外国人留学生、幼稚舎生／大学生、一般学部生／通信教育部生、「健常者」／「障害者」など、異文化・異世代・異組織・異領域間の横断的交流を促す多様なプロジェクトを展開する。さらには、三田商店街と協働することにより、三田の地域特性を生かした新たな文化・学生街の創出を目指す。

「三田の家」は、下記活動メンバーが各々各曜日を担当する「マスター制」により運営されている(以下、肩書は2007年度当時のもの)。月：手塚千鶴子(日本語・日本文化教育センター教授)、火：土屋祐子(DMC機構助教)、水：武山政直(経済学部准教授)、長田進(経済学部准教授)、木：熊倉敬聡(理工学部教授)、金：岡原正幸(文学部准教授)、土：坂倉杏介(DMC機構専任講師)、日：渡辺久美(法学部学生)。従って、「三田の家」は、原則的に、毎日オープンし、活動を行っている。基本的に、それは、来訪者なら誰でも歓迎するいたって「開かれた」場であり、交流のそして学びのスペースである。

「三田の家」の活動は、非常に多岐にわたっている。活動テーマとしては、主に①地域連携活動、まちづくり、②場づくりとワークショップ、③障害者を対象とした活動「うたの住む家」、④展覧会、コンサー

トなどの企画、⑤ウェブサイトづくり、⑥公開授業、等々であるが、各曜日には、担当マスターが独自に工夫を凝らした活動を行っているため、その全貌をここで紹介することは不可能である。「三田の家」のウェブサイト (<http://mita.inter-c.org/>) を参照されたい。



「三田の家」入り口



ある日の「三田の家」

【研究メンバー】

熊倉敬聡(理)、武山政直(経)、長田 進(経)、岡原正幸(文)、手塚千鶴子(国際センター・日本語日本文化教育センター)、坂倉杏介(デジタルメディアコンテンツ統合研究機構)

【研究協力者】

土屋祐子(広島経済大学)、三田商店街振興組合

(2) バリアフリー・キャンパス構築

研究代表者 増田直衛(文学部)

I. 研究の概要

本研究の目的は、バリアフリーの観点から学習環境の構築に関する実践的な研究を実施することである。ここでは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由等の身体障害のある学生や教職員のみでなく、対人関係やコミュニケーション等に障害を感じている学生／教職員も含めた広義のバリアフリーを実現するための実践的な研究を行う。また、バリアを軽減するための具体策の分析を通して、バリアという現象の理解やその生成メカニズムについて明らかにする。さらに、バリアフリーに関するキャンパス内外の様々な研究や教育活動との連携も試みる。

2007年度は、(1) 発達障害の理解と支援に関するセミナーによる主として意識上のバリアフリーに関する研究、(2) 感覚障害のある学生への支援実践を通じた情報・文化面でのバリアフリーに関する研究、(3) 障害学生支援への学内での組織作りやカリキュラム化を通じた制度のバリアフリーに関する研究、(4) キャンパスの物理的バリアを解消する物理的バリアフリーに関する研究を実施してきた。そして、これらの研究成果を盛り込んで(5) 実験授業を実施した。

II. 2007年度活動報告

(1) 発達障害の理解と支援に関するセミナー・シンポジウムの開催

「発達障害の世界を知る——思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて——」と題して、思春期・青年期における発達障害の症状の理解と適切な支援についての連続公開セミナーの第5回、第6回を以下のテーマ・講師で開催した。

- ・第5回(2007年6月15日)「発達障害支援の最先端：応用行動分析によるポジティブ支援」

講師：山本 淳一(慶應義塾大学文学部教授)

- ・第6回(2007年10月12日)「発達障害のある青年の就労支援——大学における支援に期待したいこと——」

講師：向後 礼子(独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター)

第5回セミナーには143名(学内60名、学外83名)、第6回セミナーには102名(学内36名、学外66名)の参加があり、昨年度からの参加者は延べ647名(学内253名、学外394名)になった。

(2) 感覚障害のある学生の支援実践を通じた文化・情報面でのバリアフリーに関する研究

a) 在学中に途中で視覚障害になった大学生の復学支援に関する研究：在学中に緑内障で視覚障害になった大学生の復学支援に関する事例を通して、早期介入のあり方、学内体制の取り方、復学支援に必要なだったトレーニング、復学後のサポート等についての記録を整理し、復学支援に必要な要素を検討した。その結果、相談開始から6ヶ月で準備が整い、復学を果たすことができた。復学までの過程を分析した結果、有効だった支援は、態度形成支援(専門家による面接、支援技術の紹介、同様の年齢の視覚障害学生との交流の場の提供)、支援技術修得支援(復学後に履修する講義等の授業分析を教員が行い、視覚障害ピア・トレーナーによる支援技術トレーニングを実施)、履修支援(履修情報の早期提供や教員との事前面談支援を実施)、担当教員との調整(視覚障害理解支援や講義・試験方法等の調整を実施)であった。

b) 聴覚障害学生の支援に関する研究：2名の聴覚障害学生の支援活動を通して、聴覚障害学生の支援に必要な事項を整理した。主な支援内容は、a) ノートテイカーの派遣、b) ノートテイカーの募集等のコーディネート、c) ノートテイカー養成、d) FMシステムによる補聴補助であった。

(3) カリキュラム化に向けた実験授業

a) 実験授業1「バリアフリー・ユニバーサルデザイン(以下、UD)に関する講義科目の検討」：慶應義塾創立150年記念事業未来先導基金2007年度プログラム「慶應バリアフリー・UDプロジェクト」の公開セミナーを利用し、バリアフリーに関する教育カリキュラムに関する検討を行った。経済学部の研究セミナー(3年生10名、4年生2名の合計12名)と演習(3年生11名、4年生2名、大学院生1名の合計14名)を受講している学生の協力により、公開セミナーの有効性について評価を実施した。学生による評価の結果、基礎セミナーよりも、企業セミナーの方が、また、専門家よりも有名人の方が、人気が高いことがわかった。これは、セミナー参加者

へのアンケートにおいても同様の傾向が見られた。また、人気の高い有名企業がビジネスとして、バリアフリーやUDに取り組んでいることが、バリアフリー・UD学習の大きなモチベーションになることがわかった。受講者の中には、今回のセミナーをきっかけに、インターンシップに参加したり、就職活動にまで影響したりするケースがあった。これらの結果から、有名人や就職先として人気の高い企業・業種に関しては、今回のような課外のセミナーでもよいことが予測できた。しかし、専門家や知名度が高くない講師によるセミナーの場合には、参加者が少なかった。このことから、より専門性の高い内容に関しては、総合教育科目のような講義科目として設定する必要があることがわかった。

b) 実験授業2「障害当事者との共同作業が学生の態度に及ぼす効果」：慶應義塾創立150年記念事業未来先導基金2007年度プログラム「慶應バリアフリー・UDプロジェクト」のワークショップ「だから今、『手学問のすゝめ』——あの手この手でタッチ、キャッチ、リッチ!——(2007年10月20日)」の準備作業を題材として、障害当事者との共同作業が学生の態度に及ぼす効果を検討した。参加した学生は、大学3年生2名、大学4年生1名、大学院生1名の4名であった。共同作業を行った障害者は、ワークショップの講師を務めた4名の視覚障害者(研究者1名、大学院生1名、学部学生1名、社会人1名)であった。行った共同作業は、ワークショップの企画・運営で、5ヶ月間に渡って、それぞれミーティングを繰り返した。その結果、これまで視覚障害者との交流経験が少なかった学生が、視覚障害者の支援方法を自然に身につけることができた。また、ワークショップ後も、友人としての交流が継続している。この取り組みから、障害者との共同作業が態度形成や技術習得に効果的であることがわかった。

(4) キャンパスの物理的バリアフリーに関する実践的研究

慶應義塾大学に在職・在学している障害当事者と専門家が集まり、議論やフィールドワークを重ね、新校舎建築に関する説明会では、バリアフリー化に関する提案を続けてきた。その結果、学内の新校舎のバリアフリー化に関して、建設会社と慶應義塾大学に在職・在学経験のある障害当事者と専門家(教職員、学生、卒業生)のミーティングが実現した。そして、議論の結果、いくつかの提案が設計に採用

されるに至った。なお、提案内容は、他のキャンパスにおける新しい校舎建設の際の参考資料としても提出できた。

Ⅲ. 研究グループメンバー

【研究グループ塾内メンバー】

増田 直衛 (文学部)、中野 泰志 (経済学部)、高山 緑 (理工学部)

【研究協力者】

伊福部 達 (東京大学先端科学技術研究センター)

中邑 賢龍 (東京大学先端科学技術研究センター)

(中野泰志)

(3) コミュニケーションキャンパス構築

代表研究者 中山 純 (経済学部)

2006年度より継続しているドイツ語の学習支援環境構築の研究活動の重点を、2007年度は主に2年生以上の学生の利用も想定した複数年度対応の環境整備に置いた。この条件を満たすために、情報のやりとりの要にあるポートフォリオサイトの機能の拡張と使用上の利便性の改善に開発作業の大半を費やした。

学生の学習履歴情報の中でも、もっとも重要な成績情報を登録する通常試験と学年度末の統一試験の結果を登録する機能を設け、学生の過去の成績を追跡できるようにした。また学生が登録する学習履歴機能の中に、2年生については授業ごとの理解度の記録を加えた。学生がすぐに登録を行うことが前提になるが、教員は授業後に学生ごとの理解度やクラス全体の理解度を確認できる。この機能は1年生の画面には現在表示していないが、管理者側の操作ですぐに追加できるようになっている。

このポートフォリオを経年で利用していくと、授業計画などでは過去のデータを一部応用することもある。利便性の改善という意味からも、前年度の授業計画をコピーできる機能を追加した。このコピーは一部分でも全体的でも可能である。また授業計画の個別登録や開講回の並び替えなど、操作性や利便性に関する改善も実施した。学生の出欠情報の

CSVによる出力／取り込み機能の追加も、この部分の作業になる。

登録と管理に関する機能の開発にほぼ目処がだったので、後半は主に蓄積されるデータの活用と提示の方法について試行を続けた。データベースとして置いてある文法、表現、語彙の情報を整備・更新するための管理画面を作成し、面倒な作業手順を踏まなくても、これらのデータを更新できるようにした。活用面ではまず語彙データの提供を考え、データのテーブルレイアウトを決めた後、アクセス画面のデザインや使い勝手を検討した。現在、利用に当たったデータの最終的な整理を行っている。2008年の秋からこの機能もリリースして、学習支援環境としてのポータルサイトの全容を提示する予定である。

すでに昨年末から今春にかけて、蓄積された各授業のデータの活用方法についても議論をつづけており、いくつかの案については有効性を検討するため、分析データに基づいた画面を作成して検討作業を続けている。まだ手探りの状態であり、蓄積されているデータも1年にも満たないものなので説得力に欠けているが、今後さまざまな形で途中経過を公開して議論を深め、効果的な利用法を考えていきたい。

最後になるが開発作業に関する意見や批判を受けるために7月に私立大学情報教育協会が主催する全国大学IT活用教育方法研究会と10月に大阪市立大学を会場として開催された日本独文学会秋季研究発表会でそれぞれ発表したことを報告しておく。

【研究メンバー】

中山 純 (経済学部)、朝吹亮二 (法学部)、千田大介 (経済学部)

(4) テクノキャンパス構築

研究代表者 武山政直 (経済学部)

I. 研究の概要

プロジェクト最終年次の2007年度は、2005年度と2006年度を通じて試みた教材開発を進展させるとともに、それらの結果を踏まえて、テクノ・キャ

ンパスとしての新たなる学習環境構築のイメージを描くことを目標においた。具体的には、2006年度に実施したフィールドワーク手法を応用し、岐阜県高山市の巡見調査をモデルケースとした学習モデルの設計を行い、そこでのモバイル教材の活用方法を提示した。また三田キャンパス周辺の商店街と学生の交流による学習を促進すべく、商店街の街頭に設置されたテレビモニター向け映像コンテンツを商店街との共同で制作し、その運用方法について検討した。さらに、これらの実践的な学習における知の在り方や、そこで利用されるテクノロジーの意義を確認しつつ、身体知や社交知を重視した学習を促進するICTの活用方法と、テクノ・キャンパス構築ビジョンについて検討した。

II. 2007年度活動報告

(1) まちあるき学習に関する機器セットの制作

(長田)

2005年度以降継続的に開発と運用評価を行ってきた、まち歩きフィールドワークのための情報機器セットについて、2007年度は特に以下の内容に取り組んだ。

【システムの本格的な運用開始】

2006年度末に実施したGPSレシーバの活用実験に基づき、2007年度からは、GPSを含む本格的なフィールドワーク学習機器セットの運用を開始した。実際に本セットを用いて以下のフィールドワークを実施した。

A) 2007年7月1日 代官山地区にてまちあるきフィールドワークの記録撮影活動

(2007年7月6日 追加作業を実施)

B) 2007年8月1～3日 岐阜県高山市におけるフィールドワークの実践

【システムの改良】

2005年度、2006年度に行った情報機器セットの拡張として、フィールドワークに参加した学生からの強い要望に応え、画像編集ソフトウェアの追加を行った。

(2) 大学周辺商店街との交流と街頭テレビの番組制作(武山)

インターキャンパスプロジェクトとの連携により、慶應大学三田キャンパスが隣接する三田通りに

設置された映像ディスプレイを、学生と三田地域の交流を通じた実践的学習の手段ととらえ、三田商店街振興組合の協力を得てその実現方法を検討した。利用した街頭ディスプレイは当商店街振興組合が所有するものであり、三田通りに面する組合事務所の窓のすぐ内側に置かれているが、ディスプレイ表示面が窓側に向いているため、施設の外からディスプレイの映像が大きく見えるようになっている。

この取り組みにおいて、経済学部武山研究会の学生(代表：長谷川喬祥)が、当該の商店街や三田地域を紹介する各種の映像コンテンツを制作して実際に上映し、三田通りのディスプレイの前を通行する人々の反応を観察する評価実験を行った。なお、三田通りの歩行者が映像に合わせた音声を聴き取れるよう、施設の屋外にプラズマディスプレイと接続されたスピーカーが設置された。この評価実験を通じて、街頭ディスプレイに適切な映像作品の時間の長さ、映像と文字情報の効果的組み合わせ、日中などの日差しが強く映像が見えにくい状況での音声の効果的利用法を確認した。

また、同研究室学生メンバーが三田通商店街振興組合の組合員(主に商店経営者)と街頭ディスプレイの有効な活用について検討する会合を継続的に実施し、その結果、商店街主催で実施される2007年12月開催のクリスマスイベントに合わせた映像コンテンツを制作し、イベントに合わせて上映することとなった。制作された映像コンテンツは、景品が当たるクリスマスキャンペーンの告知や、三田通りでのクリスマスイベントの様子を映像と音声で伝えるものである。いずれのコンテンツについても、学生メンバーが商店街の組合員の方々の協力を得てその取材と撮影を行ったが、そのような活動を通じて、学生のメディア活用スキルの向上がはかれるだけでなく、地域についての理解や、地域の人々との相互理解が深まるといった効果が得られることがわかった。

このような域内メディアの活用方法や、それに向けたコンテンツ制作を大学と地域が協同で進めていくことで、学生の創作意欲を地域の理解や経済の振興と結びつける、実践的な学習モデルを構築することができる。

(3) テクノ・キャンパス構築のビジョンづくり(武山・長田)

テクノロジーの語源であるテクネーという言葉の

持つ“技芸”としての意味に注目し、身体知や社交知を重視した学習を促進する ICT の活用方法と、テクノ・キャンパス構築のビジョンを導いた。特に、今後の知識創造環境のユビキタス化と、21 世紀社会におけるテクネーとアルスの追求を前提として、知の職人や社交人を育む学習モデルとキャンパスづくりの課題を指摘した。

Ⅲ. 研究グループメンバー

【研究グループ塾内メンバー】

武山政直(経済学部)、長田 進(経済学部)

【研究協力者】

妹尾堅一郎(NPO 法人産学連携推進機構理事長)

超表象デジタル化研究ユニット

研究代表者 境 一三(経済学部)

1) 2007 年度の活動(総括)

2007 年度の活動案として掲げたのは以下の 3 項目であった。

1. 各ユニットの活動に対応したサーバの運用と機能の改良
2. hydi システムインターフェース・デザインの改良
3. ユーザ管理・セキュリティ管理・コンテンツ管理の改良

2) 2007 年度の活動状況

2007 年度は hydi において以下の活動が行われた。

1. データベース・サーバの本格的運用と機能の改良
2. ストリーミング・サーバの本格的運用
3. 文書管理・情報管理システム部分のデザインの改良
4. ユーザ管理・セキュリティ管理の改良
5. コンテンツ管理の改良

- 作業項目の確認や進捗状況の把握をより柔軟且つ容易に行うために、ファイルメーカー社の FileMaker を用いて開発された「共同作業リスト・伝言(hydiのお仕事)」を本格運用し、その評価と部分的改良を行った。また、共同作業用文献データベース「HYDI PB001(洋書文献データベース)」と「HYDI PB002(和書文献データベース)」も本格運用を行い、同様の評価と改良を行った。
- RealNetworks 社の Helix Universal Server により構築されたストリーミング・サーバを本格運用し、各ユニットで蓄積されたコンテンツをこのサーバに登録して、ストリーミング配信を開始した。
- hydi の既存部分について、2006 年度に引き続きインターフェースの改良を行った。
- 基幹システム Xoops が html と php を混在させているために生じる汎用化に対する障壁に関する研究を行った。
- Xoops/ Docushare/ FileMaker/ Helix といった hydi で用いられている諸技術をインターフェース上

いかにシームレスに接合させるかという問題に関する研究を行った。

- 3DCG アーカイヴとどのようにスムーズに連携させるかという問題に関する研究を行った。
- 基幹技術にオープンソースの Xoops を用いているために困難なセキュリティ確保に関する研究を行った。
- 共通認証システムの利用可能性について研究を行った。
- コンテンツ管理のために、システム的な問題だけでなく、マンパワーの投入方法についても検討を行い、運営の改良を図った。

【プロジェクトメンバー】

佐藤 望(商学部)、倉館健一(外国語教育研究センター)、米川雅士(理工学研究科)、Tarun Kumar Sheel(理工学研究科)

基盤研究①

カリキュラム研究

4年間を見据えた教養教育に関するカリキュラム研究

研究背景・目的

教養研究センターでは、2005～2006年度にかけて基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」を展開した。2007年3月『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——改革への処方箋』を公表し28項目の政策提言を行った。その成果を受け、2007年度からは2カ年計画で、基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究Ⅱ——4年間を見据えた教養教育に関するカリキュラム研究」を展開することになった。

前回の研究で、学生アンケート調査にも現れたさまざまな問題点（履修制度、成績評価、継続した教養教育にかかる諸問題）を解決するための方策を明らかにすることが急務となった。そのためにも、学部間で連携を行いながら、教養教育の理念の深化を行うとともに、より効果的な教養教育のカリキュラム実現への提言を行うことが主な目的である。

研究活動内容

2007年度には、幹事会2回と、研究会5回を開催した。「成績評価問題」、「セメスター制度問題」、「副専攻の問題」の3つの課題を中心に据え、それぞれのテーマを担当する3つのチームに分かれて調査・研究を進めていった。

今回は、具体的で実行可能な提言を目指し、学内の諸事情に関する調査に重点を置いた。

「成績評価問題」では、現在、成績評価は教育の質を保証するものとして社会から注目されるとともに、その厳格化が求められているという認識のものに、中山純氏（経済学部・ドイツ語）、秋山豊子氏（法学部・生物）、村越貴代美氏（経済学部・中国語）をパネリストとしたディスカッション・セッションを2回開催した（2007年12月12日、2008年1月26日）。

「セメスター制度問題」では、各学部でのセメスター制度の展開について、広範な調査を行っている。具体的には、文・経・法・商・理工5学部での、セメスター制度の形態や運用のあり方について（進級や、留学・休学制度、成績公表、履修登録、単位の扱い方等）の調査である。また、三田学事センターの中峯秀之氏にもこの問題に関して報告をしていただいた（2007年10月15日）。

「副専攻の問題」に関しては、各学部で現在展開さ

れている教養教育を継続するプログラム（副専攻的なプログラム）について勉強会を行った。法学部の副専攻制度、および経済学部で展開されている研究プロジェクトについて、それぞれ朝吹亮二氏（法学部・フランス語）、福山欣司氏（経済学部・生物）に（以上2007年11月7日）、商学部の強化プログラムについて種村和史氏（商学部・中国語）に（2008年1月26日）に報告をしていただき、この問題に関する認識の深化をはかった。

そのほか、学部カリキュラム検討委員会の立ち上げを睨んで、2004年度に、2001年～2003年にかけて行った日吉における総合教育科目の総合的な実態調査を、2007年～2008年度に関しても着手した。

また、1年間の活動記録は内部公開資料として冊子体にまとめるとともに、活動記録は内部公開用ウェブページと、塾内公開用ウェブページ（<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/>）に掲載されている。

今後の展開

以上の調査・研究を2008年度も継続する。セメスター制度に関しては学内外の調査を継続し、成績評価に関しても具体的な指針作りに着手し、さらに学部を越えた教養教育を深化するプログラム展開の可能性についても調査・研究を進めていく。また、2008年度設置予定の「学部共通カリキュラム委員会」、および「日吉カリキュラム検討委員会」に対しても、具体的なデータの提示、提言ができるように準備を進める。

その上で、2008年度末には、一連の提言を含む研究報告書としてまとめて、公開する予定である。

研究会のメンバー

伊藤行雄（経済学部・座長）、大場茂（文学部・幹事）、坂上貴之（文学部）、坂本光（文学部・幹事）、中島陽子（文学部・教養研究センター副所長）、柏崎千佳子（経済学部・幹事）、林田愛（経済学部）、村越貴代美（経済学部・幹事）、木俣章（法学部・座長代理）、小林宏充（法学部）、横山千晶（法学部・教養研究センター所長）、佐藤望（商学部・幹事・教養研究センター副所長）、種村和史（商学部・幹事）、福澤利彦（商学部）、鈴木由紀（医学部）、萩原真一（理工学部・教養研究センター副所長）、倉館健一（外国語教育研究センター）、村山光義（体育研究所・幹事）

（伊藤行雄・佐藤 望）

基盤研究②

身体知プロジェクト

1. 基盤研究「身体知プロジェクト」の研究目的

昨今哲学のおよび芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られるようになってきている。それらの言葉の呈する複雑さは、教育の場におけるこの新たな知の定義の必要性を突きつけると同時に、座学に限定されない知のあり方が、現在求められていることを物語っている。危機と変革の時代には、全人的な知が必要とされるからである。

自分を知り、他者と交流する際、私たちは書かれた「言語」以外に身体を使う。同時に知を獲得し、理解し、伝える作業はすべて身体を経由している。つまり「身体知」は言語知・社会知の基礎ともいえる。またそれは、単に肉体としての身体という意味のみならず、人間をホリスティックにとらえた上での身体であり、当然ながらそこには精神性や感情論も含まれることになる。このような身体に対する議論の背景には、時代の突きつけるひとつの危機感があることは否めない。つまりこれはテクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロール不可能な精神・感情・不安といった諸現象であり、それらの危機感教育現場で切実に意識されているものでもある。

論理的思考力が感性や身体性と手を携えて初めて真の知性が生まれることは、言を俟たない。考えることは、身体に触発され身体と不可分の全人的な行為以外の何ものでもないからだ。さらに、身体は、フーコー以降の現代思想でも、脳科学や認知科学でも、芸術や臨床心理学の領域でも、大きな注目を集めながら、それぞれが社会構成主義、科学主義、体験主義と異なる枠組みで研究・教育が進められてきており、相互間の交渉が乏しかった。それぞれの成果を研究のみならず教育の実践を通して統合する試みがなされるべきときがやってきた、と言えるであろう。つまり教育に関わるものが、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、意識的に相互の壁を突き崩して統合的な教育を目指すことこそが、必要となる。

同時にそれらの知を伝える新たな授業の形態を模索する必要がある。慶應義塾においても、各領域でフィールドワークを取り入れた少人数授業やインターンシップのような体験型実務教育が徐々に広がりつつあり、大きな成果を挙げている。これらの新しい教育の試みを推進すると同時に、さまざまな効

果的な授業形態の可能性を探っていくことが、大学教育の未来のために不可欠であろう。

教養研究センターでは、そのような見地のもとに、21世紀の中で私たちが再建もしくは発見すべき「身体」とは何であり、それをひとつの「知」とした上で次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいかを教職一体となって考える場として2005年5月に基盤研究「身体知プロジェクト」を発足させた。具体的には以下の手順で身体知教育の理論化を試み、広く外部に発信することをその目的として活動している。

- 1) さまざまな「身体知」のあり方の過去と現在を見据える
- 2) 「身体知」教育の実践の場を視察し、実践者との意見交換を行う
- 3) 実験授業を通じて「身体知」教育の意義と方法を探る
- 4) 実践の成果を踏まえて新たな「身体知」および「身体知教育」を理論化する

これらの目的に沿って2007年度の「身体知プロジェクト」ではさまざまな実践の取り組みを研究するとともに、各分野身体に取り組んでいる研究者を交えての研究会を開催し、同時に実験授業の実践を行うことで理論を試す場を構築した。またこの身体知プロジェクトの実践部分の一部は未来先導基金採択プログラム「声プロジェクト」として展開された。こちらに関しては次項を参照されたい。2007年度の活動は以下のとおりである。

2. 2007年度の活動内容

(1) 月例研究会

本年度は学内で何らかの形で身体教育に関わっている研究者・教育者に加え、外部から芸術家、哲学者を講演者、およびコメンテーターに迎えて現在の慶應義塾で行われている身体知教育のあり方について発表し、議論すると同時に、芸術の分野、哲学の分野での身体知のあり方について、問題提起してもらい議論の素材とした。コーディネーターは武藤浩史(塾・法学部)と熊倉敬聡(塾・理工学部)が務めた。研究会の日程と講演者、およびタイトルは以下のとおり。

- 2007年8月1日(水) 熊倉敬聡(理工学部)「“へたる”身体／“つきぬける”身体」
- 2007年9月7日(金) 中島智(武蔵野美術大学)「身体知と徴候知」
- 2007年11月7日(水) 特別講演会 木下晋(画家)「生の深い淵から——老いの尊厳」(身体医文化論研究会との共催)
- 2007年11月14日(水) 武藤浩史(法学部)「徴候知の複数性と総合——身体知と文学実験授業」
- 2007年12月11日(火) 河野哲也(玉川大学)「『見られる』という謎」
- 2008年1月21日(月) 身体知プロジェクト研究報告会「体をひらく、心をひらく」
- 2008年3月27日(木) 横山千晶(法学部)「2008年度身体知プロジェクトへ向けて」

(2) 実験授業「アートで体をひらく、心をひらく」

2006年度に立ち上げた実験授業「体をひらく、心をひらく」の第2弾として「アートで体をひらく、心をひらく」を開催した。

コミュニケーションは言語のみを通じて行われるものではない。発信者は絶えず自分の身体そのものをさまざまに使いながら情報を発信している。時にその発信は自分でも気がつかないうちに行われていることも多い。その意味で常に自己は他者であり、またその他者性は自己にとって不可解でありつつも、限りない豊かさをはらんでいる。

2006年度の実験授業ではダンス、コラージュ、連句、瞑想などのさまざまなメディアを使って自己表現を行うことで、自分の、そして他者の身体と心を解き放ち、その潜在力・豊かさを発見し、味わい、さらに繰り返し広げていくことを主眼とした。

2007年度は意識して身体を発信源とすることで自分自身の解放と他者理解を行い、心身の成長を目指す表現アート・セラピー、および音楽、絵画、ダンス、ドラマなどのアート表現を通してさまざまな学習効果を挙げていくアーティストと教師のコラボレーション、Learning Through the Arts のふたつを主眼に授業を組み立てた。

今回も去年に引き続き、ただ「体感」するだけでなく、言語やイメージを通しての体験のディブリーフィングを行い、まとめの反省会を開催し、体験の共有に努めた。また各授業を映像と音声、および観察者によって記録し、それぞれの内容の分析も行っ

た。2008年1月21日にはこの2年間の実験授業に携わった講師と参加者を招いての研究会を開催し、実験授業の振り返りと身体知教育の今後の展望について議論した。全4回の授業の日程と担当者は以下のとおりである。

- 各回 16:30～19:30。コーディネーターは手塚千鶴子(日本語・日本文化教育センター)、熊倉敬聡(理工学部)、横山千晶(法学部・教養研究センター所長)
- 2007年11月14日(水) 「ダンスをしながら数学を学ぶ?——アートを学習に取り入れる新たな挑戦：模擬授業」(講師：Colleen Lanki, Kate Eccles [カナダ王立音楽院])
- 2007年11月30日(金) 「アート表現を通して他者とのコミュニケーションと成長」(講師：小野京子[表現アートセラピー研究所代表])
- 2007年12月10日(月) 「アート表現を通して未知な自分との出会いと成長」(講師：小野京子)
- 2007年1月16日(水) まとめのセッション

(参加者について)

参加者は2006年度に引き続き、すべての塾生を対象とした。また、ポスターやウェブによる募集によって、内外の教育関係者からの応募もあった。特に外部の小・中学校の教員、カウンセラーを含め、2006年度の実験授業の参加者のうちかなり多くの人々が引き続き受講し、学生・教員を問わずグループ・ワークショップとともに参加しつつ、身体と教育の意義を考察したことは、意味があったと思われる。また、11月14日の模擬授業には塾の学生、教職員を含め、大学外部からも多くの参加者を集めた。

(3) 研究報告会の開催

- 2008年1月21日(月) 16:30～19:30
研究報告会「体をひらく、心をひらく」

2007年度は2006年度と2007年度の身体知実験授業「体をひらく、心をひらく」を振り返る研究報告会を開催した。構成は、2部からなる。まずコーディネーターの手塚千鶴子、熊倉敬聡、横山千晶の3名による総括、そして2006年度の授業の講師を務めた井上ウィマラ(高野山大学)、佐藤仁美(放送大学)によるコメントの前半と、参加者を含めた自由討論の後半部である。

前半部分では、手塚が2年間の授業の内容紹介と

その教育的な分析を行い、横山が身体知教育の意義を説明し、熊倉が大学のカリキュラムに身体知教育をとり入れていくことの重要性とその際の問題点を挙げて議論した。ついでコメンテーターの佐藤仁美氏のご自分の担当された授業の振り返りとその分析、井上ウィマラ氏はそれぞれの教育の場での身体知教育の実践が持つ可能性と問題点を実践者の立場から説明した。

後半部分では参加者による積極的な討論の場となった。今回は参加者である慶應義塾内外の教育者、出版関係者、および塾生からなる参加者の意見を聞くことができた。具体的にはこの実験授業に参加しようと思ったきっかけから始まり、参加したことによる自分の中での変化、教育に携わっていく際の変化をそれぞれが自由にシェアし、最終的に実験授業に対する建設的な批判と今後の期待と展望を議論しあった。いずれもこのような授業の持つ意義には深い賛同が示された。

(4) シンポジウムへの参加

● 2008年2月9日(土)横浜美術館

シンポジウム「アートと学校教育の連携のこれから——子供たちの生きる力をはぐくむために」

研究会メンバーの横山千晶(塾・法学部)が参加。このシンポジウムでは横浜市芸術文化振興財団が中心となって行われているアーティストと学校教育のコラボレーションプロジェクトに参加したアーティストと教育者、コーディネーターたちがそれぞれの事例を紹介し、成果と問題点を話し合う場が持たれた。単なる成果報告だけでなく、アーティストが教育の現場に入っていくことの問題点やコーディネーターの仕方の問題点などもそれぞれ挙げられ、身体知の実験授業の中で大いに参考になる意見が多数挙げられた。

(5) 研究会の今後の課題

「身体知」という言葉がさまざまな場面で語られるようになって久しい。教育の場でも統一的な視点は導きにくい。だからこそ、慶應義塾では何ができるのか、そしてそのようなさまざまな身体(知)観をどこでつなぎ合わせていくことができるのかを実験しながら理論と照らし合わせていくことがこれからの課題である。月例研究会を積み重ねつつ、実験授業(「体をひらく、心をひらく」)および「声プロジェクト

ト」を展開していくことでその蓄積から2008年度は発進することを目標としたい。同時に義塾内外で取り組まれているさまざまな試みを積極的に調査していく予定である。それらの活動を通して、具体的には慶應義塾発の身体知教育を書籍、およびそれ以外のメディアを通して広く世に問いかけることが次の目標となる。同時に2008年1月21日の研究会でも議論されたとおり、カリキュラム上の課題や教育に携わる人々の意識改革にも取り組んでいかなくてはならないだろう。

社会では教育における感情と身体の制御とバランスが大いに注目され、同時にそのアンバランスが問題とされている。基盤研究「身体知プロジェクト」では、その問題に対する一つの道を提示するにとどまらず、今以上の豊かな教育の土壌を築き上げることこそを目指したい。

【プロジェクトメンバー】

横山千晶(法学部)、中島陽子(文学部)、北中淳子(文学部)、武藤浩史(法学部)、新谷 崇(法学部)、佐藤 望(商学部)、森吉直子(商学部)、萩原真一(理工学部)、熊倉敬聡(理工学部)、小菅隼人(理工学部)、高山 緑(理工学部)、手塚千鶴子(日本語・日本文化教育センター)、河野哲也(玉川大学)、中島 智(武蔵野美術大学非常勤講師)

(横山千晶)

声プロジェクト

身体的要素を導入して研究・教育の場の活性化を目指す、教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」は、既存のカリキュラムに身体知の理論を盛り込む試みとして、「声プロジェクト」を立ち上げ、これが義塾の2007年度未来先導基金の事業として採択された。このプロジェクトはその名のとおりに「声」と「発話」をめぐる教育プログラムの開発であるが、そのプログラムは単に音声のみに限るものではなく、「声」と身体、「声」と言葉、「声」と歴史・社会などの広い連関から「声」の意義を理論的・体験的に考察して、新しい教育の形を模索する試みである。

2007年度の「声プロジェクト」は2つの活動をその主軸とした。それぞれ、現行のカリキュラムとタイアップして活動を展開している。(1)新しい文学教育・語学教育——「朗読」と「ドラマ」、および、(2)声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践——大学教養教育における音楽実践、である。

(1) 新しい文学教育・語学教育——「朗読」と「ドラマ」

座学で主として作家や作品の背景についての講義からなる従来の文学の授業から離れ、身体を用いた体験・参加型の文学授業を実施することで、大教室の授業で足りないところを補うとともに、時代にふさわしい文学教育の形を探り、「語力」と身体性・感性の相互的陶冶を目指した。ここでは、とりわけ「朗読」を通して新たな文字へのアプローチを図るのみならず、将来的には、オリジナルなドラマやラジオ物語の創作をも目指すクリエイティブ・ライティング系文学授業を視野に入れた。従来の言語中心の文学理解から、体を通した新しい文学理解へと導くだけでなく、文学作品の創作過程に自らが参加するところまで踏み込んでいくことで、まったく新しい教育の形態を作り上げた。

また、外国語授業において、「ドラマ」という創造的・芸術的営みを中心に据えることで、学生に課題を与えそれをこなしてゆく従来の語学教育ではなかなか難しい、演劇上演という深い身体的体験を通した語学習得の試みを展開した。

具体的にはプロジェクト・メンバーとの意見交換や過去の「群読会」での成果と教育課程の積み上げを参照しながら、既存の授業の改革に臨んだ。成果はそれぞれが持ち帰り、一貫校や大学での教育に反映させることで、さらに研究対象を広げていった。以下それぞれの、具体的な内容を紹介する。

(1-1) 新しい文学教育

大教室で行われている「文学」の講義の履修者(全学部共通科目「文学——物語・自己・歴史」法学部・武藤浩史担当)を対象として、夏休みに朗読と身体ワークショップの講師を招いた集中的な実験授業を開催した。ここでは「朗読」と身体に対する気づきのワークショップで芸術言語体験と身体体験を深めた後で、文学の創作過程に自らが参画していくことまでを目指した。この試みは、通常学期の大教室授業

に足りないところを補い、「マスプロ授業」改革のための実践である。2007年度は、前期の授業が終了した直後の8月第1週(8月6日—11日)に実験授業を開催した。テキストは、「文学——物語・自己・歴史」の中でも精査した、D・H・ロレンスの小説『チャタレー夫人の恋人』(拙訳、ちくま文庫)。参加者は20名。連日、90分授業を2コマ実施した。初日は、武藤担当で「オリエンテーション」と「解釈と身体」と題する講義と討論。2日目は、臨床心理学者佐藤仁美氏担当の「触れること」をテーマとする身体ワークショップと世界的ダンサー黒沢美香氏担当の、小説テキストと連動させた身体ワークショップ。3日目は、濱野久美氏担当のヴォイストレーニングと岡慎子氏担当の朗読指導。4日目は、引き続き岡氏の朗読指導の後に、講談師神田陽子氏担当の創作講談指導。5日目は、作品の書き換え・創作ワークショップ。6日目は、ダンスと創作の発表会。授業アンケートで確認した学生の反応は大変好意的。

詳細は、次の論文に記したので、参照していただきたい。武藤浩史・横山千晶「身体知と新しい文学教育①——レディ・チャタレーとダンスを」、『教養論叢』第128号(2008年2月)1-51頁。(尚、当報告書の文章もこの論文に多くの部分を負っている)。

(1-2) ドラマを通した語学教育

文字によるテキストを実際に声と身体を使ってのディクッション、あるいはコミュニケーションに置き換えることは、頭で理解した内容を身体で表現するという一連の作業である。コミュニケーションとは単なる「言葉」ではない全身活動である以上、身体は語学のクラスで常に意識されるべき存在であろう。この実践では書かれたものを身体を使いつつ、理解し、理解したものを再び自分の身体を使って他人に伝え、そのようにして獲得し共有したことを再びログス化してみるという一連の訓練を、新たな知の領域として学生たちに体験させる試みとして、「ドラマ」を使った。本年度は外国語教育研究センター設置の英語「ドラマクラス」(全学部共通科目 法学部・横山千晶担当)をその実践の場として、新たな語学教育の可能性を模索した。当授業はすべてワークショップの形式で行われるものであり、クラス内でのグループワークそのものがすでにコミュニケーション構築の場である。

クラスの中で作り上げられたものの成果は、2007

年12月13、14日に英語のドラマ公演として日吉キャンパス来往舎にて一般公開した。演じられたのは、アメリカの人気作家ニール・サイモンの『ベアフット・イン・ザ・パーク』。学生たちは、会場に来た観客とのコミュニケーションを図ることで、自分が理解したことを同じく観客に理解してもらうという課題がここでは課されることになる。その結果、外国語のみならず広い意味での声と身体を使ったプレゼンテーション能力を、それぞれの学生が獲得することになった。授業アンケートで確認した学生の反応は大変好意的。

(2) 声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践—— 大学教養教育における音楽実践

声と楽器に実践を取り入れた授業カリキュラムの実践を行った。この授業実践は、声を通じて、学生に共同実践の体験を行わせ、歴史・文化・言語の総合的な学習の機会とすることを目的とした。具体的には合唱クラスとオーケストラ・クラスの2クラスにおいて、それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、そのための声や身体の学びを進めた。最終的には2008年1月に2クラス合同の公開演奏会を、横浜市・毎日新聞社主催のクラシック・ヨコハマ参加事業として、横浜市や地域住民の方々の協力も得て、学内・地域に開かれたかたちで実施した。

本事業は、日吉キャンパスで展開される総合教育科目「音楽」(商学部・経済学部開設 商学部 佐藤望担当)の枠内で行った。総合教育科目「音楽」における身体知的教育活動は、2000年よりその試みを開始し、年々教育効果を図りながら、新しい大学教養教育におけるメソッドの開発を進めてきた。その効果は、第一義的には、学生にとって協働の喜びを得る体験の機会となるとともに、自身の声を通じて歴史文化の深みに直接的に触れるという点にある。同活動は、身体知の実践の成果を学内と地域に披露してきた。こうした緊張感を与えられる場面の存在により、学生にとっても得難い感動的体験を与えてきている点は、(1-2)のドラマクラスと共通する「場」の問題とかかわってくる。

尚、公開演奏会の詳細は、次の通りである。

日時：2008年1月9日

場所：来往舎イベントテラス

曲目：モーツァルト 交響曲 29 番 (オーケストラ・クラス)

ハインリッヒ・シュッツ モテット (小編成合唱)

バッハ モテット (大編成合唱)

バッハ カンタータ 78 番 (合唱+オーケストラ+横浜市より派遣されたソリスト)

学生たちは、アマチュア音楽家として抜きん出たレベルの演奏を披露するとともに、プロのソリストと共演することにより、本物の音楽家の凄みをも間近に見て、大切なものを学んだ。観客の反応も大変好意的。

(武藤浩史)

体をひらく、心をひらく

1. 2年間の実験授業の総括としての07年度の研究

05年度に「身体知プロジェクト」が誕生した。身体知とは何かを研究、理論構築したうえで、実験授業を実践、さらに社会に発信していくのが本来の歩みであった。しかしプロジェクトメンバーに共有された危機意識、身体とのつながりを失い、体、心、頭がばらばらな学生があまりに多いのではという認識に突き動かされ、これら三つの間の連携を回復し、全人的な成長をめざす「体をひらく、心をひらく」実験授業をたちあげたのが、06年度であった。その枠組みを踏襲し、アートをより積極的に活用する「アートで体をひらく、心をひらく」実験授業を、07年度には実施した。

さらに07年度には、2年間の実験授業をふりかえる研究会を持ち、何が体験され、どんな学びが生じ、どんな課題があるかを分析考察した。順序が逆とはいえ、まずは授業を実践し、そのうえでその意義を総括し、身体知の理論構築にむけての一步として、研究を行なった。

こうした経緯をふまえると、研究と授業実践とは別個に論じられるべきではないのだが、ここでは研究会で明らかにできた、研究の何がしかの成果を、まとめることにする。

2. 研究活動報告

研究会を開催し、1)以下のような考察を得ること

ができた。

2007年度基盤研究 身体知プロジェクト研究会
—— 2006・2007年度の身体知実験授業を振り返って——

日時：2008年1月21日(月) 16:30～19:30

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 中会議室

参加者：外部講師 井上ウィマラ氏(高野山大学)

佐藤仁美氏(放送大学)、

実験授業コーディネイター 手塚千鶴子、

熊倉敬聡、横山千晶

実験授業学内協力者・参加者 武藤浩史、

高山緑

その他実験授業参加者8名

1) 従来型授業と異なる実験授業の体験の特徴を抽出

実験授業の体験の特徴は、①<場>とそこに生じる<プロセス>に自分の<体、心、頭>の3つを動員しつつつめだね、②<過去、現在、未来>の時間軸と、<自分、他者、世界>という空間軸のテーマをとりあげつつ、③<アート・表現>をツールに展開される。そこでの動きは④<個別性と共同性><拡散と統合>といった相反する方向を向いている。

またこのことを「ひらく」という動詞の多様な意味から捉え直すこともできる。

2) 学びの特徴と意義を明らかにする

<アート・表現>をツールに、ときに相反する力や動きにひられる体験を通しての学びは、①体験重視、学生参加型の心理教育的ワークショップ型の学び、②学ぶコンテンツが明確に提示される重視される学びでなくプロセス重視の学びである。したがって、授業の展開には、ファシリテーションの役割が最重要となる。③アナログ的、右脳中心の活動が多いが、言語的アプローチも相互補完的にこなされる。

こうした学びの意義や効果は、授業全参加者の、振り返りや感想文、研究会での発言、授業記録者達の観察等からも、多様なレベルでの自分自身への新たな気づきという形で実感されていたことが明らかである。

3) 実験授業の問題点と課題の確認

自分や他者とふれ、互いにひらかれつつ学ぶ授業だからこそ、プロセスや場に自分をゆだねる際の不安にどう対応すべきか、また不安が嵩じた

ときの参加者たちのメンタルヘルスの問題への対応の必要性、こうした課題ゆえにか学生達の参加が少なかった状況でどう今後学生をひきつける広報を展開するか、大学にまだ馴染まないこうした授業への学内のサポートをどう確保するかなど課題が明らかにされた。

3. 今後の課題

①単位のとれる正規の授業をめざし、今後実験授業をどう改良しバージョンアップしていくかの研究、②実験授業の効果を検証するための調査研究、③身体知とは何かをふくめ理論構築にむけての、先行研究レビューや、議論の積み重ねが必要となる。

(手塚千鶴子)

芸術教育を考える

2007年度の基盤研究身体知プロジェクトにおける「芸術教育を考える」の部門は、今後の新たな展開のための準備を行った。これまでの教養研究センターにおける身体知教育の理念に基づいた芸術教育に関する活動は、音楽教育を中心としたプロジェクトが、教養研究センターのHAPPや声プロジェクトと連動しながら、行われてきた。今後これをさらに範囲を広げて発展させる可能性についての話し合いの時をもった。来年度に向けて新たなワークショップ実験授業の可能性について検討を続けている。メンバーは、武藤浩史(法学部)、横山千晶(法学部)、大和田俊之(法学部)、新谷崇(法学部)、佐藤望(商学部)。

(佐藤 望)

一般研究

KeioNetMath 構築による数理科学の総合的研究

研究代表者 戸瀬信之 (経済学部)

1. 研究概要

慶應義塾大学内では、数学および数理科学の研究が各学部に分かれて配属されている。そのため、大学内を一つにみると教員の資源は他の私立大学と遜色のない状況にあるが、学部を超えた教育・研究の方向性が定まっていないのが現状である。慶應義塾の教育・研究に関する現状の枠組みの中において、この問題点をできる限り改善するのが本研究の目的である。

2. 2007 年度の活動報告

(1) 慶應義塾における今後の数理科学の方向性

2007 年度は慶應義塾の数学・数理科学にとって非常に大きな曲がり角の年であった。すなわち、5 年間にわたる 21 世紀 COE 「統合数理科学」の最終年度であり、数理科学の教育・研究拠点として自立する途を求められた年であった。そのために、本研究の主なメンバーは夏休み中からほぼ毎週のように、慶應義塾における今後の数理科学研究の方向性を具体性の伴う形で議論を行った。その中で、今後目指すべき若手研究者養成の方向性を定めて、それを国際交流や数理科学の周辺分野との交流を通して実現する方策を具体的に策定した。この指針をもとに議論を重ねて、21 世紀 COE を発展させるための Global COE プログラムに応募を行った。

(2) 数学の教育リソースの共有の試み

学部間、キャンパス間、さらには大学間の障壁を越えて、数学の教育リソースを共有して有効に活用する基盤的な実験を繰り返し行った。従来の実験に加えて、大阪大学と金融工学などの講義をビデオ会議システムや Real Server を用いて共有する基盤実験を行った。

3. 研究成果と課題

(1) ニュースレターの発行

統合数理科学センター (CIMS) の英文ニュースレターを 2007 年度の後半に毎週 1 回発行した。この中には、慶應義塾内の数学・数理科学のセミナーや講演会の実施予定や実施報告などを英文でまとめて、塾内・塾外に発送した。これにより、塾内では

情報の共有が進み、塾外に対しては慶應義塾の数理科学の研究・教育に関する publicity を大きく高めることができた。ただし、残念なことに 21 世紀 COE 「統合数理科学」の終了とともに、このニュースレターの発行は継続できないでいる。

(2) 経済数学の教育の改善

経済学部の伊藤幹夫と戸瀬信之は、経済学部生のための数学教育の改善のために、教育リソースのインターネット上への展開と発信に力を入れた。すなわち、Wiki Server を構築して、様々なハンドアウトをインターネット上に公開した。それと同時に、数式を含む Presentation File の作成を様々に試みて、多くの教材をインターネット上に公開した。また、この数年間の蓄積の一部を 1 冊の教科書としてまとめた。その内容は、学部 3、4 年生以上のための経済数学で、2008 年度中には発行される予定である。今後は、さらに金融工学の初歩の教科書の作成を目指したいと考えている。

(3) 講義の遠隔地への中継

大阪大学と相互に、実時間で講義やセミナーをインターネットを通して中継する基盤実験を繰り返した。また、Real Server を用いて、大阪大学の金融保険教育センターの講義を慶應のセミナーで聴講する試みを行なった。

(4) 数式表現のインターネット上での実現

数式を含んだ文章をインターネット上に公開することをいくつかの方法で試みた。2007 年度には、TEX のソースをそのまま使える、jsMath スクリプトを導入して実験を行った。java Script によって、tex のソースを tex font に置き換えて送信してくれる仕組みで、講義の配布のために latex を用いて作成した教材を、PDF ではない形でインターネット上に公開することができることになり、生産性が大きく向上した。そのほかにも、MATHML を用いた表現も従来どおり実験を行った。(その経験が、日本数学会のジャーナルの電子化プロジェクトに大きく寄与していることは特筆すべきことであろう。)

4. 次年度の展望

(1) 残念なことに GCOE プログラムへの採択はなかったが、策定した方向性を部分的にも実現する資金の獲得が問題である。

(2) 学部教育、特に 1、2 年生の数学教育の充実・改善を学部を越えて行うことが今後の課題であろう。

総合的な視野から見た環境問題解析と環境教育の試み

研究代表者 秋山豊子（法学部）

I. 研究概要

環境問題は、現代社会において誰でも直面する普遍的な問題となってきた。環境問題を理解し、解決策を探ることは、現代を生きるうえで不可欠なテーマである。また、この環境問題の正確な理解には、さまざまな分野からの視点が必要である。本共同研究は、法学・経済学・物理学・化学・生物学・地域研究の教員が、1つの同じ環境問題を解析して、総合的な理解を図る。その解析の結果を研究会やホームページを通して、環境問題に取り組もうとする学生・一般人に公開していく。環境問題にはバランスの取れた多様な視点が必要であることを提示する。学生とともに真鶴港や西表島などに現地調査を行い、実際の問題も検討する。

II. 2007年度の活動報告

2006年度までは班員に限定した研究会を非公開の形でやってきたが、2007年度は興味のある教員・学生に広報し、効果を広げてきた。研究会は、4-5月秋山担当の自然科学研究会の環境問題レジュメの整理と入力、5月以降は以下のように関心のある教職員・学生に公開した研究会を実施した。

- ① 6月8日 発展途上国への支援をどう評価するか？ 三江平原商品穀物基地計画事後評価 大平哲（経済学部）
- ② 7月13日 環境基本法について 六車 明（法科大学院）
- ③ 10月5日 “水俣病問題”再検討、特に専門家の判断について 秋山豊子（法学部[生物]）
- ④ 12月14日 土壌と環境問題 浅野真希（法学部[化学]）
- ⑤ 2008年2月28日 「温暖化問題の現状と今後の対策」関根豪政（本塾法学研究科博士課程）

班員の教員からの限られた範囲の広報であったが、ほぼ毎回学生の参加があり、定常的な参加を希望する教員・研究者が4名追加された。興味のある学生は真鶴港や西表島への現地調査に参加した。一方、これまでの研究会のレジュメを整理し、順次、ホームページに記録を掲載した。この作業は月・木曜日の午後と教員の空き時間を利用して、共同研究

室を使用して行った。

III. 研究成果と課題

成果として、「環境と経済」（六車 明；2007年 慶應義塾大学法科大学院「慶應法学」7号、563-609）や、「中国における利益集団と政策過程」（林秀光；2007年 慶應義塾大学「法学研究」80巻8号、29-73）、「酸性雨と大気汚染調査——生物学実習プログラムへの導入——」（秋山豊子他；2007年 慶應義塾大学日吉紀要自然科学編 41号、15-26）などがある。

IV. 次年度への展望

2008年度は、これまでどおり、約2ヶ月に1度の研究会、学生を伴う環境汚染の現地調査などを行う。今後の課題として、環境問題を取り扱うオムニバス方式の授業の開講を検討する。

この研究班の活動は、2001年に有志の教員の研究会の形で始まり、すでに7年目となっている。その間、構成員は班員として申請した以外の参加者も含め12名ほどで、およそ2ヶ月に1回位の研究会を続けている。これまでの研究会の発表要旨は、大平によりWebに記載されつつある。これまで扱ったテーマは、IIに記載したような多様な問題である。ホームページは現在、班員のみが閲覧できる形になっているが、今年度以降、さらに発表内容を充実させてまとめ、一般公開していく予定である。2008年度は、これまでどおり約2ヶ月に1度の研究会を開催し、興味のある学生・教員に参加を呼びかけ、最終的には公開講座としてゆく。次年度は、環境問題を取り扱うオムニバス方式の授業の開講準備、真鶴や西表島での水質・大気・土壌汚染の現地調査と、それらの問題の解析・検討の実行などを試みる。

大学生の情報検索リテラシーの形成過程の解明

研究代表者 倉田敬子（文学部）

本研究では、大学生がどのように情報検索のリテラシーを形成していくのかを、図書館の代表的な情報検索システムである図書館目録検索システム

(OPAC)を対象に明らかにした。今回の研究での焦点は、大学生がOPACの画面のどこを見て、どのような情報を得ることで、適切な図書を選択していくのかを、彼らの眼球運動を測定することで明らかにしようとした点にある。

実験のために、慶應義塾大学メディアセンターのOPACとほぼ同じ機能を持つ仮想的な画面を構築した。この画面を対象に、1) 映画の原作小説を探す課題、2) 改題された本を探す課題、3) 地球温暖化に懐疑的な意見をまとめるために必要な図書を3冊探すという3課題をおこなってもらった。適切な図書を選択するまでのプロセスを眼球運動測定装置(NAC-BOXER)で記録した。また、実験直後に、なぜそのような検索を行ったかの認識についてインタビューを行うと共に、OPACの操作、目録や情報検索に関する知識やスキルのレベルを確認した。

実験参加者は、法学部の学生、各学年10名ずつ計40人を募集し、日吉と三田とで実験を実施した。眼球運動測定は、実験データの測定にかなりの習熟が要求され、参加者の眼の状態などによってもデータが左右されるため、最終的に分析するに足るデータを得られたのは32名であった。

分析は、主として2つの観点から行った。1) 画面のどのレコード、要素をどの程度(回数と時間)、どの順序で見ているか(視線軌跡)、2) 画面をどの順序で見ているかの2点である。そこに見られる特徴的パターンと、実験参加者のスキルや知識、正解率との関係を分析した。主な結果として、現在までのところ以下の4点が明らかになっている。

1) 低い正解率

3課題の正解率は、課題1が25%、課題2が31%、課題3が56%で、個人単位で見ると、4点満点で平均は1.9点とかなり低かった。

2) 画面遷移

OPACには図書の簡単な書誌データが列挙されている一覧画面と、個別の図書ごとにより詳細なデータを示す詳細画面があり、課題1と2に関しては、詳細画面を確認しないと通常は正解にたどりつけない。しかし、課題1では、一覧画面しか見ない学生が全体の3割を占めていた。

3) 一画面内の要素の見方

課題1の最初の一覧画面の視線軌跡を分析したところ、画面の要素の中で、タイトルが最もよく見られていた。全時間の半分がタイトルであった。

4) 正解率と知識・スキルなどとの関係

学年が上がるにつれて、OPACに関する知識・スキルのレベルは上昇した。それにもかかわらず、知識・スキルのレベルと正解率との間に関係はなかった。

現在もデータの解析、論文作成に向けての作業を続けているが、2007年度には、以下の2件の学会発表を行った。

- 1) 石田栄美、小泉公乃、宮田洋輔、國本千裕、汐崎順子、三根慎二、倉田敬子、上田修一。「大学生はOPACをどのように見ているのか」2007年度日本図書館情報学会研究大会発表要綱、p.101-104.
- 2) 三根慎二、小泉公乃、宮田洋輔、國本千裕、汐崎順子、石田栄美、倉田敬子、上田修一。「画面遷移と利用者特性からみた大学生におけるOPACの閲覧」三田図書館・情報学会2007年度研究大会発表論文集、P.45-48.

さらに現在、“Users’ viewing patterns and the influence of context on OPAC use”というタイトルで、2nd International Symposium on Information Interaction in Contextの国際学会に発表の投稿している。

可積分系の代数解析学

研究代表者 池田 薫 (経済学部)

I. 研究概要

可積分系とは微分方程式系の中で有限回の代数的な操作と不定積分を繰り返すことにより解を得ることができる方程式のことである。今回の研究では特に20世紀中ごろから爆発的に研究の進んだいわゆるソリトン方程式とよばれる非線形の可積分系に焦点をあてた。ソリトンの研究は19世紀の末イギリスの貴族であるラッセル卿による運河をいつまでも形を崩さずに渡る波の観察から始まった。それは従来知られていた線形波動方程式 $u_{xx} - c^2 u_{tt} = 0$ では記述できないものであった。その後19世紀も押し迫ったころオランダの2人の数学者コルトヴェーグとドゥフリースがこの孤立波を記述する方程式を見つけた。それが彼らの功績を称え頭文字を採ったKdV方程式である。KdV方程式は非線形方程式で

あるため解くのが困難で、発見当初楕円関数解などいくつかの解が発見的に見つかった程度であった。しかし20世紀半ばプリンストンのグリーン、ガードナー、クルスカル、ミウラなどがKdV方程式の解をポテンシャルに持つシュレディンガー作用素の固有値が時間変数に依存しない保存量であることを発見し逆散乱理論を使いわゆる多重ソリトン解とよばれる一連の解を系統的に導いた。またKdV方程式を2次元に拡張したKP方程式もKdV方程式と同様に逆散乱の理論を使って多重ソリトン解を系統的に導き出せることが分かった。佐藤幹夫先生はこのKP方程式は無限個の保存量を有しているので、ある種の無限次元空間の中の軌道として描けるのではないかという着想を得た。その着想から無限次元グラスマン多様体の理論に行き着いた。この佐藤先生の発見により可積分系の研究も代数解析的観点からの研究が可能となった。今日世界の多くの数学者、物理学者を捕えて止まない方程式に戸田格子がある。名前から分かるようにこの方程式の発見者は日本人戸田盛和である。戸田格子とは指数関数の力で引き合う粒子系を記述する方程式であるが不思議なことにまったく関係がないように見えるKdV方程式やKP方程式と同様に逆散乱理論を用いて多重ソリトン解が得られる。戸田格子はすべてを行列で表現できることから表現論の研究者(例えばMITのコスタント)らにより表現論の観点からの研究が行われ、ディンキン図形に対応する一般化が行われた。ソリトン方程式の可積分性はそれが持つ無限個の保存量が保障する。戸田格子は他の可積分系に比べ代数的であるためこの保存量の正体をはっきりした形で把握できる。それは群の不変量である。戸田格子の保存量はいわゆるシュバレー不変量に当たる。近年戸田格子を一般化したフルコスタント・戸田格子の研究が盛んである。なぜ盛んなのかというとフルコスタント・戸田格子は従来のシュバレー不変量の他に k -チョップ積分と呼ばれる保存量を有している。この k -チョップ積分はラックス行列の k -切断行列式から得られる保存量である。 k -切断行列式はある放物型部分群の余随伴作用による相対不変式である。私の知る限りこの相対不変式は今までに知られていなかったのものである。相対不変式はこれも佐藤先生が創始された概均質ベクトル空間の理論の中で中核を占めるものである。今回の研究の中でこの k -チョップ積分に関する時間発展の研

究も行なった。数理物理学はもとより代数解析、代数幾何学、フーリエ解析、表現論、整数論などへの幅広い発展が期待できる。

II. 2007年度の活動報告

2007年6月17日から22日まで日吉来往舎において慶應21世紀COEによる“Workshop on the Iso level sets of the integrable systems 2007”を開催した。その際本研究プロジェクトの構成員であるシップマン氏、ポルファンヘッケ氏、児玉祐二氏が来日し講演を行った。同構成員である桂田昌紀氏はやはり構成員である野田工氏と定期的に整数論のセミナーをおこなった。

III. 研究成果と課題

ここでの研究が元となり私自身研究論文をひとつ書くことが出来た。また他の構成員もここでの研究を元に着実に成果をあげている。

IV. 次年度への展望

研究概要でも述べたとおり今回の可積分系の研究は様々な分野と広く深く繋がっている。研究プロジェクト構成員との連絡を密にして情報交換を活発に行って研究成果を今年度以上にあげていきたい。

【研究メンバー】

池田 薫(経)、厚地 淳(経)、桂田昌紀(経)、宮崎直哉(経)、児玉祐二(オハイオ州立大学)、Pol van Haecke(ポワチエ大学)、Babara Shipman(テキサス大学アーリントン校)

言語と一般認知の発達研究： 動詞を用いたイベントのカテゴリー化

研究代表者 辻 幸夫(法学部)

I. 研究概要

本研究は人間の発達段階におけるイベント認知と言語の関係を明らかにすることを目的とした共同研究と併行した一連の研究の一部である。具体的には、特に動詞を用いたイベントのカテゴリー化に焦点を

当て、発達の段階に応じて幼児が如何に当該言語を用いてイベントを切り分け、大人に近い動詞の使い分けができるようになるのか明らかにすることにある。今年度は、そのためのパイロットデータの収集に努め、理論的枠組みの構成を中心に考察した。

カテゴリー化の問題は認知科学とりわけ認知機能言語学や発達心理学などにおいて中心的なテーマであるが、特に発達に関心を向ける従来の研究の多くは具体的なオブジェクトに対して如何に言語による対応付けが行われるか（もしくは言語により如何に外界のオブジェクトを切り分けるか）に主眼が置かれ、イベントと動詞の関係は名詞程の注目を集めてきた訳では無い。しかし人間の言語活動においてイベントのカテゴリー化はオブジェクトのそれと同じように重要であり、またイベントを切り分ける動詞の習得は名詞のそれとは大きく異なる性質を持つと考えられる。

具体的には、動詞を用いたイベントのカテゴリー化に焦点を当て、発達の段階に応じて幼児が如何に当該言語を用いてイベントを切り分け、大人に近い動詞の使い分けが可能になるに至るかをデータを用いて観察する。

例えば知覚可能な外界のオブジェクトと対応を持つ一般名詞と異なり、動詞はオブジェクト間における抽象的關係と対応付けられる点の特徴である。そのため知覚に依存したカテゴリー化の方略が単純には難しく、幼児は当該の言語環境において個々の動詞のカバーする範囲を比較、差異化しながらその使い分けを学んでいく必要がある。その意味でイベントの認知はオブジェクトに比べ言語に依存する度合いが高いと考えられる。更に言えばその過程において、イベントの認知におけるオブジェクトは完全に独立にはあり得ず、イベント内のオブジェクトは一定の傾向を持って分布する。特に関係のスキーマ化が進んでいない幼児にとってイベントとオブジェクトは密接な関係を持つと考えられる。そのため幼児の動詞の運用の分布が大人とどう異なるかを調査することは人間が外界を意味として捉え、創造的に言語を駆使するに至る過程を知るための重要な知見となる。

以上の点を踏まえ、本研究では幼児がどの様に動詞を用いイベントを切り分けていくのか、また如何にして個々のイベントから関係を抽出し生産的に動詞を使用するに至るのかをコーパス、心理実験等の

手法を用い実証的に明らかにすることに主眼を置いた。

II. 2007年度の活動および研究成果報告

カテゴリー認知と知識の構築に関する先行研究の整理、理論的枠組みの構築、この2つと同時に、動詞を用いたイベントのカテゴリー化に関して、それが発達の過程を通じて、いかなる変化をたどるのかをコーパスを用いて計量的に明らかにするべく研究を進めた。これによってヒトの認知活動の発達段階における、言語と一般認知の相互作用の諸相が明らかになることが期待される。本研究に関連して、昨年度の成果は下記の通り。

佐治他. (2007. 9月) 「語彙獲得における動詞の使い分けに関する研究 中国語の『持つ』系動詞を事例として」(日本認知言語学会第8回大会口頭発表).

Saji, N., et al. (December, 2007). Learning verbs as a system: How Child children learn relations among carry/hold verbs. Paper presented at the 12th International Conference on the Processing of East Asia Related Languages (PEARL) National Cheng Kung University, Taiwan.

Saji, N., et al. (submitted) Fast-mapping and Reorganization: Development of Verb Meanings as a System., the 30th Annual Conference of the Cognitive Science Society, Washington, D. C, USA (July 23-26, 2008)

Saji, N., et al. (2008, February). How do children sort out relations among verbs belonging to the same semantic domain? GCOE CARLS Symposium: General "Rational Animals, Irrational Humans". Tokyo, Japan.

辻幸夫. 2008. 「認知言語学の周辺——学際性と実証性」 The Rising Generation, Vol. CLIV. No.3.

辻他訳. 2008. 『認知言語学のための14章(第3版)』 紀伊國屋書店. (Taylor, J. 2003 Linguistic Categorization. Oxford University Press.)

辻他訳. 2008. 『ことばをつくる：言語習得の認知言語学的アプローチ』慶應義塾大学出版会。

(Tomasello, M. 2003. Constructing a Language: A Usage-Based Model of Language Acquisition. Harvard University Press.)

辻・井上監訳. 2008. 『比喩と認知：心とことばの認

知科学』研究社。(Gibbs, R. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press.)

【研究メンバー】

辻 幸夫 (法学部教授)、佐治伸郎 (政策・メディア研究科、GCOE 研究員)

意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築

研究代表者 小原京子 (理工学部)

I. 研究概要

話者が言葉を用いる際に想起する背景知識「意味フレーム」を「中間言語」として、日本語と英語の語彙項目とを対応付け、日英バイリンガル語彙データベースの雛型を構築する。そのコンテンツは、意味フレームを介して対応付けられた英語と日本語の語彙項目、意味フレーム定義、意味タグ付けされたコーパスからの例文である。

II. 2007 年度の活動報告

アメリカ・パークレーのフレームネット・チームとの共同研究では、主に「程度」「比較」の意味分野における日本語と英語の語彙項目の対応付けについて分析を行った。

言語分析・タグ付けに関しては、意味分野「移動」、「知覚」に関するアノテーション(意味タグ付け)が進んだ。

システム面では新サーバに移行したのみならず、アノテーションツールも大幅に充実し、日英バイリンガルデータの検索表示プログラムも実現した。

さらに、以下の活動・成果発表を行った。

- 全体会議
⇒ 計 4 回 (5/2、8/1、10/29、2/1)
- 定例会議
⇒ ほぼ 1、2 週間に 1 回
- 共同研究打ち合わせ
⇒ 2007 年 8 月英語フレームネットチーム訪問
⇒ 2008 年 3 月英語フレームネットチーム訪問
- 国際学会

⇒ 2007 年 7 月第 10 回国際語用論学会

⇒ 2007 年 7 月第 10 回国際認知言語学会

- 国内学会

⇒ 2008 年 3 月言語処理学会第 14 回年次大会

III. 研究成果と課題

<研究成果>

- Ohara, Kyoko (2007). "A Corpus-based Account of Fictive Motion Sentences in Japanese FrameNet." The 10th International Pragmatics Conference. International Pragmatics Association (IPrA10)、ポスター発表、第 10 回国際語用論学会、スウェーデン、ヨーテボリ市、2007/07/12.

- Ohara, Kyoko (2007). "Frame Semantics in Action: A Frame-based Contrastive Text Analysis Using FrameNet." The 10th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC10)、ポスター発表、第 10 回国際認知言語学会、ポーランド、クラクフ市、2007/07/17.

- 小原京子 (2008). 「日本語フレームネットのアノテーション体系」特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度研究成果報告会予稿集、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」、国立国語研究所、2008/03/16.

- 斎藤博昭、小原京子、曾根孝明、久保谷俊太 (2008). 「『日本語コーパス』を用いた日本語フレームネットのアノテーション環境」特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度研究成果報告会予稿集、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」、国立国語研究所、2008/03/16.

- 斎藤博昭、藤井聖子、小原京子 (2008). 平成 19 年度研究進捗状況報告「日本語フレームネット班(フレーム意味論とコーパスデータに基づく日本語語彙情報資源「日本語フレームネット」の構築)」特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度研究成果報告会予稿集、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」、国立国語研究所、2008/03/16.

- 小原京子 (2008). 「日本語フレームネットにおける語彙と構文の意味：パラレルコーパスの比較対照分析から」言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集、

東京大学、P.857-860、2008/03/17.

●久保谷俊太、小原京子、斎藤博昭 (2008).「日本語フレームネットにおけるアノテーション支援環境の構築」言語処理学会第14回年次大会発表論文集、東京大学、P.639-642、2008/03/17.

●曾根孝明、小原京子、斎藤博昭 (2008).「語彙の階層情報を利用した日本語フレームネットの意味役割推定」、言語処理学会第14回年次大会発表論文集、言語処理学会、東京大学、P.635-638、2008/03/17.

●小原京子 (2008). “A Frame-semantic Contrastive Text Analysis: Toward Representation of Lexicon and Grammar in FrameNets”、『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』No.52:25-38、慶應義塾大学出版会、No.52/P.25-38、2008/03/31.

<課題>

●アノテーション(タグ付け)作業の迅速化。

●英語の最新版データを取り込み、なおかつ日本語データとの整合性を如何にとるか。

IV. 次年度への展望

英語の最新版データと最新版ツールを取り込み、日本語データとの対応付けを行う。日英バイリンガルデータを検索表示した場合の語学学習と翻訳におけるメリットのアクセスを行う予定である。また、これまでの成果について発表を行いつつ、アノテーションマニュアルと活動報告書を作成する。

【研究メンバー】

小原京子(理)、鈴木亮子(経)、斎藤博昭(理)、石崎俊(環境情報)、藤井聖子(東京大学大学院総合文化准教授)、佐藤弘明(専修大学商学部教授)、神野雅代(四天王寺国際仏教大学人文社会学部准教授)

胚発生三次元教育学術情報データベースの開発

研究代表者 堀田耕司(理工学部)

I. 研究概要

生物の形は細胞レベル・組織レベルそして個体全体に至る異なる階層一つ一つが互いに連携することによって、全体としての形をつくりだしている。そ

こで発生の理解のためには細胞から個体まで従来縮尺の違いから分けて考えがちな生命現象を三次元的に同時に解析するための基盤が必要となる。そこで本研究では近い将来の生命科学教育研究における革新的なプラットフォームとして個体全体を一細胞レベルで見渡せる三次元画像データベースの研究開発を行っている。このデータベースは教育材料として以下の効果が期待される。1). 生物発生の視覚的理解を助ける。2). 生物を扱った経験が少ない学生や生物標本が入手困難な場合でも、生物の発生の疑似観察ができる。3). 高価なレーザー顕微鏡などが無い、あるいは生物を解剖する施設などが無い学部・学科においても学内LANを通じて使用可能である。4). 細胞レベルと個体レベルの生命現象を互いに結び付けて理解することができる。このように本データベースは生物学を学ぶ大学の学生の理解を助けるだけでなく、デジタルとウェットな実験の結びついた新しい生物学領域における研究者を育てる上でも大いに役立つことが期待される。

II. 2007年度の活動報告

2007年度の研究活動は以下のような手順で行われた。まず、受精後一定温度下で一定時間ごとに胚を固定し孵化幼生まで35ステージ分得た。これら各固定胚を共焦点顕微鏡を用いて高解像度で撮影Z軸スライス画像を全部で約3500枚(1280×1280ピクセル)収集した。これら撮影した画像をレンダリングソフトウェアを用いてパソコン上で三次元再構築した。この作業はおおよそ週に1度、研究室を使用し継続的に行った。その結果、Z軸方向断面画像および三次元画像の両データセットを作成することができた。つづいてこれらのデータセットのアノテーション作業とWEBへの組み込み作業を同じく研究室を使用し行った。アノテーションには時間軸と形態的な発生ステージとの対応を明確にし、形態的な組織、細胞運命、細胞系譜、細胞分裂、誘導などの注釈をつけた。このような一連の研究成果をまとめ、ホヤ胚三次元データベースFABAを開発し、学内から公開した(<http://chordate.bpni.bio.keio.ac.jp/faba>)。FABAは理工学部生命情報学科大学院生向けの授業である分子発生生物学講義の1コマをお借りし学生に紹介させていただいた。

Ⅲ. 研究成果と課題

本年度、三次元データベース FABA を完成し公開させることに成功した。本データベースは以下のジャーナルに掲載された。

A web-based interactive developmental table for the ascidian *Ciona intestinalis*, including 3D real-image embryo reconstructions I. From fertilized egg to hatching larva

Kohji Hotta, Kenta Mitsuhara, Hiroki Takahashi, Kazuo Inaba, Kotaro Oka, Takashi Gojobori & Kazuho Ikeo
Developmental Dynamics, 236(7):1790-1805 (2007)

さらに、本論文は掲載されたジャーナル *Dev.Dyn.* のハイライトに選ばれ、高い評価をいただいた。今後、孵化以後の発生段階も同様にデータベース構築し、卵から個体へ至るすべての発生過程を網羅した3次元データベース(仮称 FABA ver.2)を構築することが課題である。

Ⅳ. 次年度への展望

2008年度は FABA ver.2 作成に向け、孵化幼生以後のステージについても2007年度と同様なデータセットを用意する。さらにホヤだけでなく線虫やヒトデ胚画像も同様なデータセットを準備していく予定である。また、三次元胚画像を「閲覧」できるだけでなく、閲覧者自身が「編集」可能となるようにデータベースの機能面での向上も目指している。そのための技術修得に外部から講師を招聘する予定である。

【研究メンバー】

堀田耕司(理工)、金子洋之(文)、岡浩太郎(理工)、
松本 緑(理工)、鈴木 忠(医)

極東証券寄附講座 運営委員会

1. 基本方針

当運営委員会では、2007年度極東証券寄附講座を企画・運営するに当たり、過去の実績と反省点をふまえ、以下のような基本方針で臨むこととした。

① 2004年度に正規授業化して成功を収め、その後も実績を重ねている『生命の教養学』を、引き続き春学期の半期授業として2007年度も開講する、運営委員会で討議を重ねた結果、2007年度のテーマを「誕生と死」とする。前年に引き続きコーディネーター制を継続して責任の所在をはっきりさせるとともに、コーディネーターの一部を入れ替え、これまでのノウハウを継承しつつ当該年度テーマにふさわしい新鮮な頭脳を取り入れる。形式としては、多彩な一流講師陣を揃えられるように、前年と同じくオムニバス講座とする。理系学問と文系学問の対話・交流を心がけ、21世紀にふさわしい生命をめぐる多彩な知の諸相を学生に伝える。

② 同じく2004年度に正規授業化して熱く盛り上がっている『アカデミック・スキルズⅠ』『アカデミック・スキルズⅡ』を継続するとともに、その発展編(中級レベル)として『アカデミック・スキルズⅢ』『アカデミック・スキルズⅣ』を新たに開講する。ⅠⅡでは、大学での勉強の基本、すなわち、講義を聞き、クリティカル・リーディングを行い、それから自分のテーマを発見し、自らリサーチを行って、その成果を口頭発表したり論文にまとめたりする作業に必要な諸スキル習得のために、少人数の履修学生に複数の教員がついて懇切丁寧に指導する。(ⅠⅡはそれぞれ半期科目ながら、これを続けて履修することで1年かけて本格的なアカデミックスキルを習得することができる。)

一方、『アカデミック・スキルズⅢ』『アカデミック・スキルズⅣ』は、『アカデミック・スキルズⅠ』『アカデミック・スキルズⅡ』を取って、知の技法の基本を既に習得している学生を対象に、単に学問作法に従ってきれいにまとめた論文やプレゼンテーションが出来るだけでなく、さらに深く、独創的な知の探求に向かう力を養うべく、工夫を凝らした授業内容・構成とする。

(武藤浩史)

2. 極東証券寄附講座『生命の教養学』

誕生と死——その間にいる君たちへ

2007年度は、生きることを境界づける「誕生と死」

をテーマとして、この2つの対立しつつも1つの大きな過程を構成する極限的な出来事について、様々な分野で活躍する講師陣が真摯な思考を展開する姿を見せることにより、「生命をどう捉えるか?」という問題とその思考法を学生たちに紹介した。生物学者が受精・誕生・死の問題を自然科学的見地から考察し、人類学者が日本人の死の文化を論じ、文学研究者が人気小説に描かれる人の生死を分析する。医学を学ぶ禅宗の僧侶が宗教と科学の双方の観点から生と死を語り、医学者が妊娠や救急救命あるいは人生哲学と関連づけて医療の現場を紹介し、生命倫理学者が誕生と死という観点から人間の歴史の過去・現在・未来を考えた。

その内容の概略は、次の通り。

(1) 4月19日「命の文化人類学」

波平恵美子(御茶ノ水女子大学名誉教授)

- ・ 多様な「いのち」観の存在と近代化がもたらしたもの
- ・ 矛盾する「いのち」観の存在に向き合うこと

(2) 4月26日「子どもへのいのちの教育」

日野原重明(聖路加国際病院理事長)



- ・ 寿命とは、長さではなく、寿命という空間の中で刻々の自分をどのような姿で具現するかということであり、それが「生きる」ということ。10歳の少年少女に語りかけるように大学生にも優しくそして力強く「10年後の夢」を95歳にしてお話になった。

(3) 5月10日「優生保護法の歴史から見た生命倫理」

松原洋子

(立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)

- ・ 障害者の尊厳という視点からの反優生思想は、

自主的優生学批判の核心をなすものと考えられ、その点からも優生保護批判運動の分析は、重要であるとする。

(4) 5月17日「僧医という視座より」

対本宗訓(臨床研修医・元臨濟宗仏通寺管長)
・僧医として、行政・地域とタイアップして医師やケア・チーム共々終末期の患者の魂のケアに携わることができるならば、それこそまさにビーハラであり真の宗教活動になると提言したい。

(5) 5月24日「生殖医療と生命倫理」

吉村泰典(慶應義塾大学医学部産婦人科学教授)
・1978年7月、体外受精という生殖医学・生命科学の大きなブレイクスルーが起きた。卵子や受精卵の提供や代理懐胎を現実のものとし、配偶子操作も可能にした。しかしながら、これらの操作は人間の尊厳、社会の秩序に多大な影響を及ぼすことを銘記しておかなければならない。

(6) 5月31日「麻疹(はしか)流行による一斉休講」

(7) 6月7日「Basic Life Support と塾 BLS 教育について」

堀 進悟(慶應義塾大学医学部救急部准教授)
・心肺蘇生法による人命救助の実際について、胸骨圧迫・人工呼吸・AEDの使用法などを詳しく解説、心臓震盪の実例についても触れ、さらに塾におけるBLS教育について、その必要性と現状を示した。

(8) 6月14日「生物たちの生殖戦略」

松本 緑(慶應義塾大学理工学部准教授)
・無性生殖と有性生殖における性とは何か? 個体レベル、種レベルの生と死、生殖をふまえて生と死を考えよう! 生殖様式によってテロメア維持機構(=細胞の寿命)が異なる。

(9) 6月21日「クマムシの生き方」

鈴木 忠(慶應義塾大学医学部生物学教室専任講師)
・死なないムシ? 「最強の生物」とも呼ばれるこの生物、「クリプトビオシス」という不思議な能力によって、樽状になって乾眠する。また水に入ると生き返る。そのユニークな生態を、映像を駆使して伝えた。

(10) 6月28日「死の遺伝子からの問いかけ」

田沼靖一(東京理科大学薬学部教授)
・生命の設計図であるDNAには生の情報だけで

なく、死も遺伝子として組み込まれている。常にダイナミックに変化する自然の大循環のなかで、死から生を捉え直す。ここに、これからの社会が求めている新しい生き方、新しい生命観が生まれてくると思われる。

(11) 7月5日「体験! 救急救命・CPR+AED の実際」

吉田泰将(慶應義塾大学体育研究所准教授)
・剣道試合中の強度の脳震盪による心肺停止状態に陥る事故の映像から救急救命処置の必要性を訴え、30体の人形と20機のAEDを準備し、時間の許す限り実際に人工呼吸と胸骨圧迫・AEDの操作の練習を行った。

(12) 7月12日「井戸の中から——村上春樹と『ピーター・パン』」 武藤浩史(慶應義塾大学法学部教授)

・村上春樹の場合も、ピーター・パンの場合も、言葉の細部——井戸とは、ピーター・パンの「パン」とは一体何かなど——と作品全体の両方を考えると、さまざまな心の秘密が浮かび上がってくる。そのように、「木を見て森を見ず」でも「森を見て木を見ず」でもなく、木も森も、両方を見ながら文学の言葉の森を散策してほしい。

このように多方面でご活躍の講師の方々に対して、各回学生からの質問も多数、積極的に出て、盛り上がりを見たことを嬉しく思う。

【コーディネーター】

武藤浩史(法学部教授)、中島陽子(文学部教授)、吉田泰将(体育研究所准教授)

(吉田泰将)

3. 極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」

2003年度後期に実験授業として立ち上げられ2004年度にはじめて正規授業化された『スタディ・スキルズ』は2005年度から『アカデミック・スキルズ』と名称を変更して継続されている。自ら考え、調べ、論じることが学問の出発点であるとともに長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的体力涵養の基盤であるという考えに立って、その習得をめざして、具体的問題発見の方法に始まり、リサーチ、プレゼンテーション、レポート・論文執筆のスキルを身につけることがこの授業の目的である。前期開講の『アカデミック・スキルズI』では、まとまった

長さの充実したレポート・論文執筆を最終目標として、学問的スキルの基礎訓練に力が注がれ、後期開講の『アカデミック・スキルズⅡ』では、前期の成果をふまえて、レポート・論文執筆とともに、プレゼンテーション・スキルの訓練が行われた。2007年度の『Ⅰ』『Ⅱ』は、月曜日5限に1コマ開講されて、20名が履修した。担当者は、識名章喜、村山光義、伏見岳志、横山千晶。

2007年度にはじめて開講された発展・中級編『アカデミック・スキルズⅢ』（前期開講）『アカデミック・スキルズⅣ』（後期開講）は、「テーマを究める」というテーマで火曜日5限と水曜日5限に開講された。火曜日の授業は、9名の学生が履修し、「20世紀の文化と社会——開かれた複数の〈歴史＝物語〉へ向けて」というサブテーマの下、講義とクラス討論と論文指導を組み合わせて、高レベルの論文執筆を目的とする教育が試みられた。担当者は、加茂具樹、佐藤元状、武藤浩史。水曜日の授業は、6名の学生が履修し、「芸術で競う諸国民——近代世界システムの中の美術」というサブテーマの下、産業革命以降の芸術と産業の関係を精査する講義に基づいて、オリジナリティの高い論文執筆をめざす指導が行われた。担当者は、鶴崎明彦、武藤浩史、横山千晶。

また、年度末の2008年2月6日には、履修学生の成果発表のために、来往舎シンポジウム・スペースにて、公開プレゼンテーションコンペティションが行われた。朝日新聞の取材も含め、塾内外から多数の聴衆を迎え、各クラスから選抜された計5名の学生の口頭発表があった。厳正な審査の結果、プレゼンテーション部門金賞1名、銀賞2名、銅賞2名、論文部門金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、佳作2名が選ばれ、表彰された。聴衆アンケートでは「大変よかった」という評価が大半を占めた。

(武藤浩史)

4. 公開講座『サイエンス・カフェ』

研究者というのは、自分が興味を持ったテーマを探求することが仕事という、世にも幸せな存在です。しかし興味に従って、突き進み、深めていくと他人からはその内容を理解しにくい境地にまで至りかねません。「タコツボ」状態というのでしょうか。そういった、ともすれば孤立化する「智」を広く一般に知らせることも教養研究センターの役割のひとつです。本年度スタートした「サイエンス・カフェ」はそ

の対象を幼稚園の子供から、「後期高齢者」にいたるまで思い切って広く想定し、研究者が日ごろ「面白い!」と思っていることを、肩のこらないおしゃべりで伝える場を用意しようというものです。顕微鏡をはじめ、できるだけ、実物を自分で見、体験できるような準備も整えています。雰囲気演出するため、会場は丸テーブルを囲むしつらえにし、参加者には飲み物代をお払いいただき、コーヒーや冷たい飲み物、ちょっとしたお菓子を供することにしました。各回20から60名ほどの方に参加していただいています。07年度に開いたのは、以下のような5回ですが、どの回も、未来の科学者や、かつての昆虫少年たちの好奇心を十分に刺激できたのではないのでしょうか。一方話題提供者にとっても、わかりやすく伝えることを工夫し、会場からの質問に答えるその過程は、自分の研究にこれまでとは異なる方向から光を当てることになり、新しい視点を得る機会となっているのです。これは、教養研究センターのミッションの実行そのものといえます。なお、この企画は、生命の教養学の公開講座という位置づけで、極東証券からの寄附によって運営されています。

第1回 クマムシの話 2007.6.23.

医学部 鈴木 忠

クマムシって知っていました?水やコケの間にいる体長1ミリにも満たない小さな虫です。それなのに、鉤爪のついた足が4対もあって、それでのっしのっしと歩く様が、熊のよう。コケにいる種類はコケが乾燥してしまうと砂粒のようになって、水気が戻るとともに生き返る。この生き物の他の面白い性質についても聞くとともに、その有様も観察しました。実験室でこの動物を飼育できるようになるまでの工夫や、飼えるようになったからわかったことなど、研究の楽しみも伝わってきました。

第2回 小さなクラゲの世界 2007.9.1.

理工学部 竹田典代

巨大なエチゼンクラゲが話題になってまだあまりたちませんが、今回の主役のタマクラゲは、顕微鏡で目を凝らすと、やっとうるみ透明なカサを開け閉めして泳ぐ姿が見える様な種類です。こんな小さな生き物が展開している、実は複雑な一生について話を聞いて、観察しました。必死でエサを捉える姿は印象的でした。暗いところで飼育しておいて、ちょっと光

を当てると、卵を産むそうで、このような小さな生き物も、宇宙のシステムの中に生きていたのです。

第3回 コケを探して：フィールドサイエンスの愉しみ 2007. 11. 10. 経済学部 有川智己

コケは、生き物の世界では原始的なグループに分類されている、歴史が古い生き物です。胞子の散乱で殖えるので、その子孫が広がる範囲は自ずと限られたものとなります。ということは、コケたちは、それぞれの環境で、長い時間をかけて、それぞれ独自に進化して来たということです。そこで、どこで、どのようなコケに出会えるかの醍醐味が、コケ学者たちを地球のあらゆるところへ赴かせているのです。その楽しさと、古いコケを最新の科学で解析する話を聞きました。

第4回 融合する脳と機械 2008. 1. 26.

理工学部 牛場潤一

私たちが歩いたり手を動かしたりできるのは脳からの指令に従って、手足の筋肉が系統だって縮み、戻るからです。念じたように人工手足を動かすシステムの開発、ロボット工学と脳学の最先端をつなぐ研究が今回のテーマです。脳からどのような形で指令が出されているのか、それを「動き」へどう変換するのか、未来に夢の広がる興味尽きない話題提供でした。実際にパワーアシスト装置を動かしたり、インターネット「セカンドライフ」のキャラクターを操作して、バーチャル体験をしたりしました。

第5回 ウニ！すし？！ 2008. 3. 15.

文学部 中島陽子

ウニの研究をしていますというと、即、すし！と戻ってきます。「ウニ」が都会の食卓に上るよりずっと前（19世紀の後半）から、ウニは、研究材料として生物学者にとって身近な存在でした。受精や細胞分裂の様子を顕微鏡で容易に観察できるからです。実際、参加者は、自分自身の目で、それを確認しました。栗のイガのような（正形目）ものだけでなく、1月ごろ少しだけはやった、「スカシカシパン」というのもウニの仲間、ヒトデやナマコなどとともに、棘皮動物という動物群に属します。文字通りトゲトゲというだけでなく「5」が体のつくりの基本になっている不思議な仲間だということをカラの標本から確かめました。ちなみにすしのウニは、正形目の生

殖巣で、一匹から5枚の「ウニ」がとれます。

（鈴木 忠）

5. その他

・2005年度の講義をまとめた『生命と自己——生命の教養学Ⅱ』が2007年4月に、2006年度の講義をまとめた『生命を見る・観る・診る——生命の教養学』が2007年9月に、慶應義塾大学出版会より上梓された。『生命と自己』は、教養研究センターを代表して武藤浩史が編集に当たり、『生命を見る・観る・診る』は同じく教養研究センターを代表して中島陽子と石原あえかが編集に当たった。

・2007年度運営委員会会議日程：第1回2007年7月17日

・2007年度運営委員：中島陽子（文学部）、鈴木晃仁（経済学部）、竹内良雄（経済学部）、鈴木忠（医学部）、高桑和巳（理工学部）、武藤浩史（法学部、委員長）、吉田泰将（体育研究所）、広瀬寛（保健管理センター）、小磯勝人（慶應義塾大学出版会）、吉川智江（教養研究センター）

（武藤浩史）

導入授業の開発

身体知研究実験授業 「アートで体をひらく、心をひらく」

1. 07年度実験授業の目的・趣旨

今回は、セッションのなかで、多様なアート表現をくり出し、素朴な身体感覚、感性や感情にふれつつ、心身の交流をはかり、それらの体験を言語でのディブリーフィング等で確認しつつ、頭や認識につなげ、統合的に他者や自分とかわる体験の創出、新たな気づきの醸成や自己成長をめざした。

授業の初回に、アートを小、中学校での教育にとりいれている“Learning Through the Arts”（略称 LTTA）というカナダの新しい教育プログラムの公開講演会兼模擬授業も開催することとした。どう身体を学校現場にとりいれ、大学での身体知科目をどう構成し、既存の科目にどう身体知を取り込むのかなど、新たな可能性を探るためである。

2. 実験授業活動報告

①公開講演会「アートをしながら授業で学ぶ」

11月14日 16:30～17:30

日吉キャンパス来往舎大会議室

講演者：Kate Eccles 氏、Colleen Lanki 氏

（カナダ王立音学院）

参加者：塾内8名、塾外19名、コオディネーター2名

前半は、Eccles 氏による講演。教師とアーティストが協同行なう LTTA プログラムでは、算数、理科、社会、などの科目に、ダンス、ロールプレイ、絵、歌、ストーリー・テリングなど多様なアートを用いるが、その LTTA の歴史、全体性思考、ハワード・ガードナーの多次元知能などその理論的背景、さらにこの授業の効果研究、教育以外への広がりについて熱のある講演が行なわれた。

後半は、全員が LTTA 方式の模擬授業を小学3年生になり体験。Lanki 氏のファシリテーションで、個人、ペア、グループ、クラス全体のワークへと展開する宇宙についての授業を実践。天王星、太陽、銀河系などの知識を共有後、グループ毎に、割り当てられたものを、メンバー全員が体のムーブメントで皆の前で表現して見せ、それが何か当ててもらうなど、つめこみ型でなく、参加型、身体を通しての学びと楽しさを味わった。

②アート表現を通しての心身の癒しと成長：他者と

向きあう

11月30日 16:30～17:30

日吉キャンパス来往舎大会議室

ゲスト講師（ファシリテーション）：小野京子氏

（表現アートセラピー研究所代表）

参加者：塾内3名、塾外11名、コオディネーター3名

ウォーミングアップと、簡単な表現アートセラピーの説明の後、グループごとに、共通の台紙上に粘土をメンバーが順番をきめていじり多数の粘土作品を作り、タイトルを決定、感想をいいあった。次に自分の好きな気について、気になる粘土作品を一つ選び、各自それがしゃべるとしたら何を語るかを、絵、詩、言葉で表現し、ペアで感想をいいあう。その後床にならべられた全作品を歩きながら鑑賞しあい、感想を円座で交換しあった。

③アート表現を通しての心身の癒しと成長：自己と向きあう

12月10日 16:30～17:30

日吉キャンパス来往舎大会議室

ゲスト講師（ファシリテーション）：小野京子氏

（表現アートセラピー研究所代表）

参加者：塾内3名、塾外10名、コオディネーター2名

各自、利き手と逆の手でクレヨンを持ち、1. 楽しいこと、2. 悩んでいること、3. それがどう解決されたらいいかの感じを、次々に絵に描く。3枚を並べ、各自、体で表現、その後ペアをつくり、相手の作品で、気になる、気になったものをムーブメントで表現感想を交換。次に4人一組で、一人がムーブメントを作り動くと三人がそれに合わせる時間を体験。最後は「自分は何だろう」のテーマを体のムーブメントで表現、ペアの相手は観察、感想を言うことを、互いにくりかえし、円座での全体のシェアリングでしめくくった。

④まとめ・ふりかえりセッション

1月16日 16:30～17:30

日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

ゲスト講師（ファシリテーション）：小野京子氏

（表現アートセラピー研究所代表）

参加者：塾内4名、塾外8名、コオディネーター2名

各自、利き手と逆の手で、「自分の心、今の気持」を画用紙に描き、そこから浮かぶ言葉を3つ裏に書

き、グループにわかれ御互い絵をみての感想をいいあい、その後、すべてのセッションを振り返り気になったことや感想を言い合い、一人キーワードを3つづつ書き、小野先生に渡す。それらが入れられた袋のなかから、各自一枚づつおみくじ式に引いて、その言葉からの連想、想い、授業でいやであったことなど、小野先生や当日初めて参加の方も、自由に感想をいいあい、なごやかな懇親会へつなげた。

3. 課題

ほとんどの参加者達にとり、体、心、頭を解放させ、頑固な意識のしほりから自由になり、プロセスに自分をゆだねつつ、多様なレベルで気づきが生じていたということは確かだが、学内の学生参加者の数が少なかったことは、こうした内容と構成の授業には心理的抵抗があると考えられる。それらに対応し、学生達が来たくくなるような、内容と構成、そして広報の課題が残されている。また質的データもふくめ説得的にこうした授業の効果を測ることも大きな課題である。

(手塚千鶴子)

大学教員は近年、カリキュラム改革の進展や学生気質の変化に伴い、さまざまな局面において、従来とは性格の異なる教育環境に置かれるようになった。一例がメディアリテラシーやフィールドワークを活用する少人数のセミナー形式の授業である。この種の授業では、必ずしも教員が精通しているとはいえない分野や研究方法を指導しなければならない場面に遭遇することがある。また、例えば keio.jp が提供する教育支援システムのように、学内に整備されているにもかかわらず、情報が教員に十分行き渡っていないためか、必ずしも活用されているとはいえないサービスが存在する。さらに、レポートが書けない、時間を守れない、他者とうまくコミュニケーションがとれない、といった“発達障害”を思わせる症状を持つ学生に接する機会も増えている。

そこで教養研究センターでは、こうした新しい教育環境に直面した教員をサポートし、よりよい教育研究を実現したり、より適切な学生とのコミュニケーションを図るための一助として、「教員のためのサポート」を行うプロジェクトを、日吉メディアセンター、日吉 ITC、学生総合センター日吉支部などと共催の形で展開することになった。以下、実際に各プロジェクトの企画・立案・実施に向けてご尽力された4人の先生方に、それぞれの具体的な取り組みについてご報告を頂くこととする。

(萩原眞一)

メディアリテラシーワークショップ 「メディアセンター・サービス活用術」

種村 和史 (商学部)

大学を取り巻く種々の環境・大学教育に対する要望の変化に伴って、従来とは性格の異なる授業を日吉の教員が担当するケースが増えています。例えば、少人数の履修者にリテラシー教育を行う授業などもその一つです。このような授業は、教員各自の工夫で学生からの確実な手応えを引き出すことができやりの面がある反面、必ずしも自分の専門でない分野や普段手慣れていない研究方法を紹介したり指導したりしなければならないこともあり、困惑してしまうことも多いのが実情です。

教養研究センターでは、新しい状況に置かれた教員をサポートし、よりよい授業を実現するための方法をお互いに考える場として、教員サポートワークショップを新たに企画しました。その第一回として、6月20日(水)・6月25日(月)に、教養研究センターとメディアセンターの共催によるメディアリテラシーワークショップ「メディアセンター・サービス活用術——少人数セミナー授業での実践ワークショップ」が開催されました。

このワークショップは、学生がメディアセンターの所蔵する資料と提供するサービスを活用して、問題発見—資料収集—問題考察—レポート作成のプロセスを行えるようになるために、どのように指導すれば効果的か考えてみようという趣旨で企画されました。日頃、メディアセンター内のレファレンスデスクで学生からの種々の相談に対応したり、日吉の学生向けの情報リテラシーセミナーを担当している図書館員が、上記のプロセスの中で学生が困難を感じている点を踏まえた上で、資料に確実に辿りつくための検索キーワードの立て方・様々な検索ツールの使用法・収集した資料の整理の仕方など、情報のプロならではの知識と経験から、実践的な指導方法を紹介しました。あわせて、KittyやPathなどメディアセンターが提供するサービスを効果的に授業に取り入れる方法も紹介されました。

同ワークショップは、11月27日(火)・12月5日(水)にも開催されました。そこでは、ベーシック編として春学期と同内容の「少人数セミナー授業での実践ワークショップ」が再度開催されたほか、新たにステップアップ編として「文献管理ソフトRefWorks 利用法」が開催されました。ここでは、メディアセンターが推奨する、収集した文献情報を効率的に整理し、研究・論文執筆に役立てるための文献管理ソフトRefWorksの使い方を学びました。あわせて、作成した文献リストを用いて学生の指導や授業に役立てる方法についても紹介がありました。メディアセンターとの共催によるワークショップは、今後も継続的に開催されることになっています。

社会調査法 最初の一步

長田 進 (経済学部)

2007年度の秋学期に教員サポート活動の一環として、「フィールドワーク入門——社会調査法最初の一步——」というタイトルでワークショップを開催した(2007年11月から12月にかけて同内容を2回実施)。

このワークショップは、各種の研究技法を紹介することで、学問領域が異なる教員に対して多様な調査法についての情報を提供するものであった。現代の大学生は、講義等で行う理論を文献に基づいて学習するだけでは十分でなく、実地調査をはじめとした様々な調査技法を駆使して情報を集め、活用する能力を身につけることが求められていることに対応するものであった。

本来、「フィールドワーク」という言葉には、学問によってまったく異なる非常に多様な内容を含んでいるため、ワークショップの開催にあたり内容の絞込みが必要であった。今回は、文献調査以外の研究のうち、学生が実際に取り組む機会が多いと思われる「インタビュー調査」や「アンケート調査」について、実施する時に注意すべき内容を伝えるための構成を考えた。

実際のワークショップは二部構成の形式で開催した。前半は、社会調査法の専門的トレーニングを経験しているSFC所属の西山敏樹氏に社会調査の基礎となる話題を講演形式で展開した。ここでは、理論的な裏づけとともに、氏の豊富な経験からさまざまな例を提示してもらい、皆の理解を深める事となった。後半は、質疑応答の形式をとり、調査に当たって注意すべきポイントや出席者が日ごろの指導で苦労している点についての意見交換を行った。ここでは、参加者全員から、活発な意見交換が行なわれ、教員がそれぞれ学生と向き合っている姿が浮かび上がった。

惜しむらくは、秋学期は行事が立て込んでいたこともあって、開催告知から実際の開催までの時間が短くなってしまったことである。今後は余裕を持ったスケジュール作成も重要になるとと思われる。

なお、最後になるが、当日の様子は、教養研究センター発行の「慶應義塾大学教養研究センターReport」の一環として『教員サポート2「社会調査法 最初の一步」』の形にまとめられ、配布されていることをお伝えしておく。

keio.jp 活用法

坂本 光 (文学部)

当企画では「教育支援システム」のワークショップを実施し、同時に当該システムの基盤をなす「keio.jp」全体についての紹介を行った。企画・実施においてはインフォメーション・テクノロジー・センター(ITC)本部との共催とし、教養研究センターより坂本光、ITC本部より加賀齊天がこれを担当した。ワークショップは同一内容にて2回開催(2007年12月12日、17日、於来往舎)し、その際には日吉ITCからも助力を得た。

両日共に、専任教員、非常勤教員、学事センター職員が参加し、ITC本部の担当者より基礎的な説明を受けた後、各参加者がノートPCを介して「教育支援システム」の根幹をなす各種の授業支援機能(履修者への告知、出席管理、教材配布、レポートの課題提示と提出受付、質疑応答や議論に活用できる双方向の掲示板、資料・教材等の保管スペースなど)の利用実習を行った。またワークショップのために用意された仮設学生アカウントを使用することにより、科目担当教員と履修学生の一人二役を経験し、システムの運用をより立体的に理解する機会が提供された。

「keio.jp」全体の説明においては、利用者の個人情報とコンテンツの安全を確保しながら、同時に利用者の身分に応じてコンテンツを提供する仕組み(認証システム)が解説された。また同認証システム利用の例として、「教育支援システム」のようにすでに実現しているシステム、現在構築中のシステム等の紹介が行われた。

解説・ワークショップを通し、「教育支援システム」と「keio.jp」双方に対して、参加者より多くの質問と要望が寄せられ、開発・運用担当者との間に活発なやりとりがあった。その際、現行システムの洗練と充実に向けて、開発・運用側は利用者によるさらなる活用と、その過程でのフィードバックを求めていることが強調された。

発達障害を抱える学生への関わり方

鈴木直樹 (経済学部)

I. 活動の趣旨ならびに目的

近年、慶應義塾のみならず、他の教育機関においても、発達障害と思しき学生の数は確実に増加している。しかし、発達障害という概念自体、なお広く浸透しているとは言い難く、実際に教職員として現場に立っていても、外見上、気力や理解力が欠如しているかに見えるこのような学生とどう向き合うかは大きな問題である。また、発達障害者支援法の施行や特別支援教育の開始からしても、これをサポートすること自体がすでに大学に対する社会的要請となりつつあるように思われる。こうした状況に鑑み、当講演会では発達障害の特徴・現状・対処法などを専門家に分かりやすく解説していただき、参加者が基礎的な知識を共有できるよう配慮した。そのうえで各人が個別の教育現場で抱える問題点を出し合い、質疑応答の形でそれを講師と討議することにより、お互いの理解を深めていった。

II. 活動内容

講演会 『発達障害を抱える学生への関わり方』

日時：2008年1月23日(水) 18:15—19:45

場所：日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース

講師：萩原豪人(慶應義塾大学学生相談室カウンセラー)

司会：鈴木直樹(経済学部教授)

第一部では講師より発達障害に関する平易な解説が行なわれた。具体的な内容は、a)発達障害とは何か、b)大学生に多くみられる発達障害はどのようなものか、c)学生が悩みを抱えるのはどのような場面か、d)大学で可能なサポートは何か、e)そうした学生にどう対応したらよいかなどである。第二部は質疑応答であった。高校・大学の教員をはじめ、学事センターや学生総合センターの職員、他のカウンセラーや相談員まで多彩な参加者を得て、非常に有意義な討議が行われた。

日吉キャンパス 公開講座運営委員会

2007年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座のテーマは、「モノを創る」で、その趣旨は、次のとおりである。「物を作るというのは、われわれ人間にとって、更にはあらゆる生命体にとって、最も基本的な活動の一つです。われわれは、様々な物を作り出すことによって、生活環境を整備したり変化させたりしています。それが既存の状態を改善することもあれば、破壊することもあるでしょう。われわれが作り出すのは、物質的なものばかりではありません。われわれは文化的なもの（例えば思想・文学・音楽・映像など）を創作し、社会的なもの（例えば法律・人間関係・公共空間など）を構築します。既存の世界を受動的に受け止めることに満足せずに新たなモノを作り出す力、これこそ生命の本質なのかも知れません。われわれ人間は、そして人間以外の生物は、どのようなメカニズムで、どのようなモノを創っているのでしょうか。そこで生み出されるモノには、何が託されているのでしょうか。モノが創られることの驚きを再発見し、モノを創ることの意味について改めて考えてみる、というのが今年度のテーマです。」

2007年9月29日から12月8日までの毎週土曜日の3時限目と4時限目、全10回を行った。申込者数は、定員300名のところ、322名で、受講者数は303名（うち学生6名）だった。修了者は239名（78.9%）、全回出席者数は57名（18.8%）、平均出席率は214名（70.9%）、平均年齢は59.6歳（最高87歳、最小19歳）であった。

開会式で、教養研究センター所長の横山千晶教授は、新しい講座のあり方として、教える側と参加する側を一緒になって巻き込む形を提唱された。実際、運営委員会では、委員を4つのグループに分けて、企画の検討を始めた。それは、1表象系、2街づくり系、3自然科学系、4音楽系とし、その全体をくくる形で、0哲学・思想系である。

第1回目は、全体的な視座に立って「モノとは、モノづくりとは」（小瀨昭夫・経済学部教授）で、本講座の趣旨を述べ、具体的にはドガのデッサンを見せた。続いて「物と技術について——ハイデッガーの思索を手がかりに——」（荒金直人・理工学部専任講師）で、現代では物は「総かり立て体制」の支配下にあるという。第2回目からは、各論に入った。

1の表象系として、「中国映画に見える快樂の表象——纏足と豚足」（村越貴代美・経済学部教授）では、

中国人にとって「足」こそ性的なものの象徴であるということ、「ピグマリオンの系譜」（山本賀代・経済学部准教授）では、創造の捉えかたが時代によって変遷してきた様を分かり易く説明された。「本をつくる」（湯川豊・東海大学文学部文芸創作学部特任教授）では編集について日本の国家事業である勅撰和歌集を例に話された。

2のまちづくり系から、「住民参加とこれからのまちづくり——飛騨高山地方の事例より——」（長田進・経済学部准教授）では、〈まちづくり〉に関する基礎的な知識と4名の教授陣について紹介された。「観光とまちづくり」（古谷知之・総合政策学部准教授）では、日本の観光政策を解説された。「古書のまちづくり——ヘイ・オン・ワイとブックタウン運動——」（藤田弘夫文学部教授）と「地域と大学が連携した創造——愛知県豊川稲荷門前のまちづくりと建築ものづくり」（松島史朗・豊橋技術科学大学准教授）は、先生方の実体験に基づく発表だった。

3の自然科学の立場から、「未来を創る——子供を育む」（小瀬村誠治・法学部教授）では、モノを創ることで、進歩発展する一方で、自然環境破壊をしてきた人類の課題を、「生き物の色・模様・形づくり」（福澤利彦・商学部教授）では、生物のモノづくりを、「量子コンピュータとナノサイエンス」（伊藤公平・理工学部教授）では、普通のコンピュータとの違いを分かり易く説明された。「タンパク質を並べて素子を創る」（古野泰二・医学部教授）は、ナノテクノロジーの未来へ向かう発表だった。

4の音楽系の発表では、生演奏をまじえた「伝来の中国音楽とその日本化——江戸の文人音楽を中心に——」（坂田進一・坂田古典音楽研究所）が、大変好評だった。また、「即興の現在——ジャズ、DJ、エレクトロニカ——」（大和田俊之法学部専任講師）では、ジャズ演奏のコード進行やHIPHOPにおける編集作曲方法が興味深かった。「政治美学の深淵——創造の現場にて——」（佐藤元状・法学部専任講師、小泉明郎・映像作家）では実際に映像制作のプロセスを見せてくれた。最後の回は、ピアノを使うので、32番教室を使用。「テキスト、素描、音楽を織り交ぜる——サティ爺さんの音楽工房——」（コミネティ、フィリップ・商学部准教授）と「映像と音楽の融合」（小瀨昭夫・経済学部教授）では、演奏と講義、そして石本華江のダンス映像にサティのピアノ曲をコミネティ氏に弾いていただいた。教室でのモノ

創りの実践を示した。

これらの講義を踏まえて、2008年春学期には、3名の先生が、テーマをより深く極める講座を開陳する。

(小潟昭夫)

教養研究センター

規程

第1条 慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
 - 2 副所長 若干名
 - 3 所員 若干名
 - 4 研究員 若干名
 - 5 事務長
 - 6 職員 若干名
- ② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- ③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。
- ④ 所員は、原則として兼任所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。
- ⑤ 研究員は、特別研究教員(有期)、研究員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。
- ⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。
- ⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。
- ⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 ITC 所長
- 9 日吉キャンパス事務長
- 10 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムの企画・運営等に関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに対する付託事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するためにコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。

(小委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて小委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特別研究教員(有期)および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」

の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「塾外学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および職員の中から所長が委嘱する。

② 所長・副所長の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究で、運営委員会が審議、採択したもの。

2 一般研究：個人研究ならびに共同研究で、センターが必要と認めたもの。

3 特定研究：運営委員会の議を経て、センターが企画、立案、募集したもの。

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、研究支援センターの定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

教養研究センター

運営委員会委員 (敬称略)

2005年10月1日～2007年9月30日
第3期 (2007年度在籍者)

教養研究センター担当常任理事

西村 太良

教養研究センター所長 横山 千晶

教養研究センター副所長

近藤 明彦

岩波 敦子

佐藤 望(2006年4月から)

教養研究センター事務長

吉川 智江

文学部長 長谷山 彰(2007年4月から)

経済学部長 塩澤 修平

法学部長 小此木政夫

商学部長 桜本 光

医学部長 池田 康夫

理工学部長 真壁 利明(2007年4月から)

総合政策学部長 小島 朋之(2007年5月まで)

阿川 尚之(2007年6月から)

環境情報学部長 富田 勝

看護医療学部長 佐藤 蓉子

文学部日吉主任 坂上 貴之

経済学部日吉主任 羽田 功

法学部日吉主任 朝吹 亮二

商学部日吉主任 橋本 順一

医学部日吉主任 古野 泰二

理工学部日吉主任 大谷 弘道

日吉研究室運営委員会委員長

小淵 昭夫

教養研究センター基盤研究座長

(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)

伊藤 行雄

(身体知プロジェクト) 横山 千晶

特定研究代表 羽田 功

日吉行事企画委員会委員長

小菅 隼人

極東証券寄附講座運営委員会委員長

武藤 浩史

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

小淵 昭夫

日吉メディアセンター所長

伊藤 行雄

日吉 ITC 所長 中山 純

日吉キャンパス事務長 彦久保勝良(2006年4月から)

外国語教育研究センター所長

金田一真澄

日吉学事センター部長 栗谷 文治

日吉メディアセンター事務長

富山 優一

日吉事務運営サービス(総務)課長

酒井 秀明

2007年10月1日～2008年9月30日
第4期 (2007年度在籍者)

教養研究センター担当常任理事

西村 太良

教養研究センター所長 横山 千晶

教養研究センター副所長

中島 陽子(2008年3月まで)

萩原 眞一

佐藤 望

教養研究センター事務長

吉川 智江

文学部長 長谷山 彰

経済学部長 塩澤 修平

法学部長 国分 良成

商学部長 清家 篤

医学部長 末松 誠

理工学部長 真壁 利明

総合政策学部長 阿川 尚之

環境情報学部長 徳田 英幸

看護医療学部長 山下香枝子

文学部日吉主任 関根 謙

経済学部日吉主任 羽田 功

法学部日吉主任 朝吹 亮二

商学部日吉主任 渡部 睦夫

医学部日吉主任 古野 泰二

理工学部日吉主任 大谷 弘道

日吉研究室運営委員会委員長

小宮 英敏(2008年3月まで)

教養研究センター基盤研究座長

(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)

伊藤 行雄

(身体知プロジェクト) 横山 千晶

特定研究代表 羽田 功

日吉行事企画委員会委員長

小菅 隼人

極東証券寄附講座運営委員会委員長

武藤 浩史

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

小淵 昭夫

日吉メディアセンター所長

伊藤 行雄

日吉 ITC 所長 中山 純

日吉キャンパス事務長 彦久保勝良

外国語教育研究センター

境 一三

日吉学事センター 栗谷 文治(2007年10月まで)

富山 優一(2007年11月から)

日吉メディアセンター 富山 優一(2007年10月まで)

風間 茂彦(2007年11月から)

日吉事務運営サービス(総務)課長

酒井 秀明

教養研究センター

コーディネート・オフィス (敬称略)

コーディネート・オフィス

・責任者：横山千晶(所長・法)
 ・コーディネーター：坂本 光(文)、中島陽子(副所長・文)、小瀧昭夫(経)、伊藤行雄(経)、長田進(経)、境 一三(経、2007.10.1～)、羽田 功(経)、朝吹亮二(法)、鶴崎明彦(法)、武藤浩史(法)、佐藤望(副所長・商)、種村和史(商)、金田一真澄(理工、2007.9.30まで)、熊倉敬聡(理工)、小菅隼人(理工)、萩原眞一(副所長・理工)、彦久保勝良(キャンパス事務長)、吉川智江(教養研究セ)

広報担当

・責任者：佐藤 望(副所長・商)

教養研究センター事務局

吉川智江(事務長)、甲賀崇司、宮坂敦子、高橋純子

日吉行事企画委員会(HAPP)

委員長：小菅隼人(理工)

委員：坂本 光(文)、石井 明(経)、小瀧昭夫(経)、羽田 功(経)、下村 裕(法)、佐藤 望(副所長・商)、竹内美佳子(商)、森吉直子(商)、小宮 繁(理工)、石手 靖(体研)、河邊博史(保セ)、彦久保勝良(キャンパス事務長)、酒井秀明(運営サ)、土田平和(運営サ)、塚本いづみ(運営サ)、長田信夫(学事セ、2007.10.30まで)、湯川哲史(学事セ、2007.11.1～)、宮崎俊明(学総セ、2007.6.1～)、上野美代子(学総セ)、富山優一(日吉メディアセ、2007.10.30まで)、風間茂彦(日吉メディアセ、2007.11.1～)、石田恭子(日吉メディアセ)、日水邦昭(研究室)、林尚之(外国語教育研究セ)

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：武藤浩史(法)

委員：中島陽子(副所長・文)、鈴木晃仁(経)、竹内良雄(経)、鈴木 忠(医)、高桑和巳(理工)、吉田泰将(体研)、広瀬寛(保セ)、吉川智江(教養研究セ)、小磯勝人(大学出版会)

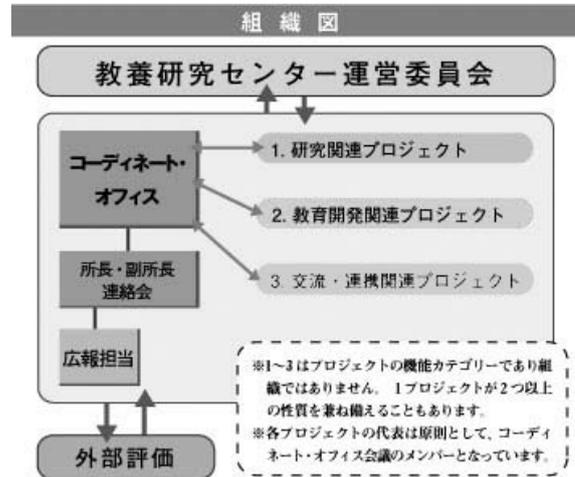
日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：小瀧昭夫(経)

委員：伊藤行雄(経)、村越貴代美(経)、山本賀代(経)、大和田俊之(法)、佐藤元状(法)、下村 裕(法)、Cominetti, Philippe(商)、福澤利彦(商)、荒金直人(理

工)、小磯勝人(大学出版会)

コーディネート・オフィス組織図



教養研究センター

所員・研究員 (敬称略)

○大学教養研究センター所長・副所長・事務長

任期：2006年10月1日～2008年9月30日

所長：横山千晶(法学部教授)

副所長：中島陽子(文学部教授)、佐藤 望(商学部教授)、萩原眞一(理工学部教授)

事務長：吉川智江

○大学教養研究センター所員

任期：2006年4月1日～2008年3月31日

専任教員 31名

法科大学院：六車 明(教授)

経済学部：新井拓児(准教授)、伊藤幹夫(准教授)、大平 哲(准教授)、小木曾啓示(教授)、戸瀬信之(教授)、中野泰志(教授)、林田 愛(専任講師)

法学部：井上逸兵(教授)、Narahashi-Henry, Nathalie(准教授)、宮下理恵子(准教授)

商学部：石原あえか(准教授)、Cominetti Philippe(専任講師)、深谷太香子(専任講師)、渡部睦夫(教授)

理工学部：石井一平(准教授)、石川史郎(准教授)、太田克弘(教授)、小田芳彰(専任講師)、金田一真澄(教授)、栗原将人(教授)、高桑和巳(専任講師)、高山正宏(助教)、谷 温之(教授)、田村明久(教授)、宮崎琢也(准教授)

国際センター：手塚千鶴子(教授)

志木高等学校：速水淳子(教諭)

湘南藤沢中等部・高等部：中平仁孝(教諭)

普通部：鈴木淑博(教諭)

幼稚舎：鈴木秀樹(教諭)

任期：2007年4月1日～2008年3月31日

専任教員 9名

文学部：上田修一(教授)、中島陽子(教授)

法学部：萱嶋泰成(助教)、佐藤元状(専任講師)、Henck,Nicholas J.(訪問准教授)

医学部：小林常利(教授)

理工学部：荒金直人(専任講師)、高山 緑(准教授)

外国語教育研究センター：倉館健一(専任講師)

任期：2007年4月1日～2009年3月31日

専任教員 167名

文学部：足立健次(准教授)、安藤寿康(教授)、大場茂(教授)、岡原正幸(准教授)、片木智年(教授)、金子洋之(教授)、倉田敬子(教授)、斎藤太郎(教授)、坂上貴之(教授)、坂田幸子(教授)、坂本 光(准教授)、関根 謙(教授)、高橋宣也(准教授)、高山博(教授)、徳永聡子(助教)、中村優治(教授)、西村太良(教授)、納富信留(准教授)、長谷山彰(教授)、辺見葉子(准教授)、増田直衛(教授)、八木章好(教授)、吉田恭子(助手)

経済学部：青木健一郎(教授)、厚地淳(教授)、池田薫(教授)、石井明(准教授)、石井康史(准教授)、伊藤行雄(教授)、Ainge, Michael W.(准教授)、小瀧昭夫(教授)、長田 進(准教授)、柏崎千佳子(准教授)、桂田昌紀(教授)、Gaboriaud, Marie(教授)、岸由二(教授)、工藤多香子(准教授)、Knaup, Hans Joachim(教授)、後平 隆(教授)、近藤光雄(教授)、境一三(教授)、佐々木由美(准教授)、志村明彦(准教授)、杉浦章介(教授)、杉岡洋子(教授)、鈴木晃仁(教授)、鈴木五郎(教授)、鈴木亮子(准教授)、鈴木直樹(教授)、竹内良雄(教授)、武山政直(准教授)、千田大介(准教授)、土屋博政(教授)、永井容子(准教授)、長沖暁子(准教授)、長堀祐造(教授)、中山純(教授)、西尾 修(教授)、西岡久美子(教授)、根岸宗一郎(准教授)、Notter, David M.(准教授)、羽田 功(教授)、Batty, Roger M.(教授)、光道隆(教授)、福山欣司(准教授)、不破有理(教授)、星 浩司(准教授)、Ballhatchet, Helen Julia(教授)、松岡和美(教授)、松原彰子(教授)、宮崎直哉(教授)、村越貴代美(教授)、八嶋由香利(准教授)

法学部：秋山豊子(教授)、朝吹亮二(教授)、磯崎敦

仁(専任講師)、岩谷十郎(教授)、鶴崎明彦(教授)、太田昭子(教授)、大出敦(専任講師)、大和田俊之(専任講師)、小野裕剛(専任講師)、加茂具樹(専任講師)、木保章(専任講師)、久我俊二(教授)、小瀬村誠治(教授)、小林宏充(教授)、迫村純男(教授)、志村 正(専任講師)、下村 裕(教授)、Schart, Michael (准教授)、鈴木恒男(教授)、鈴木 透(教授)、辻 幸夫(教授)、常山菜穂子(准教授)、本谷裕子(専任講師)、武藤浩史(教授)、安田 淳(教授)、Raeside, James M. (教授)、横山千晶(教授)

商学部：浅川順子(教授)、朝比奈 緑(教授)、牛島利明(教授)、小宮英敏(教授)、佐藤 望(教授)、識名章喜(教授)、白旗 優(准教授)、田上竜也(准教授)、竹内美佳子(准教授)、種村和史(教授)、橋本順一(教授)、長谷川由利子(准教授)、英 知明(教授)、福澤利彦(教授)、伏見岳志(専任講師)、森吉直子(准教授)、安田公美(准教授)、横山和加子(教授)

医学部：大石毅(助教)、小町谷尚子(准教授)、鈴木伸一(専任講師)、鈴木 忠(専任講師)、鈴木由紀(専任講師)、中澤英夫(助教)、三井隆久(准教授)

理工学部：石井達朗(教授)、岩波敦子(准教授)、大谷弘道(教授)、岡 浩太郎(教授)、小原京子(准教授)、亀谷幸生(准教授)、熊倉敬聡(教授)、小菅隼人(教授)、小宮 繁(専任講師)、近藤幸夫(准教授)、斎藤博昭(准教授)、坂川博宣(助教)、田中孝明(助教)、田村要造(准教授)、仲田 均(教授)、萩原眞一(教授)、広本勝也(教授)、北條彰宏(准教授)、堀田耕司(助教)、前島 信(教授)、前田吉昭(教授)、松本 緑(准教授)、森 泉(准教授)、森吉仁志(准教授)、横山由広(准教授)

総合政策学部：太田達也(専任講師)

環境情報学部：石崎 俊(教授)

保健管理センター：大野 裕(教授)、河辺博史(教授)、西村由貴(専任講師)、広瀬 寛(准教授)

体育研究所：石手 靖(准教授)、加藤大仁(准教授)、近藤明彦(教授)、野口和行(専任講師)、松田雅之(准教授)、村松 憲(専任講師)、村山光義(准教授)、

吉田泰将(准教授)

高等学校：大西 章(教諭)

普通部：今井英喜(教諭)、太田弘(教諭)

任期：2007年6月1日～2008年3月31日
専任教員 1名

法学部：井田三夫(教授)

任期：2007年6月1日～2009年3月31日
専任教員 1名

文学部：八木章好(教授)

任期：2007年7月1日～2009年3月31日
専任教員 2名

法学部：篠原俊吾(准教授)、新谷 崇(助教)

任期：2007年8月1日～2009年3月31日
専任教員 1名

文学部：北中淳子(助教)

○大学教養研究センター兼任研究員

任期：2007年4月1日～2008年3月31日
塾外研究者等 32名

丸山文綱(情報処理教育室講師(非常勤))、Babara Shipman(テキサス大学准教授)、児玉裕治(オハイオ州立大学教授)、Pol van Haeck(ポアチエ大学教授)、野田 工(日本大学工学部専任講師)、佐治伸郎(政策・メディア研究科博士課程)、藤井聖子(東京大学大学院総合文化教授)、佐藤弘明(専修大学商学部教授)、神野雅代(四天王寺国際仏教大学准教授)、天羽雅昭(群馬大学工学部准教授)、大森英樹(東京理科大学理工学部教授(非常勤))、名古屋 創(理工学研究科特別研究助教(非常勤)、坂倉杏介(DMC・特別研究講師)、田島 大(2007.3法務研究科修了2007.11司法修習生)、平岡亜紀子(2007.3法務研究科修了2007.11司法修習生)、林 志野(2007.3法務

研究科修了 2007.11 司法修習生)、石田栄美 (文学部講師 (非常勤))、三根慎二 (文学部講師 (非常勤))、汐崎順子 (文学部講師 (非常勤))、國本千裕 (文学研究科博士課程)、宮田洋輔 (文学研究科修士課程)、林 佐和子 (文学研究科修士課程)、小泉公乃 (文学研究科修士課程)、勝沼 聡 (商学部講師 (非常勤))、ヒョン・G・リュウ (リード大学教授)、佐谷眞木人 (恵泉女子学園大学人文学部教授)、湯川 武 (早稲田大学イスラーム地域研究所客員教授)、臼杵 陽 (日本女子大学文学部史学科教授)、妹尾堅一郎 (NPO 法人産学連携推進機構理事長)

小川佑二 (理工学研究科博士課程、2007 年 6 月から)
河野哲也 (玉川大学文学部准教授、2007 年 8 月から)
中島 智 (武蔵野美術大学非常勤講師、2007 年 8 月から)

2007年度の主な活動記録

Date	Contents
4	25日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅲ」開講 (春学期)
	26日 HAPP 入学歓迎行事 「藤山晃太郎 水芸・手妻」
	28日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 公開授業「子供へのいのちの教育」 (日野原重明)
	28日 学術フロンティア 「平成18年度超表象デジタル研究プロジェクト」 研究報告会
5	10日 HAPP 入学歓迎行事 林望氏講演会「英語で暮らしてみました」
	25日 学術フロンティア 「フィールドワークの現状と課題——中国国内での現地調査から」
6	13日 学術フロンティア <学塾としての慶應義塾2> 「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」 (金田一真澄教授)
	15日 学術フロンティア 第5回バリアフリーセミナー 「発達障害の世界を知る」
	18～22日 HAPP 入学歓迎行事 環境週間 パネルディスカッション・展示講演会など
	19日 HAPP 入学歓迎行事 インド音楽の夕べ
	20・25日 <教員サポート・ワークショップ> メディアリテラシーワークショップ1 メディアセンター・サービス活用術
	22日 学術フロンティア 実験授業第1回「Nation と記憶——戦後西ドイツを中心に」
	23日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 一般公開講座「サイエンス・カフェ1 クマムシの話」
	25日 HAPP 入学歓迎行事 フランス音楽祭1 「フランス・バロックの田園風景から」
30日 <シンポジウム>慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——改革への処方箋	
7	2日 HAPP 入学歓迎行事 フランス音楽祭2 「フランス音楽——異郷を奏でる」
	4日 HAPP 入学歓迎行事 フランス音楽祭3 「フランス合唱曲・オーケストラ音楽」
	6日 学術フロンティア <学塾としての慶應義塾3> 「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」 わたしの研究ノートから；文豪ゲーテのもうひとつの顔 (石原あえか准教授)
	6～13日 学術フロンティア <国外出張>導入教育に関する国際会議参加
8	6～11日 未来先導基金 「声プロジェクト」・「文学」夏季実験授業
9	1日 極東証券寄附講座 「アカデミック・スキルズⅡ・Ⅳ」開講(秋学期)
	1日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 一般公開講座 「サイエンス・カフェ2 小さなクラゲの世界」
	5日～15日 学術フロンティア <国外出張>導入教育に関する「芸術と福祉」国際会議講演ほか芸術教育・福祉教育調査
	26日～29日 HAPP 公募企画行事 演劇「フォルモサ！」
	26日～10月30日 HAPP 公募企画行事 「Media tooooo Real」
29日 日吉キャンパス公開講座「モノを創る」(12月8日まで全10回)	
10	10日 学術フロンティア <学塾としての慶應義塾4> 「塾生入門～ scientia、科学、サイヤンス」 クロスカルチャーが仕事になるまで——帰国子女という運命と向き合って (中山純教授)
	12日 HAPP 特別企画 「小栗康平監督 最新作の上映と対談」
	学術フロンティア 第6回バリアフリーセミナー 「発達障害のある青年の就労支援——大学における支援に期待したいこと——」
	15日 基盤研究 大学教育カリキュラム研究会(公開) 「セメスター制度を考える」
	20日 HAPP 公募企画行事 「和の刻——心への語りと調べ——」
	23日 教養研究センター運営委員会
	26日 学術フロンティア 実験授業第2回 「日本人と朝鮮語——隣国のことばをどう学んできたか」

Date	Contents
11	7日 基盤研究 身体知プロジェクト・慶應義塾義塾大学身体医文化論研究会 合同企画 講演会 「木下晋 生の深い淵から——老いの尊厳」
	7日 基盤研究 大学教育カリキュラム研究勉強会（公開）「副専攻制度・研究プロジェクト制度について」
	8日 HAPP 公募企画行事 「狂言ブートキャンプ～笑いの古典を体験～」
	10日 HAPP 秋の特別企画行事 「入江要介(尺八)・鮎沢京吾(三味線)リサイタル 来往舎 秋・空・響」
	10日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 一般公開講座「サイエンス・カフェ3 コケを探して：フィールドサイエンスの愉しみ」
	13日・16日 <教員サポート・ワークショップ>（フィールドワーク）「社会調査法 最初の一步」
	14日 基盤研究 身体知プロジェクト実験授業「アートで体をひらく、心をひらく」 スペシャル・ワークショップ「ダンスをしながら数学を学ぶ?! アートを学習に取り入れる新たな挑戦：模擬授業」
	16日 HAPP 公募企画行事 「音が紡ぐ旅路——勝井祐二×迫田悠 Duo ——」
	27日 <教員サポート・ワークショップ> メディアリテラシーワークショップ2 ベーシック編 「少人数セミナー授業での実践ワークショップ」
	29日 センター・ロゴ・コンペティション表彰式
	30日 基盤研究 身体知プロジェクト実験授業「アートで体をひらく、心をひらく」（2008年1月16日まで全3回）
	30日 座談会 「日吉キャンパスにおける教養と研究・教育のこれから」
	12
12日 基盤研究 大学教育カリキュラム研究勉強会（公開）「成績評価について」	
12日 基盤研究 身体知プロジェクト実験授業・ドラマ公演「Barefoot In The Park」（12月14日まで全3回）	
12日・17日 <教員サポート・ワークショップ> 「keio.jp 活用法——教育支援システム」	
13日 学術フロンティア <学塾としての慶應義塾5> 「バルサ、バルサ、バルサ!—サッカーから見るスペイン現代史— 1899-2007」	
15日 HAPP 特別企画 「塾長と日吉の森を歩こう」	
18日 学術フロンティア <学塾としての慶應義塾6> 「塾生入門～scientia、科学、サイヤンス」しなやかに生涯発達するひとのチカラに魅せられて	
19日 学術フロンティア 実験授業第3回「現代中国に見る民族意識の諸相」	
1	9日 創立150年記念未来先導基金事業・声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践 「慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会」
	21日 基盤研究 身体知プロジェクト研究報告会 「体をひらく、心をひらく——2006・2007年度の身体知実験授業を振り返って」
	23日 <教員サポート・ワークショップ> 「発達障害を抱える学生への関わり方」
	26日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 一般公開講座「サイエンス・カフェ4 融合する脳と機械」
2	5日 センター活動報告会(内部評価) 「活動を振り返って—教養研究センター、5歳7ヶ月——」
	6日 アカデミック・スキルズ「プレゼンテーション・コンペティション」
3	8日 センター活動報告会(外部評価) 「みいだす、つなげる、ひろげる——教養研究センターの過去・現在・未来」
	12日 センター運営委員会
	13日～14日 研究企画ボード合宿会議
	15日 極東証券寄附講座 「生命の教養学」 一般公開講座「サイエンス・カフェ5 うに! すし?!」

終わりに

2007年度の活動を振り返って

2007年度も教養研究センターでは様々な活動が展開されたが、まず特筆すべきは、運営委員会の下でセンターの活動を推進・統括してきたコーディネート・オフィスの運営体制をセクション制からプロジェクト制へと移行したことであろう。

コーディネート・オフィスは、開所以来、研究企画ボードを核とし、研究推進、交流・連携、広報・発信の3セクションおよび極東証券寄附講座運営委員会、日吉公開講座運営委員会、日吉行事企画委員会から構成され、3名の副所長がいずれかのセクションを担当する形で運営がなされてきた。2006年10月、2期目を迎えた横山所長を中心に、セクション制を廃止し、諸活動をプロジェクトとして直接コーディネート・オフィスの下に置き、センターの目的との整合性を図りながら、より有機的に相互の関連性をもたせること、新規プロジェクトを受入れる柔軟性を組織運営に取り入れること、コーディネート・オフィスの役割と機能を拡充することなどが提案された。センターの機能・役割を目的に準じて研究、教育開発、交流・連携に大別、それぞれにプロジェクトを重層的に位置づけた2007年度事業計画(案)の策定をもって、次年度はこの体制で運用することが2006年3月の運営委員会で承認された。2007年度には、規程の改正にも取り組み、コーディネート・オフィスの機能や構成員であるコーディネーターの記述の明確化等、各委員会での数回にわたる意見調整を経て、規程は改正された。

研究活動においては、センターの特定研究、「超表象デジタル研究」(文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業)が最終年度を迎え、教養教育の新たなモデル構築を目指した3年間の研究成果が集大成された。成果概要の提出日が目前に迫った9月は、拠点リーダーをはじめとする先生方には気迫と熱意が漲り、支援する事務局にとっても文字通りの暑い夏となった。最終成果報告書を提出し、2008年度には、その成果とセンターが長年培った教養教育の成果とを融合した、生命と宗教・民族問題をテーマとする2つの実験授業の開講が計画されている。

基盤研究のうち、2003年に端を発する「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」は、 Semester制や成績評価、副専攻など個別課題を取り上げた勉強会

教養研究センター事務長 吉川 智江

を開催、義塾の大学教育委員会では昨年度に引き続き研究報告を行い、学部を超えて共通カリキュラムの検討の必要性を提言した。その後、本学では日吉カリキュラム検討委員会が正式に発足するなど新たな動きが生まれている。一方、「身体知プロジェクト」は、月例会とともに秋には再び実験授業を開講した。義塾の創立150年を期して創設された未来先導基金には「声プロジェクト」が採択され、多彩な声を通して文学を体現する課外授業を開講するなど、理論と実践の両面から研究が進められた。一般研究は、所員の研究活動から7件が採択された。

新規に開設されたプロジェクトには、教員サポートワークショップがある。日吉地区のメディアセンター、ITC、学生総合センター等の協力を得て、各分野に精通する教職員が教員を対象に、進展する技術や環境、学生の実態や行動を紹介し、研究教育活動の場に活かしていただくというもので、今後も継続・進化させながら、学びの場そのものを考えるプロジェクトへと繋げていく予定である。

教育開発の側面では、極東証券寄附講座の「アカデミックスキルズⅠ、Ⅱ」を受講した学生を対象に、読む、書くに重点を置いた「Ⅲ、Ⅳ」クラスが設置され、次なる展開が検討されている。

交流・連携の場では、日吉キャンパス公開講座「モノを創る」に300名を超える参加申し込みが寄せられた。また、主に自然科学の研究を平易な言葉で紹介する極東証券寄附講座サイエンス・カフェは5回を開催し、大人から子供までに好評をいただいた。

こうして、所員200名を擁するに至った教養研究センターでは、3月、2002年の開所以降、初めての外部評価を受けた。評価委員は塾内から1名、塾外から5名、大学、研究機関など多方面からお集まりいただいた。励ましあり、苦言ありの評価内容は、今後活かすべく検討会の開催が企画されている。

近年、大学の社会に果たす役割として教育の重要性が再認識されている。それは、課題が山積する21世紀を生き抜くために、各大学がどのような学生を、どのような教育において世に送りだそうとしているのかが問われていることでもある。教養研究センターでは、先生方が教養教育の観点から、こうした課題に取り組んでこられた。今後も、その活躍を支えるべく事務局も共に歩を進めていきたい。

慶應義塾大学教養研究センター
2007年度 活動報告書

2008年7月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL.045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社

©2008 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。